

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 263

南方遺跡

岡山地方法務局本局庁舎新営に伴う発掘調査

2 0 2 3

岡山県教育委員会



1 調査区北半 江戸時代以降全景（北から）



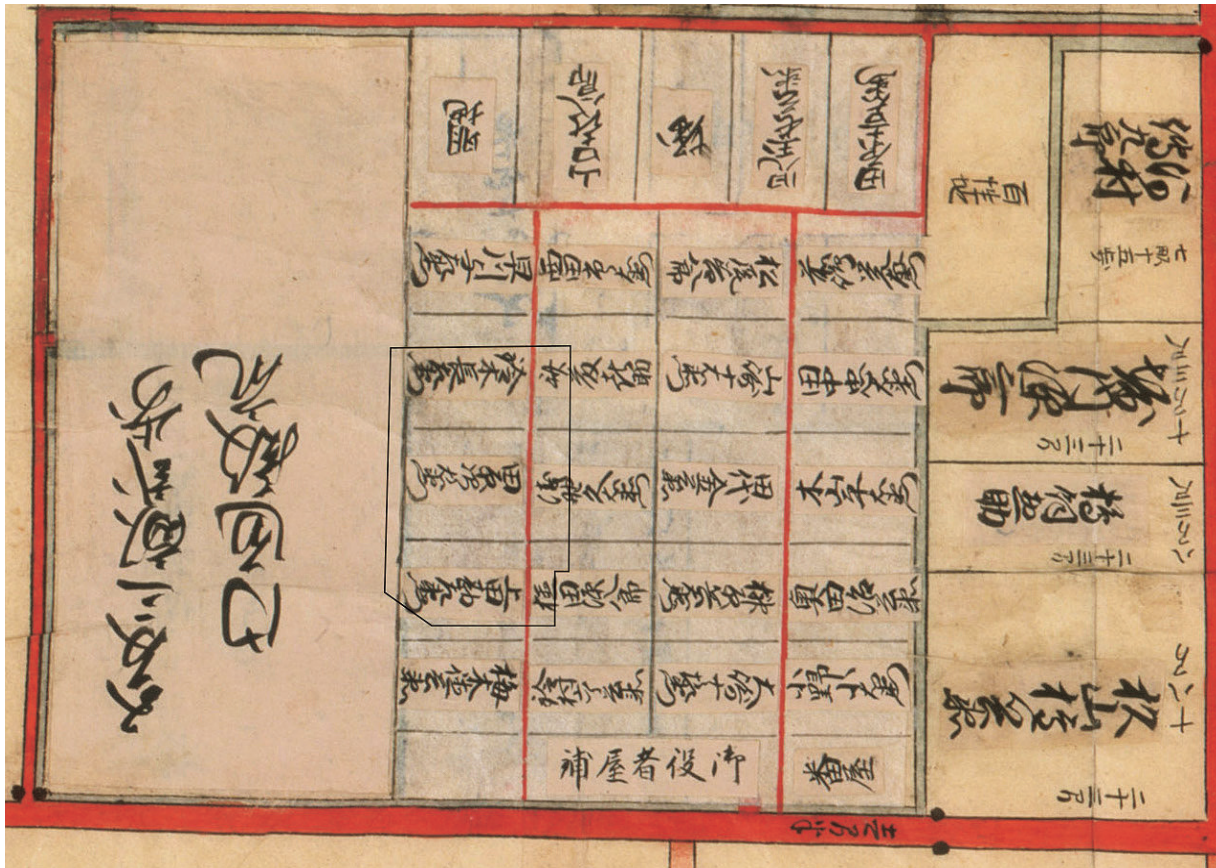
2 調査区南半 弥生時代全景（南から）



1 土坑 9 木器出土状況（北から）



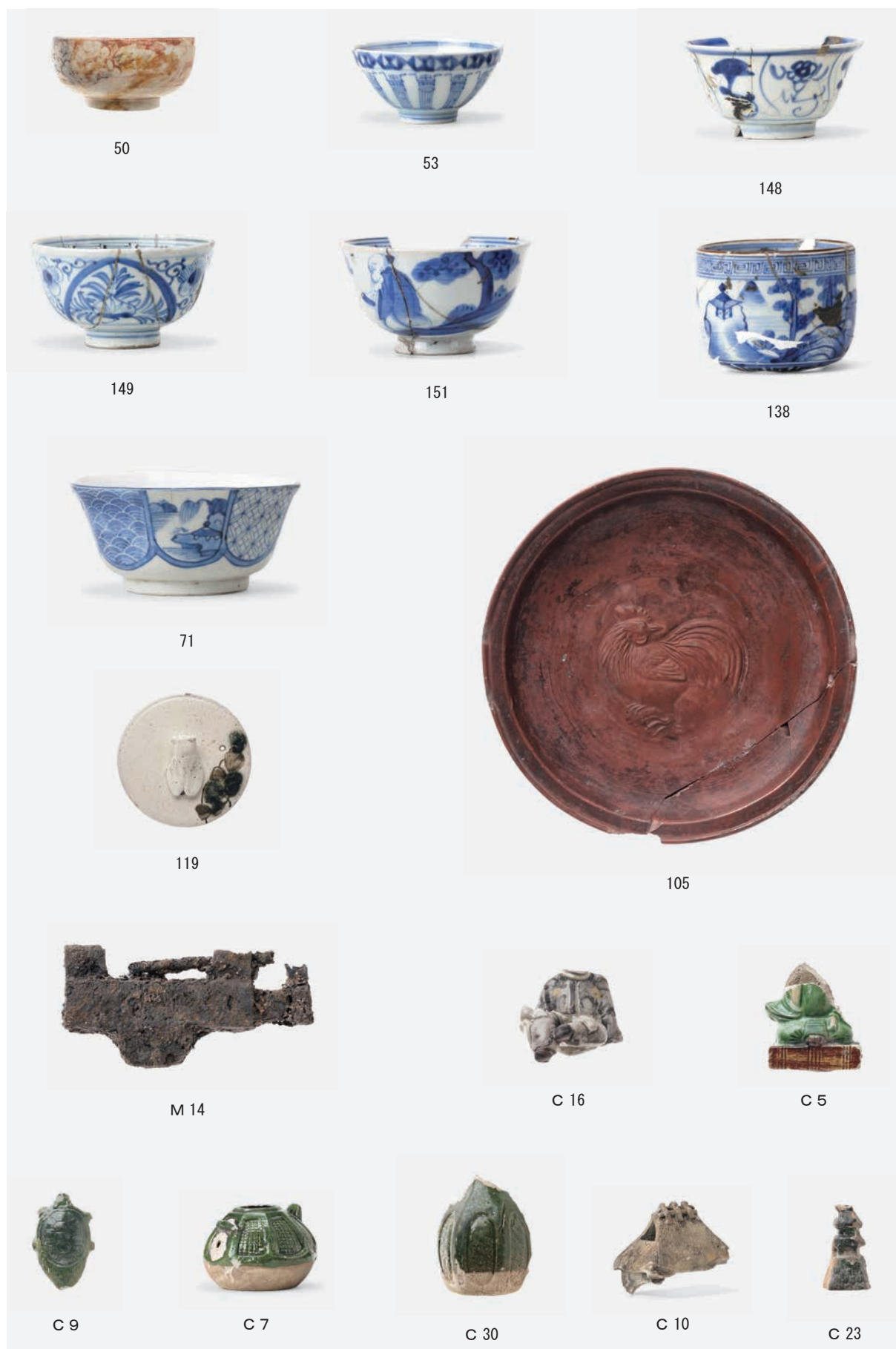
2 土坑 31 土層断面（北西から）



1 「岡山伊勢宮絵図」(宝永5(1708)年ごろ)における調査区想定位置



2 「備前岡山地理家宅一枚図」(文久元(1861)年)における調査区想定位置



土坑 50 ~ 52・54・57・59・60 出土遺物

序

本書は、岡山地方法務局本局庁舎新営に伴い発掘調査を実施した、南方遺跡の発掘調査報告書です。

南方遺跡は、古く大正時代に土器が採集されたことから瀬戸内地域の弥生時代中期中葉を代表する標式遺跡として全国的にも広く周知され、その後の発掘調査と研究で岡山県を代表する弥生時代中期の遺跡として著名になりました。

このたび、岡山地方法務局の本局庁舎が新営されることになり、建設予定地が周知の南方遺跡の範囲内に当たるため、県教育委員会ではこの予定地に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて関係機関と協議を重ねてまいりました。しかし、現状のまま保存することが困難なものについてはやむを得ず記録保存の措置を講ずることとし、発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、弥生時代後期の土坑群と、江戸時代の武家屋敷を構成する遺構の内容が明らかとなりました。弥生時代後期の土坑群は、平成 16 年の広島高裁岡山支部・岡山地家簡裁庁舎建て替えに伴う調査で 176 基以上が発見されましたが、同じような形状の土坑がさらに遺跡の西側へも分布することが分かり、南方遺跡の広がりを表すものとして注目されます。

これらの調査成果を収めた本書が、地域の歴史研究に寄与し、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成に当たりましては、岡山地方法務局をはじめとする関係機関や地域住民の皆様から御理解と御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和 5 年 3 月

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 大 橋 雅 也

例 言

- 1 本書は、岡山地方法務局本局庁舎新営に伴い、岡山県教育委員会が岡山地方法務局の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、南方遺跡の発掘調査報告書である。契約事項は文化財課が行い、発掘調査・報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。
- 2 発掘調査を実施した南方遺跡は、岡山市北区南方1丁目3-58ほかに所在する。
- 3 確認調査は、令和元年12月3～5日に文化財センター職員團 奈歩・後藤寛子が担当して実施した。調査面積は20 m²である。発掘調査は令和3年5月24日～令和4年3月31日に文化財センター職員氏平昭則・下 祐一郎が担当して実施した。調査面積は1,310 m²である。
- 4 本書の作成は令和3年度に氏平・下が、令和4年度に氏平が行った。
- 5 本書の執筆は、第2章第1節を文化財センター職員柴田英樹が行い、その他は氏平が担当した。全体の編集は氏平が行った。
- 6 本書の作成にあたり、遺物に関する鑑定・分析を以下の方に依頼し有益な教示を受けた。記して謝意を表する。
動物遺存体の同定 富岡直人（岡山理科大学）
- 7 以下の分析について、次の機関と業務委託契約を行い実施した。
植物遺体の樹種同定、土壌の花粉及び珪酸体分析の分析 パリノ・サーヴェイ株式会社
- 8 遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 9 本書に関連する遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度値は標高であり、挿図に示す北方位は平面直角座標Ⅴ系（世界測地系）の座標北を示し、挿図・報告書抄録の座標値・経緯度は世界測地系に準拠している。
- 2 各遺構・遺物実測図の縮尺率は、原則として下記のとおりである。
遺構 土坑：1/30・1/60 溝：1/30
遺物 土器・瓦類：1/4 木製品：1/4 金属製品：1/3・（銭貨）1/2 石製品：1/2
土製品：1/3
- 3 遺構番号は、遺構の種類ごとに通し番号を付している。
- 4 遺物番号は、陶磁器・土器類を除いて番号の頭に次の略号を付している。
瓦類：R 木製品：W 金属製品：M 石製品：S 土製品：C ガラス製品：G
- 5 掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、径が不確実であることを示している。
- 6 土層と遺物の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）、『新版 色の手帳』（永田泰弘監修 小学館 1986）に準拠している。
- 7 次の挿図は、国土地理院・岡山市発行の地形図を複製・加筆したものである。
第2図 電子地形図 25000（定形図郭版）「岡山北部」「岡山南部」
第3・54図 1/2,500 岡山市域図 157
- 8 本書で用いた時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分や世紀を併用している。弥生時代前期～古墳時代前期の時期区分上での表現については、津寺編年（「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104 岡山県教育委員会 1996）を用いている。

年代	時代	時期	津 寺		上 東	百間川	雄 町	高橋編年	田辺編年		
50	弥生時代	前期	津 島	弥・前・Ⅰ		百・前・Ⅰ		Ⅰ期	a		
				弥・前・Ⅱ		百・前・Ⅱ	雄町1	Ⅱ期	a		
				弥・前・Ⅲ		百・前・Ⅲ	雄町2	Ⅱ期	b		
		中期	南方	弥・中・Ⅰ		百・中・Ⅰ	雄町3	Ⅲ期	a		
				弥・中・Ⅱ		百・中・Ⅱ	雄町4	Ⅳ期	b		
			前山Ⅱ	弥・中・Ⅲ	鬼川市0	雄町5	Ⅴ期	a			
						雄町6	Ⅵ期	b			
			後期	上 東	弥・後・Ⅰ	鬼川市1	百・後・Ⅰ	雄町7	Ⅶ期	a	
					弥・後・Ⅱ	鬼川市2	百・後・Ⅱ	雄町8	Ⅶ期	b	
		弥・後・Ⅲ			鬼川市3	百・後・Ⅲ	雄町9	Ⅶ期	c		
		弥・後・Ⅳ			才ノ町1 才ノ町2	百・後・Ⅳ	雄町11 雄町12	Ⅸ期	a		
		酒 津			弥・後・Ⅳ	百・後・Ⅳ	雄町12	Ⅸ期	b		
		250	古墳時代	前期		古・前・Ⅰ	下 田 所	百・古・Ⅰ	雄町13	Ⅹ期	a
						古・前・Ⅱ	亀川上層	百・古・Ⅱ	雄町14	Ⅹ期	b
古・前・Ⅲ	川入大溝					百・古・Ⅲ		Ⅺ期	c		
Ⅺ期								d			
中期	古・中・Ⅰ						Ⅺ期	e			
	古・中・Ⅱ						Ⅺ期	b			
後期	古・後・Ⅰ						Ⅺ期	a			
	古・後・Ⅱ						Ⅺ期	b			
400	時 代									TK73 ～	
										TK208	
500								TK23 ～			
								TK47			
600								MT15 ～			
								TK10			
								TK43 ～			
								TK208			

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第 1 章 地理的・歴史的環境 1

第 2 章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯 3

第 2 節 発掘調査及び報告書作成の経過 4

第 3 節 日誌抄 5

第 4 節 発掘調査及び報告書作成の体制 5

第 3 章 発掘調査の成果

第 1 節 調査区の概要 7

第 2 節 弥生時代～室町時代の遺構と遺物 10

第 3 節 江戸時代以降の遺構と遺物 26

第 4 章 自然科学的分析

第 1 節 出土木材の樹種同定と土壌の微化石分析 パリノ・サーヴェイ株式会社 47

第 2 節 動物遺存体同定結果 岡山理科大学 富岡 直人 56

第 5 章 総括

第 1 節 弥生時代 59

第 2 節 江戸時代以降 63

遺構一覧・新旧対照表 遺物観察表 67

図版

報告書抄録

図 目 次

第 1 図	遺跡位置図 (1/1, 500, 000)	1	第 34 図	土坑 53 (1/60) ・ 出土遺物 (1/3)	36
第 2 図	周辺遺跡分布図 (1/25, 000)	2	第 35 図	土坑 54 (1/60) ・ 出土遺物 1 (1/4 ・ 1/3 ・ 1/2)	37
第 3 図	調査区位置図 (1/2, 500)	3	第 36 図	土坑 54 出土遺物 2 (1/3)	38
第 4 図	確認調査区 (1/100)	4	第 37 図	土坑 55 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	38
第 5 図	検出遺構全体図と土層柱状図 (平面 1/500 ・ 断面 1/100)	7	第 38 図	土坑 56 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	38
第 6 図	調査区西壁断面図 (1/80)	8	第 39 図	土坑 57 (1/30) ・ 出土遺物 1 (1/6 ・ 1/4 ・ 1/3 ・ 1/2)	39
第 7 図	調査区北壁・東壁断面図 (1/80)	9	第 40 図	土坑 57 出土遺物 2 (1/3)	40
第 8 図	弥生時代遺構全体図 (1/200)	10	第 41 図	土坑 58 (1/30)	40
第 9 図	土坑 1 ～ 4 (1/30 ・ 1/60)	11	第 42 図	土坑 59 (1/60) ・ 出土遺物 1 (1/4)	40
第 10 図	土坑 5 ～ 7 (1/30 ・ 1/60)	12	第 43 図	土坑 59 出土遺物 2 (1/4 ・ 1/3)	41
第 11 図	土坑 8 ・ 9 (1/60) ・ 出土遺物 (1/4 ・ 1/10)	13	第 44 図	土坑 60 (1/60) ・ 出土遺物 1 (1/4)	42
第 12 図	土坑 10 ～ 13 (1/30)	14	第 45 図	土坑 60 出土遺物 2 (1/4)	43
第 13 図	土坑 14 ・ 15 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	15	第 46 図	土坑 60 出土遺物 3 (1/4)	44
第 14 図	土坑 16 ～ 18 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	16	第 47 図	土坑 60 出土遺物 4 (1/4 ・ 1/3)	45
第 15 図	土坑 19 ～ 23 (1/30)	17	第 48 図	溝 1 (1/30) ・ 出土遺物 (1/2)	46
第 16 図	土坑 24 ～ 27 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	18	第 49 図	溝 2 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	46
第 17 図	土坑 28 ～ 32 (1/30)	19	第 50 図	溝 3 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	46
第 18 図	土坑 33 ～ 37 (1/30 ・ 1/60) ・ 出土遺物 (1/4)	20	第 51 図	花粉化石群集	51
第 19 図	土坑 38 ～ 42 (1/30 ・ 1/60) ・ 出土遺物 (1/4)	21	第 52 図	木材・植物珪酸体	54
第 20 図	土坑 43 ～ 46 (1/30)	22	第 53 図	花粉化石	55
第 21 図	土坑 47 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	23	第 54 図	弥生時代後期の調査区周辺と土層柱状図 (1/2, 500 ・ 1/60)	60
第 22 図	土坑 48 ・ 49 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	24	第 55 図	南方遺跡 (裁判所調査区) の袋状土坑 (調査区 位置 1/2000 ・ 配置図 1/500 ・ 土坑 1/100 ・ 遺 物 1/10)	61
第 23 図	包含層出土遺物 (1/4 ・ 1/3 ・ 1/2)	25	第 56 図	岡山城三之外曲輪跡・天瀬遺跡の粘土採掘土 坑 (配置図 1/500 ・ 土坑 1/100 ・ 土器 1/10)	62
第 24 図	江戸時代以降遺構全体図 (1/200)	26	第 57 図	『岡山伊勢宮絵図』と遺構配置図 (1/1, 000)	64
第 25 図	井戸 1 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4 ・ 1/3)	27	第 58 図	『備前岡山地理家宅一枚図』と遺構配置図 (1/1, 000)	64
第 26 図	井戸 2 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4 ・ 1/3)	28			
第 27 図	土坑 50 (1/60) ・ 出土遺物 1 (1/4)	29			
第 28 図	土坑 50 出土遺物 2 (1/4 ・ 1/3 ・ 1/2)	30			
第 29 図	土坑 51 (1/60) ・ 出土遺物 1 (1/4)	31			
第 30 図	土坑 51 出土遺物 2 (1/4)	32			
第 31 図	土坑 51 出土遺物 3 (1/4 ・ 1/3)	33			
第 32 図	土坑 52 (1/60) ・ 出土遺物 1 (1/4)	34			
第 33 図	土坑 52 出土遺物 2 (1/4 ・ 1/3 ・ 1/2)	35			

巻頭図版目次

巻頭図版 1

- 1 調査区北半 江戸時代以降全景（北から）
- 2 調査区南半 弥生時代全景（南から）

巻頭図版 2

- 1 土坑 9 木器出土状況（北から）
- 2 土坑 31 土層断面（北西から）

巻頭図版 3

- 1 「岡山伊勢宮絵図」（宝永 5（1708）年ごろ）における調査区想定位置
- 2 「備前岡山地理家宅一枚図」（文久元（1861）年）における調査区想定位置

巻頭図版 4

土坑 50 ～ 52・54・57・59・60 出土遺物

図版目次

- 図版 1 1 調査区北側 弥生時代全景（北から）
 2 調査区南側 弥生時代全景（北から）

- 図版 2 1 土坑 11 断面（北から）
 2 土坑 11 完掘（北から）
 3 土坑 14（東から）

- 図版 3 1 土坑 35 断面（北から）
 2 土坑 35 完掘（北から）
 3 土坑 47 遺物出土状況（東から）

- 図版 4 1 井戸 1（南から）
 2 井戸 2（南から）
 3 土坑 52（北から）

- 図版 5 1 土坑 51（北から）
 2 土坑 54（東から）

- 図版 6 1 土坑 57（北から）
 2 土坑 59（北から）
 3 土坑 60（東から）

- 図版 7 土坑 14・17・24・47・48、
 包含層出土遺物（弥生・古墳時代）

- 図版 8 土坑 9、井戸 2、土坑 50・51 出土遺物

- 図版 9 土坑 51・52・54・57 出土遺物

- 図版 10 土坑 59・60、溝 2 出土遺物

表 目 次

表 1	文化財保護法に基づく文書一覧	6
表 2	樹種同定結果	48
表 3	微化石分析試料	48
表 4	花粉分析結果	50

表 5	植物珪酸体分析結果	51
表 6	動物遺存体属性表（脊椎動物門）	56
表 7	動物遺存体属性表（軟体動物門）	57

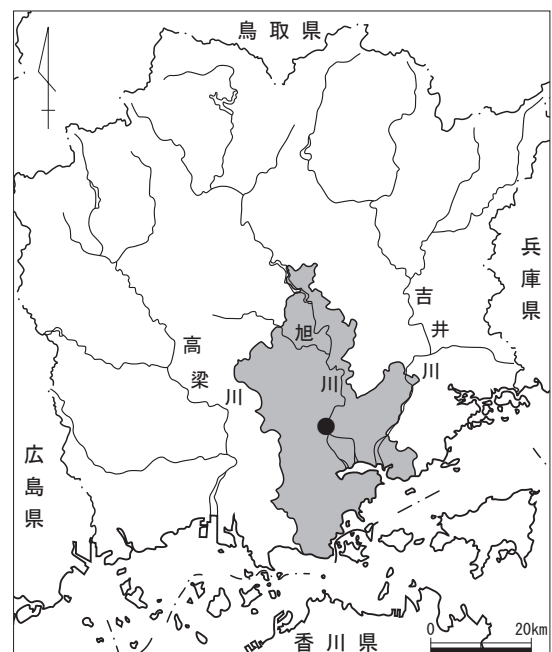
第1章 地理的・歴史的環境

南方遺跡は岡山平野北部の一角、西を標高 80 m の京山、北を標高 150 m 前後の半田山山塊、東を岡山県三大河川の一つ旭川で囲まれた部分に位置する。ここでは約 7,000 年前の縄文海進・海退以降、旭川の堆積により数多くの自然堤防が徐々に形成、河道・後背湿地と混在する地形が作られてきた。

縄文時代後期には津島岡大遺跡の北東部に竪穴住居が認められていた⁽¹⁾が、晩期には津島遺跡⁽²⁾で土器が出土しており、生活圏が南進している。弥生時代前期に入ると、津島遺跡から北方下沼・横田・地藏各遺跡にかけての広範囲に水田が検出されている⁽³⁾。南方遺跡は津島遺跡の南に位置する弥生時代中期を中心とする拠点集落で、大正時代から土器が採集され 1938 年の『弥生式土器聚成図録』⁽⁴⁾では瀬戸内地域の弥生時代中期中葉を代表する標式遺跡として広く周知された。1969 年からの市道移転工事に伴う発掘調査以降、数多く実施された発掘調査によって弥生前期後葉から中期後葉の集落の状況が明らかになっている⁽⁵⁾。弥生時代後期から古墳時代前半にかけて、津島遺跡で遺構が密集する最盛期を迎え、鹿田遺跡⁽⁶⁾・伊福定国前遺跡⁽⁷⁾などでも集落の拡大が確認できる。また、弥生時代後期から古墳時代中期には、京山・半田山山塊を中心に墳墓が造営され、旭川西岸地域の首長系列を追うことができる。中でも 4 世紀後半～5 世紀に位置づけられる神宮寺山古墳は、平地にある全長 150 m の前方後円墳で旭川西岸最大の規模を誇る⁽⁸⁾。しかし古墳時代後期となると津島遺跡などを除いて集落は減少し、半田山丘陵南側・京山周辺で横穴式石室墳は見られず、半田山丘陵北側以北で少数が見られるのみとなる。古代から中世は伊福定国前遺跡⁽⁹⁾・鹿田遺跡⁽¹⁰⁾・大供本町遺跡⁽¹¹⁾で集落が見られる。津島江道遺跡⁽¹²⁾では古代の官衙的施設が想定され、鹿田遺跡周辺は藤原摂関家殿下渡領の「鹿田荘」の比定地とされている。近世は、慶長 2 (1597) 年の宇喜多秀家の岡山城築城以降備前国の中心地となり、集落の再編と城下町の整備が行われた。調査区付近の南方遺跡の範囲は外堀と西川に挟まれ、南側は侍屋敷、北側は南方村で田畑が広がっていた。明治 15 (1882) 年ごろから外堀が埋められ、市街化が進んでいく。

註

- (1) 「津島岡大遺跡 16」- 第 17・22 次調査 - [環境理工学部棟新営] 『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第 21 冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2005
- (2) 「津島遺跡 1」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』137 岡山県教育委員会 1999
- (3) 「津島遺跡 2・4」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151・173 岡山県教育委員会 2000・2003
- (4) 森本六爾・小林行雄 編 『弥生式土器聚成図録』 正編・正編解説 東京考古学会 1938・1939
- (5) 発掘調査を総括したものに以下の報告書がある。安川 満 「南方弥生集落の構造と変遷」 『南方遺跡 - 岡山済生会総合病院新病院建設に伴う発掘調査 - < 第 3 分冊 >』 岡山市教育委員会 2018
- (6) 「鹿田遺跡 I」 『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988
- (7) 「伊福定国前遺跡 2」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』188 岡山県教育委員会 2005
- (8) 「神宮寺山古墳」 『岡山県史』 第 18 巻考古資料編 1988



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)

第1章 地理的・歴史的環境

- (9) 「伊福定国前遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』224 岡山市教育委員会 2010
 (10) 「鹿田遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』210 岡山市教育委員会 2007
 (11) 『大供本町（鹿田小）遺跡』岡山市教育委員会 2018
 (12) 「津島江道遺跡」『岡山市埋蔵文化財報告』18 1988



1 南方遺跡 2 絵図遺跡 3 津島遺跡 4 上伊福遺跡 5 上伊福・伊福定国前遺跡 6 上伊福（立花）遺跡
 7 上伊福西・尾針神社南遺跡 8 津島新野遺跡 9 津島岡大遺跡 10 北方下沼・横田・中溝・地蔵・薮ノ内遺跡
 11 津島江道遺跡 12 神宮寺山古墳 13 北方長田遺跡 14 一本松古墳群 15 津島東遺跡 16 都月坂墳墓群
 17 七つ丸古墳群 18 津倉古墳 19 天瀬遺跡 20 鹿田遺跡 21 大供本町・東浦遺跡 22 百間川一の荒手及び背割堤・二の荒手 23 岡山城三之外曲輪跡（岡山中央中学）

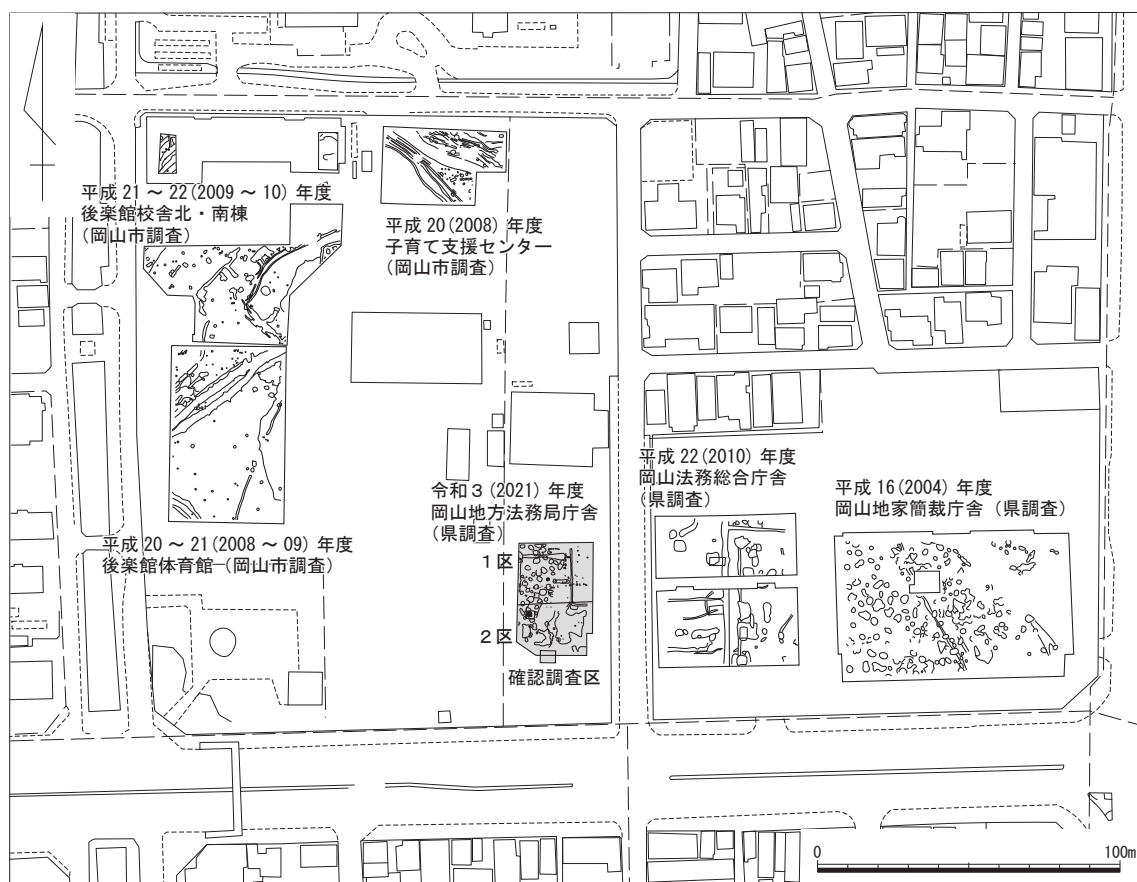
第2図 周辺遺跡分布図（1/25,000）

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

法務省岡山地方法務局と国土交通省中国地方整備局（以下、両機関という）は、平成30年8月、法務局本局庁舎（岡山市北区南方1-3-102）の老朽化による庁舎新営計画に当たり、敷地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて県文化財課と協議を始めた。協議を重ねた結果、令和2年12月に解体撤去を完了させ、令和3年度末から新営工事に取り掛かる計画で事業を進めることになったため、県文化財課は確認調査の実施について両機関に協力を求め、建物が現存する中で唯一調査可能であった駐車場にトレンチを設定して、令和元年12月3～5日に確認調査を実施した。

その結果を受けて県文化財課は、やむを得ず新営工事前に記録保存の措置が必要と判断し、令和2年12月には、同年11月に提出された新営工事についての文化財保護法第94条に基づく埋蔵文化財発掘の通知に対して岡山地方法務局長に発掘調査実施を勧告するとともに、再度両機関に協力を求めた。また、基礎撤去の掘削については県文化財課が立会調査を行い、令和3年3月中旬までにGL-135cmまでの基礎及び残土撤去が完了し、令和3年度から発掘調査を開始した。（柴田英樹）



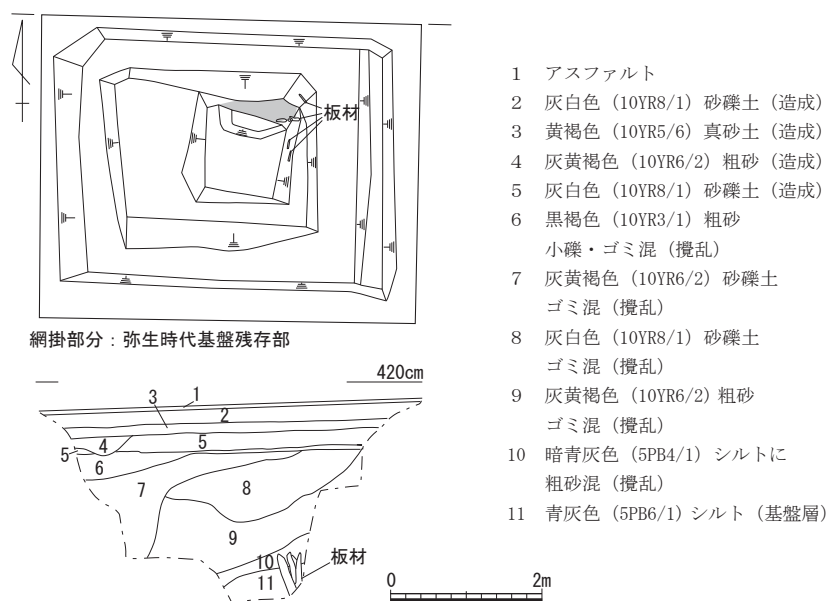
第3図 調査区位置図（1/2,500）

第2節 発掘調査及び報告書作成の経過

1 確認調査

遺跡の内容把握を目的として、確認調査を実施した。調査区は既存建物を避けて、その南側の事業予定地南端にあたる部分に東西5m×南北4mの範囲で設定した。現地表の標高は3.9mで、そこから現代の攪乱が標高1.5m以下にまで及んでいた。北東隅のわずかな部分に標高1.7m付近で弥生時代と考えられる基盤層を確認し、上層から打ち込まれた長さ50cmを超える板材を検出した。その並びが東隣の法務総合庁舎調査区で検出された江戸時代屋敷地の地割方向と合致することから、江戸時代の遺構の一部と考えられる。遺物は出土していない。

攪乱の及ぶ深度は、調査区内の南側で標高1.2m、北側で標高1.7mであり、事業予定地内では標高1.7m前後で検出される江戸時代等の遺構は残存している可能性があった。この調査では弥生・古墳時代の遺構の有無については確認できなかったが、周辺の調査から遺構の存在が予想された。



第4図 確認調査区 (1/100)

2 発掘調査と報告書作成の経過

発掘調査は、計画建物範囲を南北2つの調査区に分け、まず北側の1区を調査し、終了後に造成土と調査排土を1区内へ移動して南側の2区の調査を行う計画で開始した。調査総面積は1,310㎡である。調査期間は、令和3年8月から翌年2月までの7か月、調査員2名が担当した。調査範囲はG.L.-135cm (標高約2.5m) まで造成土を撤去されていたが、東隣の法務総合庁舎調査区の成果を参照し、標高2m近くまで残りの造成土と堆積土を重機で除去して発掘調査へ備えた。8月の酷暑の中、1区の包含層掘削、遺構検出及び江戸時代以降の遺構掘り下げから調査を開始した。調査中、調査区端に設定した排水溝を精査したところ土坑が複数検出され、調査区の西側半分で平成16年調査と同様の弥生時代土坑群が存在することが明らかとなった。また、江戸時代遺構面と弥生時代遺構検出面間が50cm以上になること、その間に遺構が確認できないことが分かり、堆積土の一部を小型の重機で除去した。土坑群は人力掘削で完掘し、排土置き場に余裕があったため1区西端の一部を埋め戻さずに2区の調査へ移行した。なお2区南西・南東端の一部は重機及び人員の進入路確保のため掘削を見送っている。本来なら調査成果を公開するため現地説明会を開催するところだが、コロナ禍のため

断念せざるを得なかった。現地での記録保存終了後に埋め戻しを行い、調査を完了した。

報告書作成作業は、令和3年11月から発掘調査担当者2名が調査と並行し、令和4年4月からは整理担当者1名が専従して岡山県古代吉備文化財センターにおいて実施した。出土遺物の洗浄・注記をセンター及び現場事務所で実施し、その後センターで出土遺物の接合・復元及び遺物の抽出と実測を行った。遺構図面の整理・下図作成は調査員が行った。掲載遺物は、江戸時代の遺物は多岐多数に及ぶため遺構出土遺物を中心に掲載し、近代以降の遺物の掲載は一部に止めた。包含層出土遺物は室町時代以前を中心に掲載し、江戸時代以降は省略している。

第3節 日誌抄

令和元年度（確認調査）	11月15日（月） 2区重機掘削開始、2区調査開始
令和元年	12月20日（月） 2区堆積層重機掘削
12月3日（火） 資材搬入、確認調査開始	令和4年
12月5日（木） 資材撤収、確認調査終了	2月16日（水） ラジコンヘリによる2区空中写真撮影
令和3年度（発掘調査・報告書作成）	2月18日（金） 1・2区調査終了
令和3年	2月21日（月） 1・2区重機埋め戻し
5月24日（月） 発掘調査事業開始	3月31日（木） 発掘調査・報告書作成事業終了
7月28日（水） 1区重機掘削開始	令和4年度（報告書作成）
8月2日（月） 発掘資材搬入、1区調査開始	4月1日（金） 報告書作成事業開始
10月15日（金） ドローンによる1区空中写真撮影	令和5年
10月20日（水） 1区堆積層重機掘削	3月31日（金） 報告書作成事業終了
11月1日（月） 報告書作成事業開始	

第4節 発掘調査及び報告書作成の体制

令和元年度	主 任	東 恵子
岡山県教育委員会	主 任	多賀 克仁
教 育 長	＜調査第一課＞	
岡山県教育庁	課 長	高田恭一郎
教育次長	総括副参事（第一班長）	金田 善敬
文化財課	主 幹	團 奈歩 （確認調査担当）
課 長	＜調査第三課＞	
参 事（文化財保存・活用担当）	主 事	後藤 寛子 （確認調査担当）
総括副参事（埋蔵文化財班長）		
主 幹		
主 任		
岡山県古代吉備文化財センター	令和3年度	
所 長	岡山県教育委員会	
次 長（総務課長事務取扱）	教 育 長	鍵本 芳明
参 事（文化財保護担当）	岡山県教育庁	
＜総務課＞	教育次長	池永 亘
総括主幹（総務班長）		

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

文化財課

課長	小林 伸明
副参事（文化財保存・活用担当）	尾上 元規
総括主幹（埋蔵文化財班長）	河合 忍
主幹	松尾 佳子
主事	九富 一
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	大橋 雅也
次長（総務課長事務取扱）	浅野 勝弘
参事（文化財保護担当）	亀山 行雄
＜総務課＞	
総括主幹（総務班長）	多賀 克仁
主任	井上 裕子
＜調査第三課＞	
課長	弘田 和司
総括副参事（第二班長）	氏平 昭則
	（発掘調査・報告書作成担当）
主事	下 祐一朗
	（発掘調査・報告書作成担当）

令和4年度

岡山県教育委員会	
教育長	鍵本 芳明
岡山県教育庁	
教育次長	浮田信太郎
文化財課	
課長	江草 大作
副課長（文化財保存・活用担当）	尾上 元規
総括副参事（埋蔵文化財班長）	河合 忍
副参事	松尾 佳子
主事	金田 涼
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	大橋 雅也
次長（総務課長事務取扱）	浅野 勝弘
参事（文化財保護担当）	柴田 英樹
＜総務課＞	
総括副参事（総務班長）	福池 光修
主幹	井上 裕子
＜調査第二課＞	
課長	弘田 和司
総括副参事（第一班長）	米田 克彦
副参事	氏平 昭則
	（報告書作成担当）

表1 文化財保護法に基づく文書一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

文書番号 日付	周知・ 周知外	遺跡の名称 時代・種類	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地の 有無	報告者	担当者	期間
岡吉調 第109号 R1.12.11	周知	南方遺跡 近世集落跡	岡山市北区 南方1丁目 3-102	20	その他建物 (庁舎)	有	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	團 奈歩 後藤 寛子	R 1.12.3 ～ 5

埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

文書番号 日付	周知・ 周知外	遺跡の名称 時代・種類	所在地	目的	通知者	通知日	主な勧告事項
教文埋 第1258号 R 2.12.1	周知	南方遺跡 弥生～近世集落跡	岡山市北区 南方	その他建物（庁舎 建設）	岡山地方法務局長	R2.11.25	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

文書番号 日付	遺跡の名称 時代・種類	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
岡吉調 第88号 R3.8.2	南方遺跡 弥生～古墳時代、近世 集落跡、武家屋敷跡	岡山市北区 南方1丁目 3-58	1,310	その他建物 (庁舎)	岡山県古代吉備文 化財センター所長	氏平昭則 下 祐一朗	R 3.8.2 ～ R 4.2.28

埋蔵文化財発見通知（法第100条第2項）

文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文埋 第1797号 R 4.2.22	弥生土器・土師器・須恵器・陶 磁器・瓦・石器・鉄器・木製品 計整理箱42箱	岡山市北区南方1 丁目3-58	R 3.8.1 ～R 4.2.18	岡山県教育委員 会教育長	法務省	岡山県古代吉備 文化財センター

第3章 発掘調査の成果

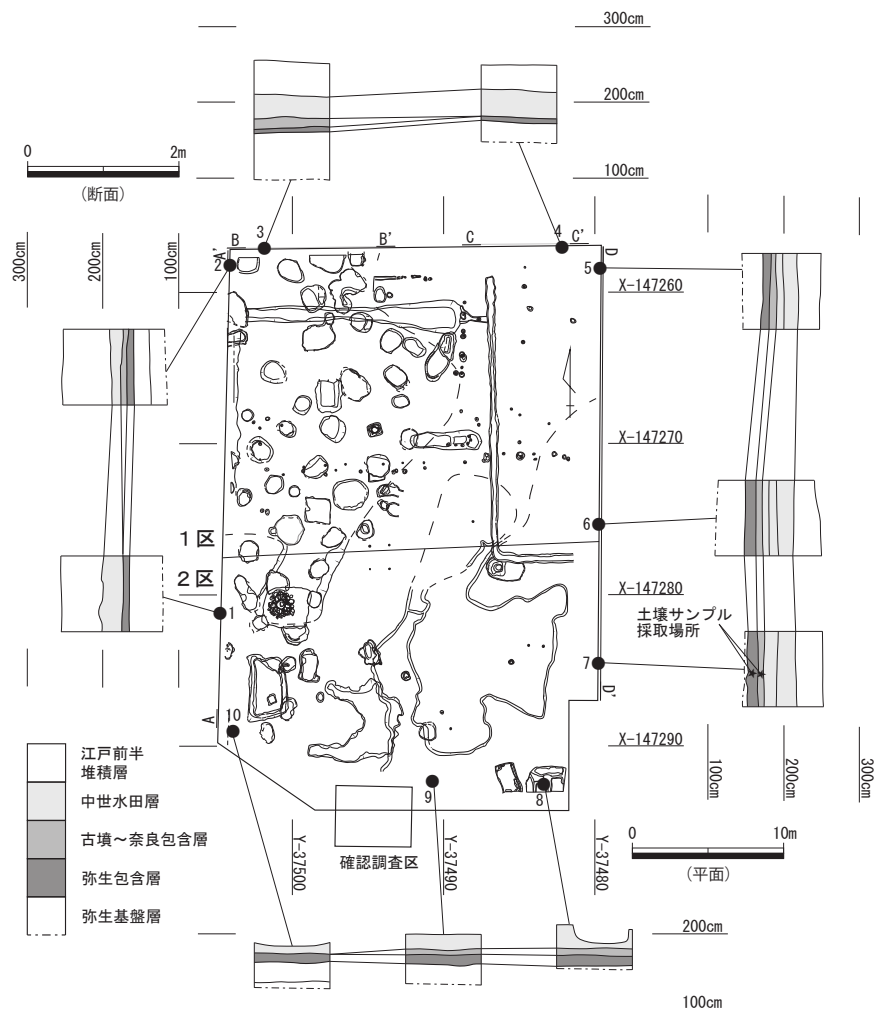
第1節 調査区の概要

調査区は建物建築部分全体を2分割し、北側を1区、南側を2区として調査を行った。遺構は調査区ごと検出順に遺構番号を付けて調査した。確認調査は既存建物を避けて実施したため、一部が調査範囲から外れている。調査区内には既存建物に伴うコンクリート基礎杭が残存していたが、これを除去すれば周辺の遺構に影響を及ぼす可能性が高いことから、撤去せずに調査を行っている。

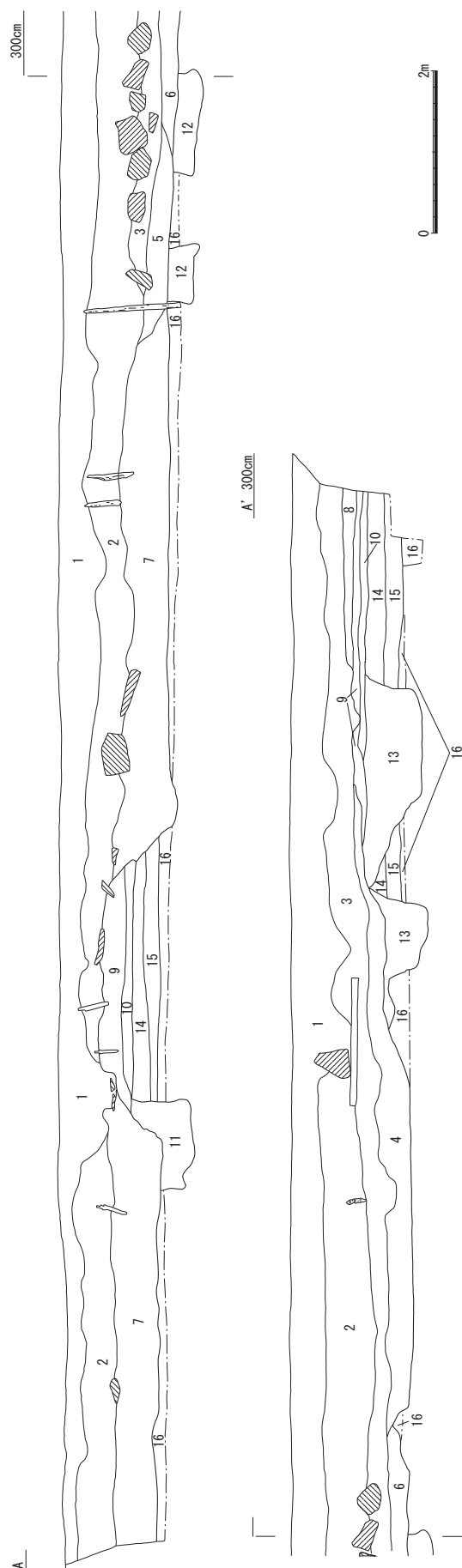
調査区内の層位は以下の通りである。現代造成土が地表から標高250cm（南壁では200cm）まで存在した。さらに既存建物建設時の攪乱が、北壁B'とCの間では標高170cmまで、南壁柱状図位置9の西側（確認調査と重複する部分）では150cmまで、調査区内土坑9上部では標高100cmまで及んでいた。造成土の下には、江戸時代後半～近代の遺構が検出されている。これらの遺構の基盤層は砂質の強い堆積層で、標高220cmまで存在し、厚さは調査区東壁で40cm程度を測る。遺物は確認できなかったが、下層との関連から江戸時代前半までの堆積層と想定した。

この層の下、標高170～180cmまでに黄灰色シルト層が1～3層存在する。土師器高台付碗片などを含む包含層で、遺物と堆積状況より中世水田層の可能性が高い。その下の灰色～黄灰色シルト層は古墳時代～奈良時代相当かと思われる。遺物は明確に判別できなかったが、包含層遺物には該当期の須恵器なども存在する。

その下に、黄灰色～



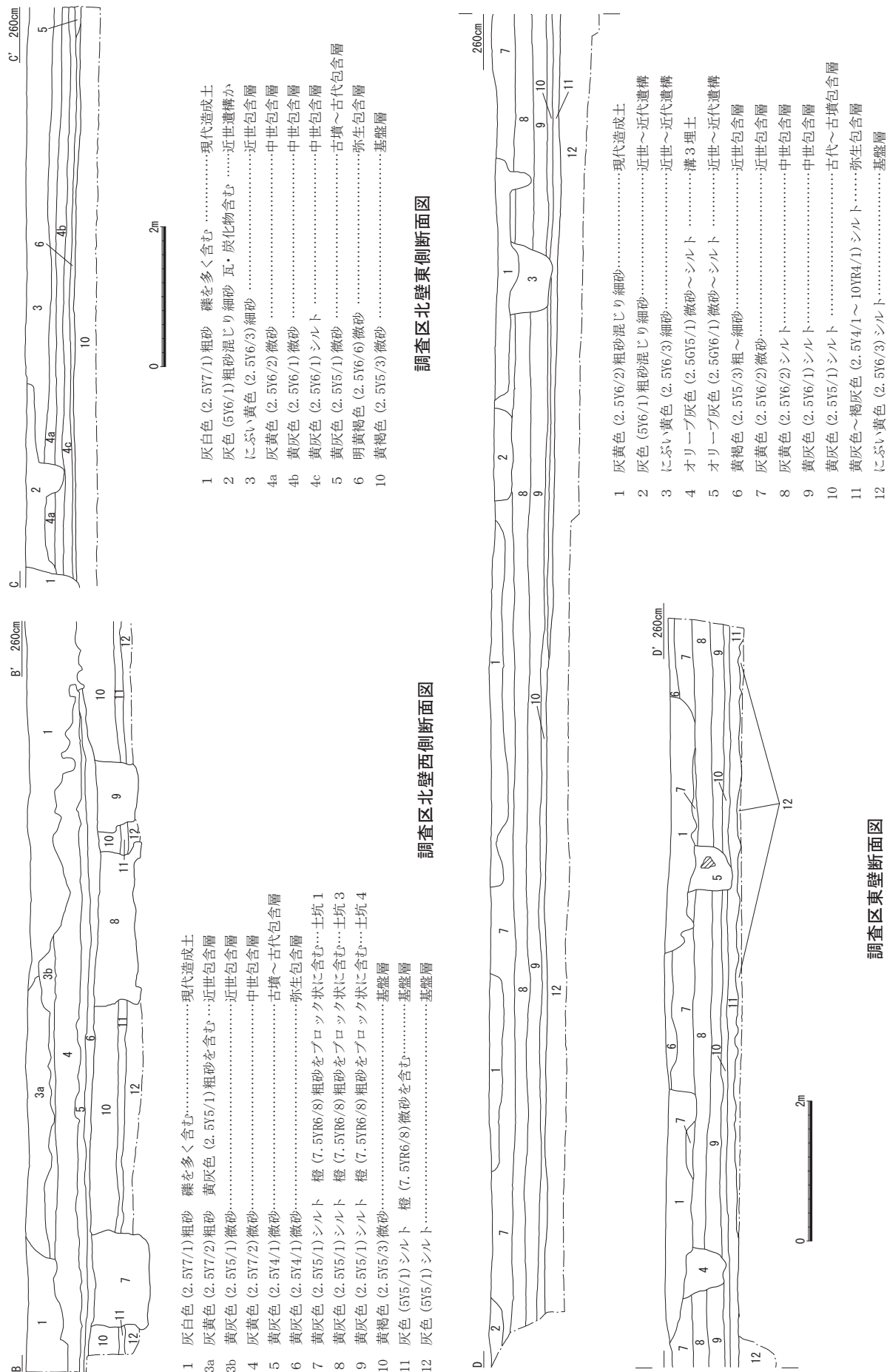
第5図 検出遺構全体図と土層柱状図（平面 1/500・断面 1/100）



褐灰色シルト～微砂で弥生時代中期の遺物を含む弥生時代包含層がある。この層は、調査区北東側では後世の削平のためか消失している。包含層の直下が弥生時代基盤層である。基盤層の上面の標高は、西壁では江戸時代の溝1の削平があるが北側では標高160cm、南側は165cmと後述の窪地1最下部より若干高い。北壁では西端で160cmだが、最高所はC-C'断面のCの部分で180cmに達し東端で175cmとやや下がる。東壁は北から約10mまで弥生包含層が削られ、その標高が170cmを示し、さらに南は後述の窪地2で南端が160cmになる。南壁は窪地2内で、東端が標高150cm、中央～西端へ高くなり160cmとなる。基盤層をさらに掘り下げると、シルト質が強くなり色調が徐々に青灰色を帯びて粗砂がブロック状に混ざる。窪地の土坑底面では標高70cm台から若干の湧水が見られる。

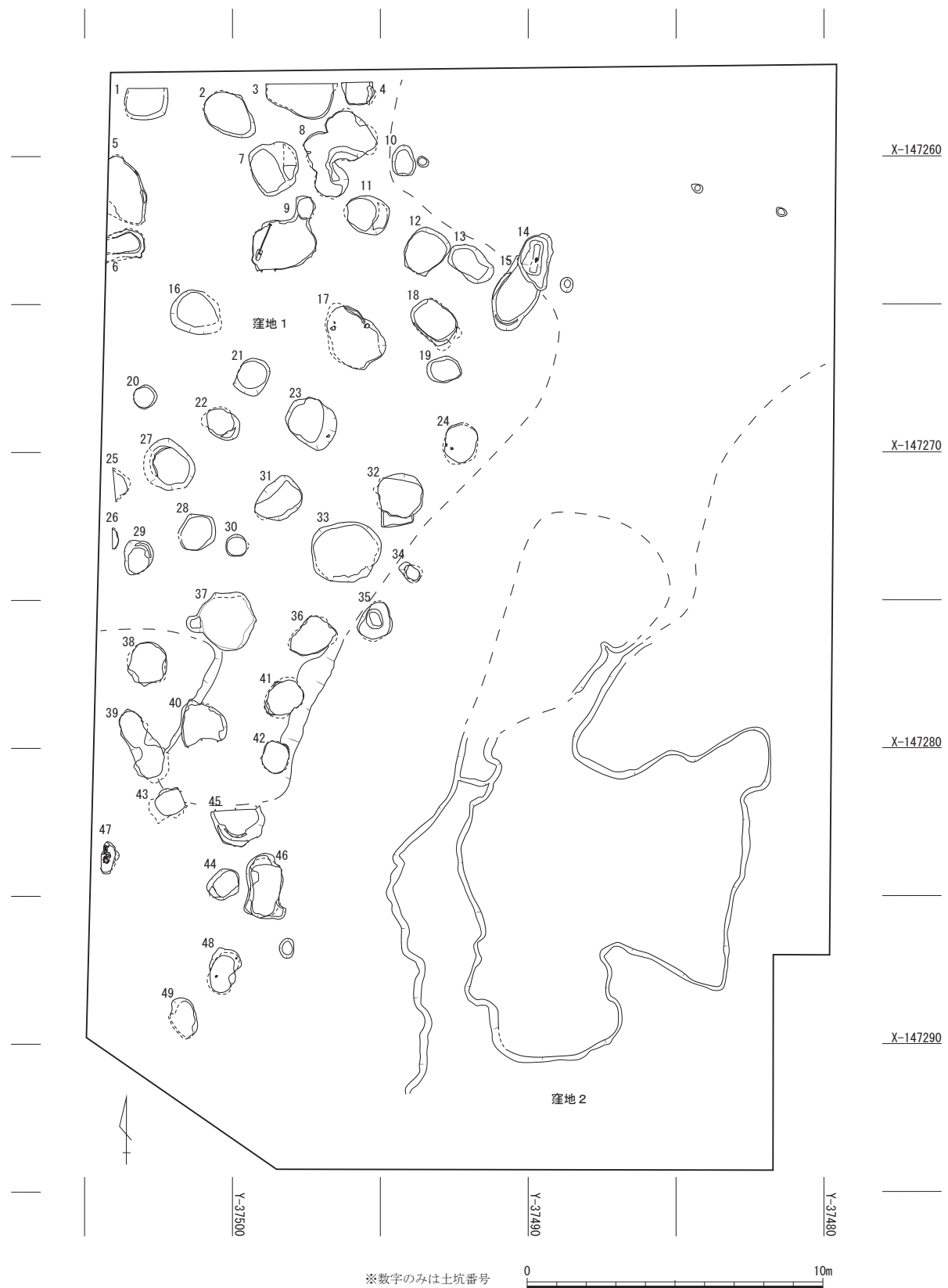
- | | | |
|----|--|-----------|
| 1 | 現代造成土(礫、コンクリート片、木片など多く含む) | 溝1埋土 |
| 2 | 灰色(5Y4/1)砂(礫・木片など多く含む 部分的に緑灰色砂挟む) | 溝1埋土 |
| 3 | 灰色(5Y5/1)微砂～シルト(植物遺体、緑灰～オリープ灰色微砂シルトを斑状に多く含む) | 溝1埋土 |
| 4 | オリープ灰色(2.5GY5/1)シルト | 溝1埋土 |
| 5 | 灰色(10Y5/1)微砂～シルト(灰色シルトを斑状に含む 植物遺体多く含む) | 溝1埋土 |
| 6 | オリープ灰色(2.5GY6/1)シルト(灰色シルトを斑状に多く含む) | 溝1埋土 |
| 7 | 灰オリープ色(7.5Y6/2)粗砂(植物遺体多くラミナ状に含む) | 溝1埋土 |
| 8 | 灰色(10Y6/1)微砂～シルト | 中世包含層 |
| 9 | 青灰色(5BG5/1)粗砂～シルト | 中世包含層 |
| 10 | 黄灰色(2.5Y4/1)シルト(東壁の10層に対応、鉄分沈着) | 古墳～古代包含層 |
| 11 | 灰色(7.5Y4/1)シルト(オリープ灰色シルトを斑状に多く含む) | 土坑47埋土 |
| 12 | オリープ黒色(7.5Y4/1～N4/1)シルト(灰色(7.5Y5/1)細～粗砂ブロック含む) | 土坑25・26埋土 |
| 13 | 灰色(7.5Y4/1)シルト(緑灰色シルトを斑状に含む) | 土坑5・6埋土 |
| 14 | 灰オリープ色(5Y5/2)シルト(鉄分沈着) | 基盤層 |
| 15 | 灰色(5Y5/1)シルト(鉄分・マンガンを多く沈着) | 基盤層 |
| 16 | オリープ灰色(2.5GY6/1)～灰オリープ色(7.5Y6/2)シルト(鉄分沈着) | 基盤層 |

第6図 調査区西壁断面図(1/80)



第7図 調査区北壁・東壁断面図 (1/80)

第2節 弥生時代～室町時代の遺構と遺物



第8図 弥生時代遺構全体図 (1/200)

1 概要

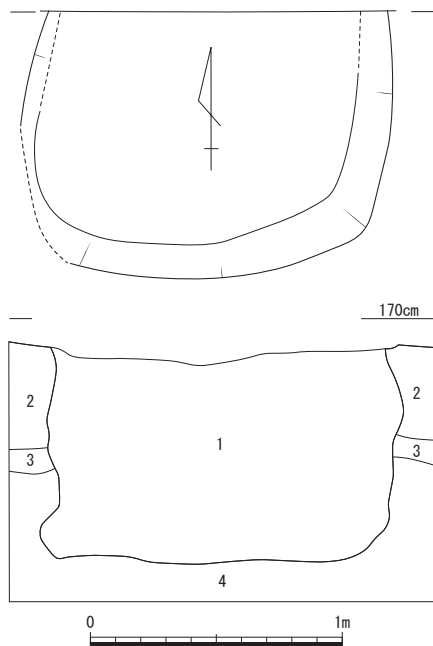
江戸時代以前は弥生時代の基盤層上面まで遺構は認められない。基盤層上面では、弥生時代後期の土坑49基とピット5基を検出した。基盤層の標高160cmより低い部分を窪地と呼称し、西側の窪地1と南東部の窪地2に分かれる。窪地1は調査区北西端から南端は土坑45付近までで、底面の標高は調査区北端で150cm、調査区中程の土坑41周辺で140cmを測る。窪地2は調査区南東部で不整形な平面を示し、底面の標高が北で155cm、南で150cmと北から南へ低くなる傾向である。窪地1・2からは土器片が少量出土している。土坑は調査区西半分に偏り、窪地1とほぼ重複する形で位置する。窪地以外の基盤層上面の遺構は少なく、最大径40～68cm、深さ6～10cmのピット5基が見られた。

2 遺構・遺物

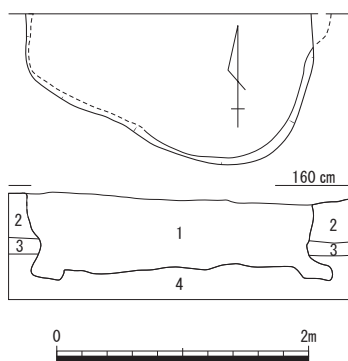
土坑1～7（第9・10図）

土坑1は調査区北西端に位置し、底面の西側を若干外側へ掘り広げる。土坑2は土坑1の東隣で、底面北

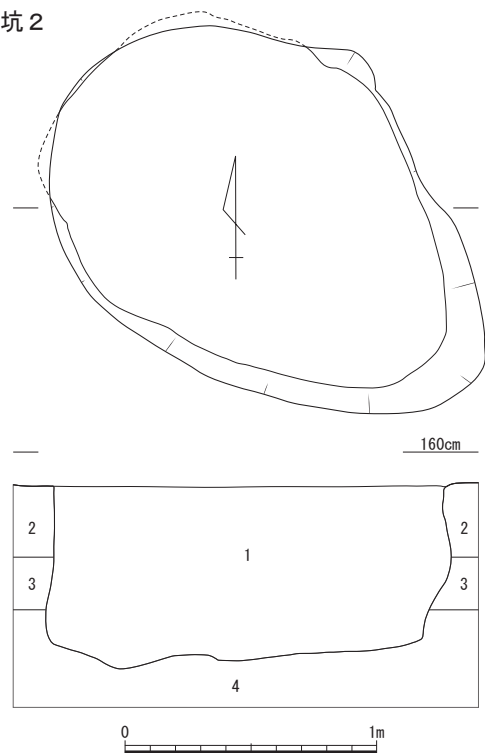
土坑1



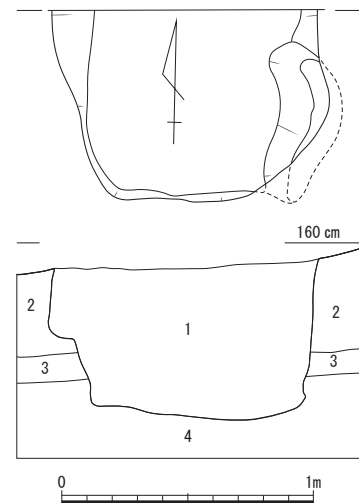
土坑3



土坑2



土坑4



土坑1～4 土層注記

- 1 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト
橙色 (7.5YR6/8) 粗砂の不整形
ブロック含む
- 2 黄褐色 (2.5Y5/3) 細砂
- 3 灰色 (5Y5/1) シルト
- 4 灰色 (5Y5/1) シルト

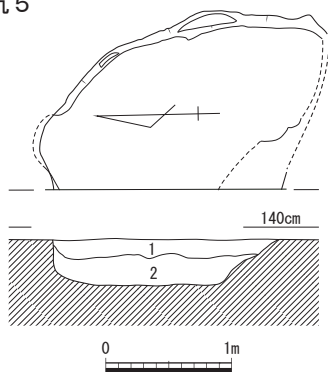
第9図 土坑1～4 (1/30・1/60)

西部を若干外側へ掘り広げる。土坑3は土坑2の東隣で、底面の一部を外側へ掘削する。土坑4は土坑3の東隣で、底面の南東側の一部を外側へ掘り広げる。土坑5は土坑1の南隣で、南壁は傾斜が緩やかである。土坑6は土坑5の南隣で、底面の中央を残して壁面近くを輪状に掘削している。土坑7は土坑2・3の南に位置し、東側に標高100cmの所で段状に削り残す部分がある。埋土はいずれもシルト質に粗砂ブロックが混ざる土で、底面まで質の変化はない。出土遺物は弥生土器片で、土坑1・4・5から1点、土坑3・7から2点出土している。出土遺物が少ないものの、これらの土坑の埋没時期は周辺の土坑と同じ弥・後・Ⅲ～Ⅳ（弥生時代後期後葉～末葉）であろう。

土坑8（第11図）

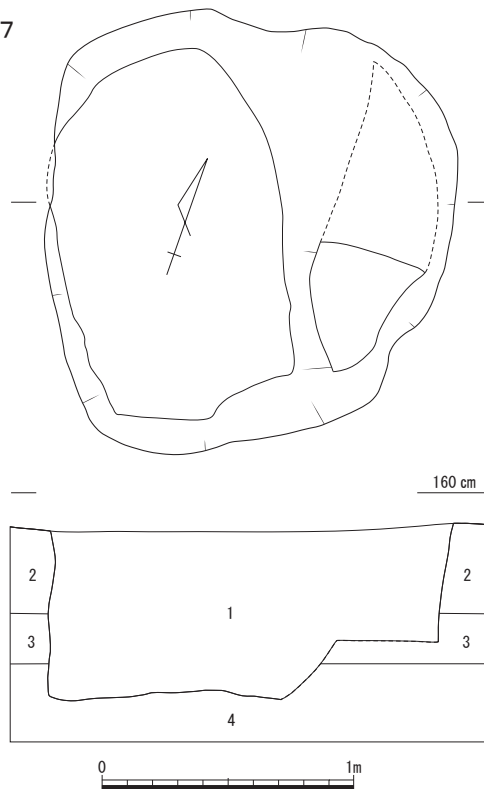
土坑3・4・7・9・11の間に位置する。直径1mの円が4つ重なり合った形状にも見えるが、掘削時に個別に分けることはできなかった。埋土は土坑1～7と同様である。底面は検出面から最大20cm程度外側へ掘り広げる部分がある。底面の標高は76～87cmで、西側と南側が低い。出土遺物は弥生土器で、1は弥生時代中期後葉に相当する高杯の脚部で、混入と考えられる。遺構の埋没時期は、他の土坑と同じ弥・後・Ⅲ～Ⅳと考えられる。

土坑5



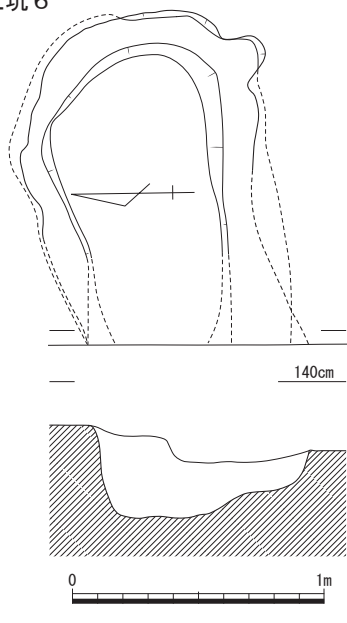
- 1 灰色 (7.5Y4/1)シルト
- 2 灰色 (10Y5/1)シルト

土坑7



- 1 黄灰色 (2.5Y6/1)シルト 橙色 (7.5YR6/8)粗砂をブロック状に含む
- 2 黄灰色 (2.5Y5/1)シルト 橙色 (7.5YR6/8)粗砂を含む
- 3 灰色 (5Y6/1)シルト
- 4 明緑灰色 (7.5GY7/1)粗砂混じりシルト

土坑6



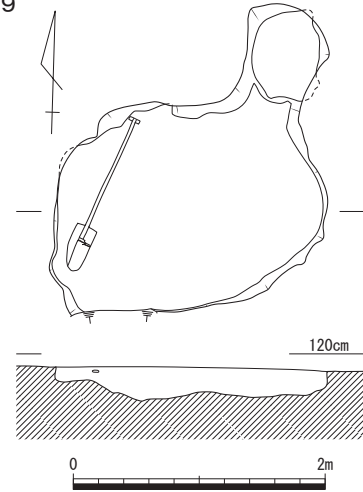
- 灰色 (7.5Y4/1)シルト
- 緑灰色シルトを斑状に含む

第10図 土坑5～7 (1/30・1/60)

土坑9 (第11図、巻頭図版2、図版8)

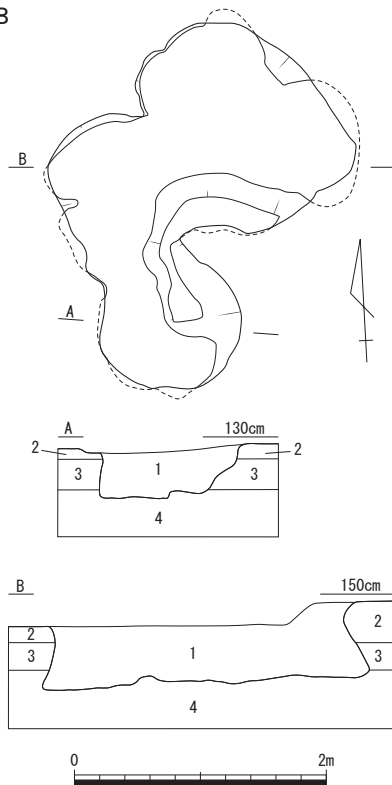
土坑7・8の南に位置する。直上標高100cmまで現代の攪乱が及び、深さは最大でも20cmの残存であった。埋土や掘り方は周囲の土坑と類似する。出土遺物は一木造りの平鋤W1と弥生土器片である。W1は底面より7cm上部で、把手と身が水平な状態で出土した。W1は側面から見ると柄に対し身が反り返る形状をしている。身の肩は角ばり、右肩角は一部欠損している。身の部分には樋が彫り込まれ、組み合わせ鋤の身と似た作りになっている。把手は丁字に削り出し、把手と柄の断面は円形、柄が身に近づくに従い断面が方形に変化している。なお、身の右側先端部は土壌化が進行し、脆弱なため図化できなかった。樹種は鑑定により、アカガシとの結果を得ている。遺構の埋没時期は、他の土坑と同じ弥・後・Ⅲ～Ⅳであろう。

土坑9

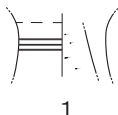


灰色 (7.5Y4/1) シルト 灰色 (7.5Y5/1) 細～粗砂ブロックを含む

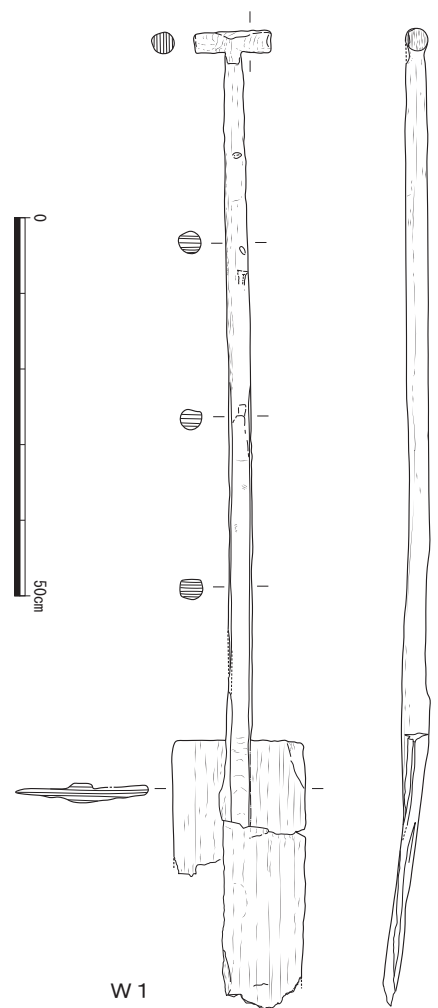
土坑8



- 1 黄灰色 (2.5Y6/1) 微砂混じりシルト 橙色 (5YR6/8) 粗砂ブロック含む
- 2 黄灰色 (2.5Y6/1) 微砂混じりシルト 橙色 (5YR6/8) 粗砂含む
- 3 灰白色 (10Y7/1) 混じり灰色 (5Y5/1) シルト
- 4 灰白色 (10Y7/1) 粗砂混じりシルト



1



W1

(1/10)

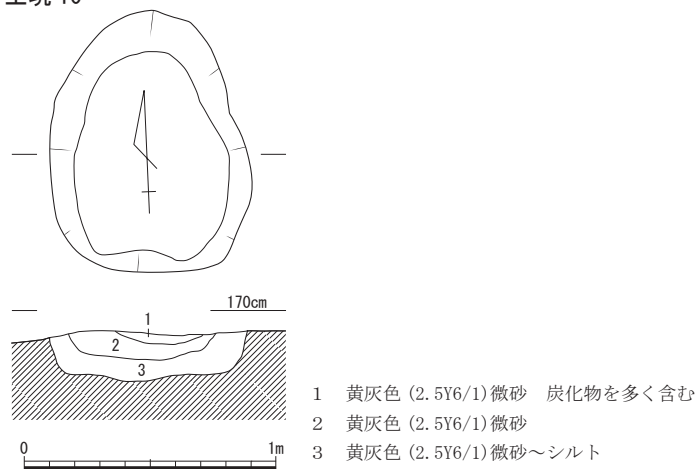
第11図 土坑8・9 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/10)

土坑 10 ～ 13（第 12 図、図版 2）

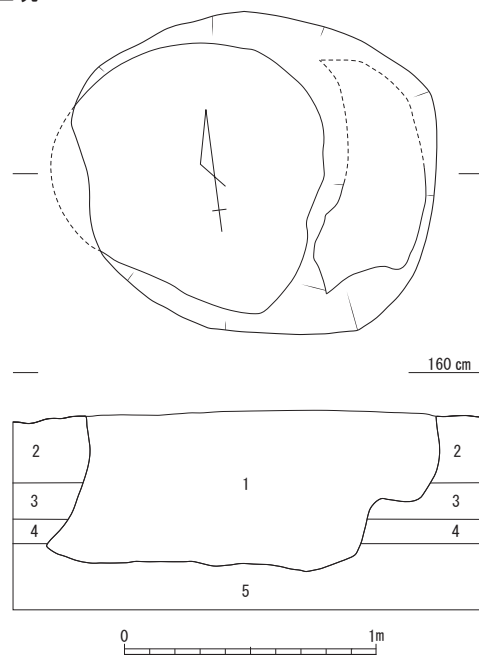
土坑 10 は土坑 8 の東、窪地 1 の東端に位置する。埋土が黄灰色微砂の均質な層で、上部に炭化物と土器を多く含む層があるなど、堆積状況と断面形状が土坑 11 ～ 13 と異なる。出土した遺物は弥生土器の甕胴部片などが 84g で、図化できる部位はなかった。

土坑 11 ～ 13 は土坑 8 の東側、標高約 140cm で検出した。土坑 11 は東側に標高 107cm で段があり、その反対側の壁面底部を外側へ掘削する。土坑 12 は比較的垂直に側面を掘削し、土坑 13 は北西側面の底部付近のみを外側へ掘り広げている。これらの埋土は粗砂をブロック状に含むシルトで、土坑 1 ～ 9 の堆積状況と類似する。遺物は土坑 11 から弥生土器が 7 点程度出土したのみである。土坑 10 ～ 13 の埋没時期は、他の土坑と同様の弥・後・Ⅲ～Ⅳであろう。

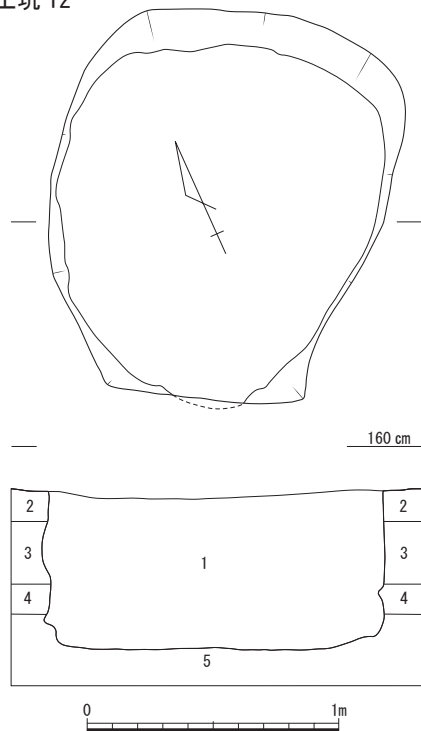
土坑 10



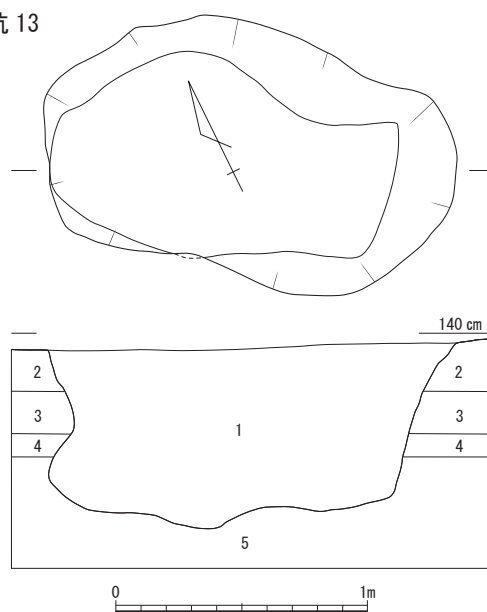
土坑 11



土坑 12



土坑 13



- 土坑 11～13 土層注記
- 1 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト
橙色 (7.5YR6/8) 粗砂の
不整形ブロック含む
 - 2 黄褐色 (2.5Y5/1) 細砂
 - 3 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト
 - 4 灰色 (5Y5/1) シルト
 - 5 明緑灰色 (7.5GY7/1)
粗砂混じりシルト

第 12 図 土坑 10 ～ 13 (1/30)

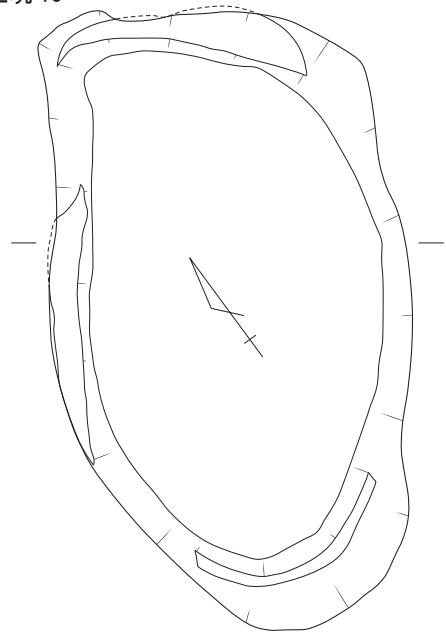
土坑 14 (第 13 図、図版 2・7)

土坑 13 の東、土坑 15 の上層で、窪地 1 の東端に位置する。埋土は土坑 10 に似る黄灰色シルトの均質な層で、土器を多く含む。平面形は不整形で底面にも凹凸があり、堆積状況と断面形状が土坑 11～13・15 などとは異なる。出土した遺物は土器で、弥生土器の鉢 2～4 や甕口縁部 2 点、鉢胴部 1 点があり、合計約 700g になる。図化した鉢 2～4 は小型でいずれも形状が異なる。この土坑の埋没時期は土器から弥・後・Ⅲ～Ⅳに相当する。

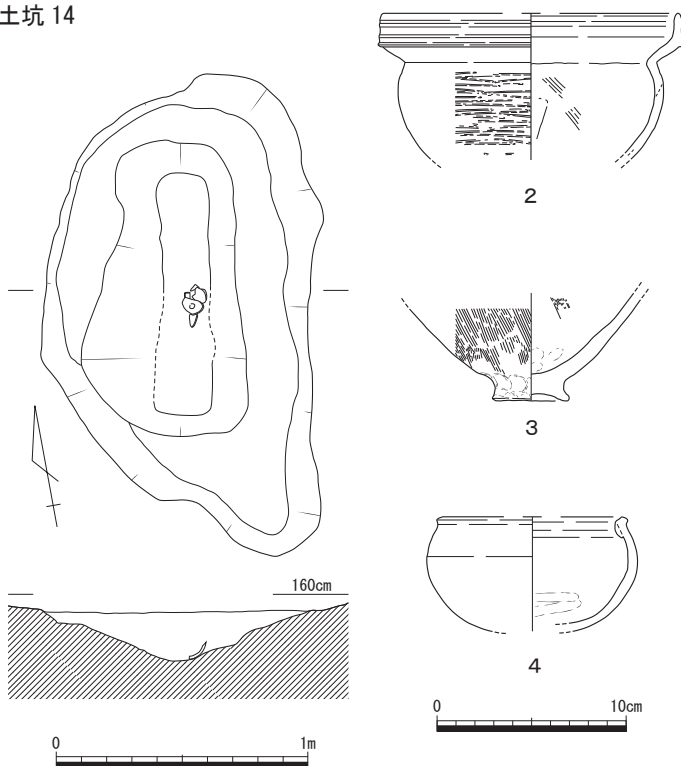
土坑 15～18 (第 13・14 図、図版 7)

土坑 15 は土坑 14 に切られ、土坑 14 より古い土坑である。南北方向に細長い平面形で、南・北側の側面下部を外側へ掘り込んだ様子が観察できる。出土した遺物は弥生土器の甕片など 170g で、図化できた甕 5 も残存約 1/6 ほどの破片である。土坑 16 は土坑 6・9 の南で、他の土坑から 1.3～2 m 離れて位置する。東側が現代の攪乱で一部失われている。出土土器が 1 点あった。土坑 17 の検出面は窪地 1 中の標高 141cm である。6 は埋土中の底面から 30～60cm の高さで、図示のように東西 2 か所に分かれて破片が出土した。土坑 18 の検出面は窪地 1 中の標高 145cm で、弥生土器底部など 2 点が出土した。土坑 15～18 の埋土はほぼ同じで、弥・後・Ⅲ～Ⅳの埋没であろう。

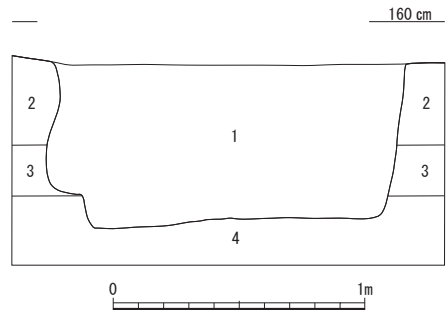
土坑 15



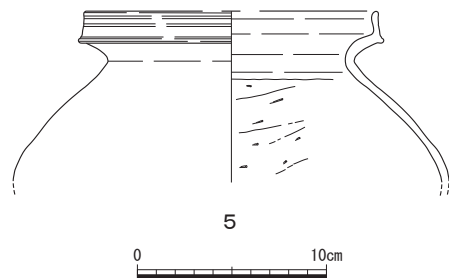
土坑 14



黄灰色 (2.5YR4/1) シルト 橙色 (7.5YR6/8) 粗砂ブロック含む

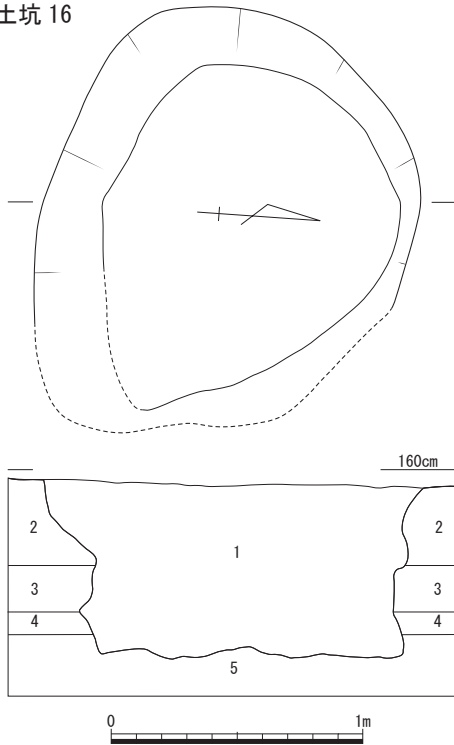


- 1 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト
橙色 (7.5YR6/8) 粗砂をブロック状に含む
- 2 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト 橙色 (7.5YR6/8) 粗砂含む
- 3 灰色 (5Y5/1) シルト
- 4 明緑灰色 (7.5GY7/1) 粗砂混じりシルト



第 13 図 土坑 14・15 (1/30)・出土遺物 (1/4)

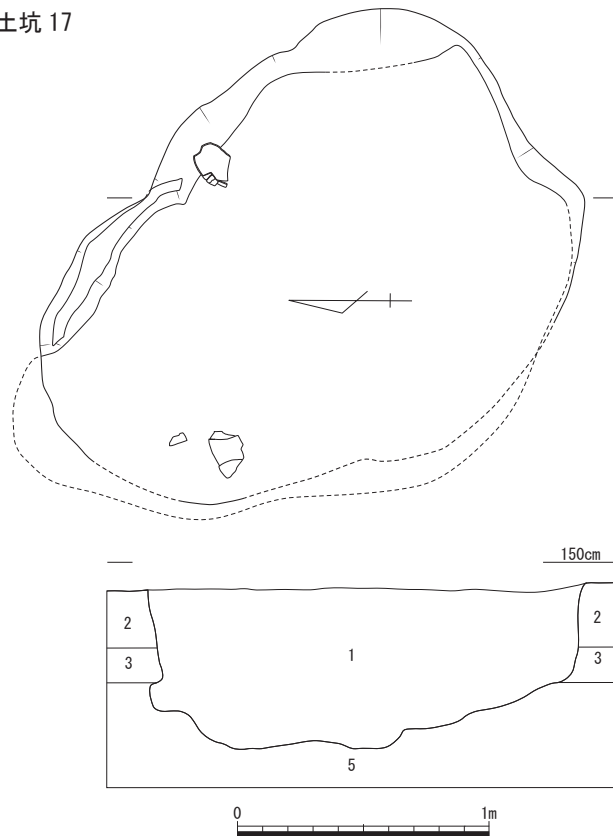
土坑 16



土坑 16～18 土層注記

- 1 黄灰色 (2.5Y6/1)シルト 橙色 (7.5YR6/8)粗砂の不整形ブロック含む
- 2 黄褐色 (2.5Y5/1)細砂
- 3 灰色 (5Y6/1)シルト
- 4 灰色 (5Y5/1)シルト
- 5 明緑灰色 (7.5GY7/1)粗砂混じりシルト

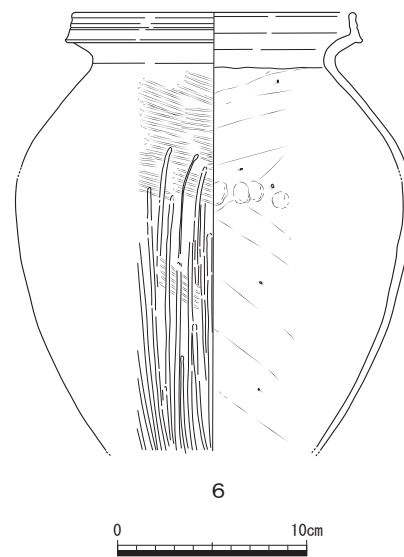
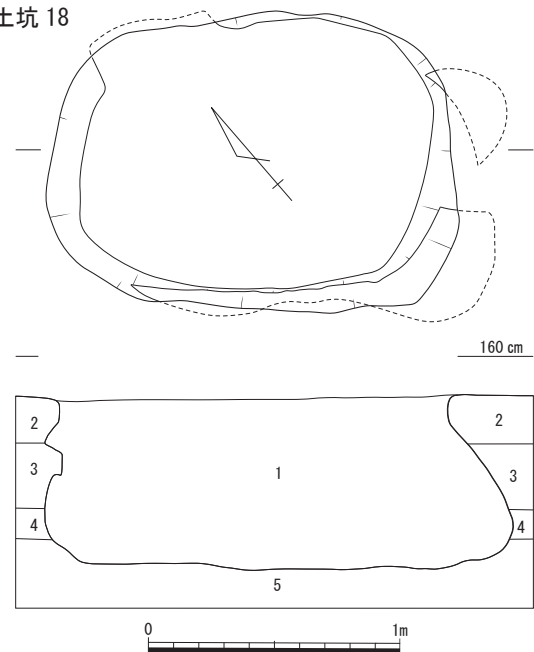
土坑 17



土坑 19～23 (第15図)

土坑 19 は土坑 18 の南に位置し、検出面は窪地中の標高 145cm、土坑の底面に所々小さい凹みが見られる。土坑 20 は土坑 27 の北約 1 m、他とは離れて位置する。直径は 82cm と小規模ながら、深さ標高 66cm まで掘り下げている。土坑 21 は土坑 20 の東約 3 m で、周辺の土坑と同じ 155cm まで下げないと検出できなかった。土坑 22 は土坑 21 の南西で、南東側に標高 120cm の段があり底

土坑 18

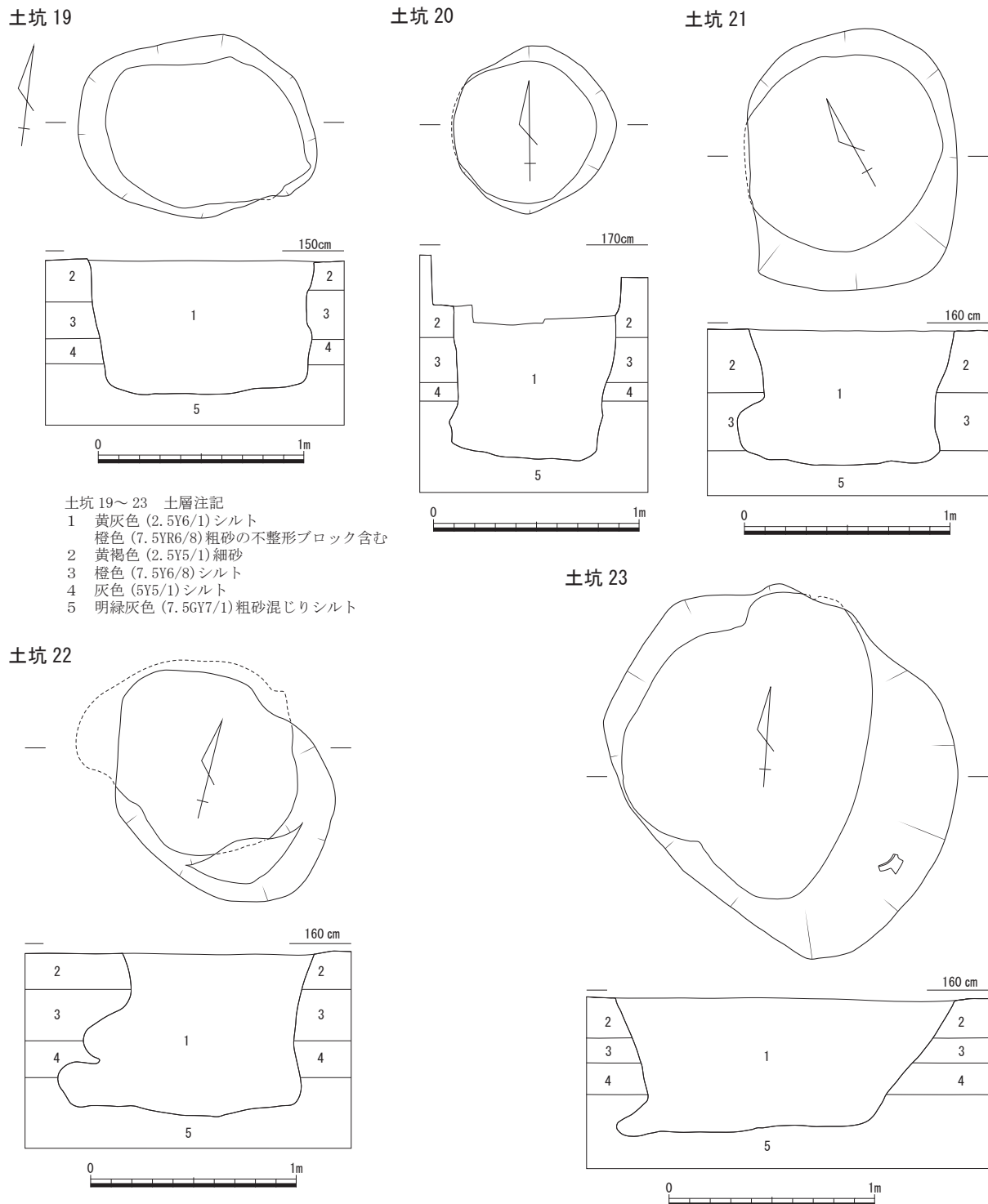


第 14 図 土坑 16～18 (1/30)・出土遺物 (1/4)

面北～西側を外側へ掘り込む。土坑 23 は土坑 21 の南東に位置し、すぐ東側が窪地の深い部分になる。遺物は土器小片が土坑 19・23 から出土した。これらの埋土は粗砂をブロック状に含むシルトで、埋没時期は他の土坑と同様の弥・後・Ⅲ～Ⅳであろう。

土坑 24 ～ 27 (第 16 図、図版 7)

土坑 24 は東端に他の土坑から離れて位置し、検出面は標高 155cm と高い部分である。出土遺物は弥生土器甕片で甕底部 7 を含め 205g を測る。7 は焼成後穿孔で外面に煤が付着している。土坑 25・

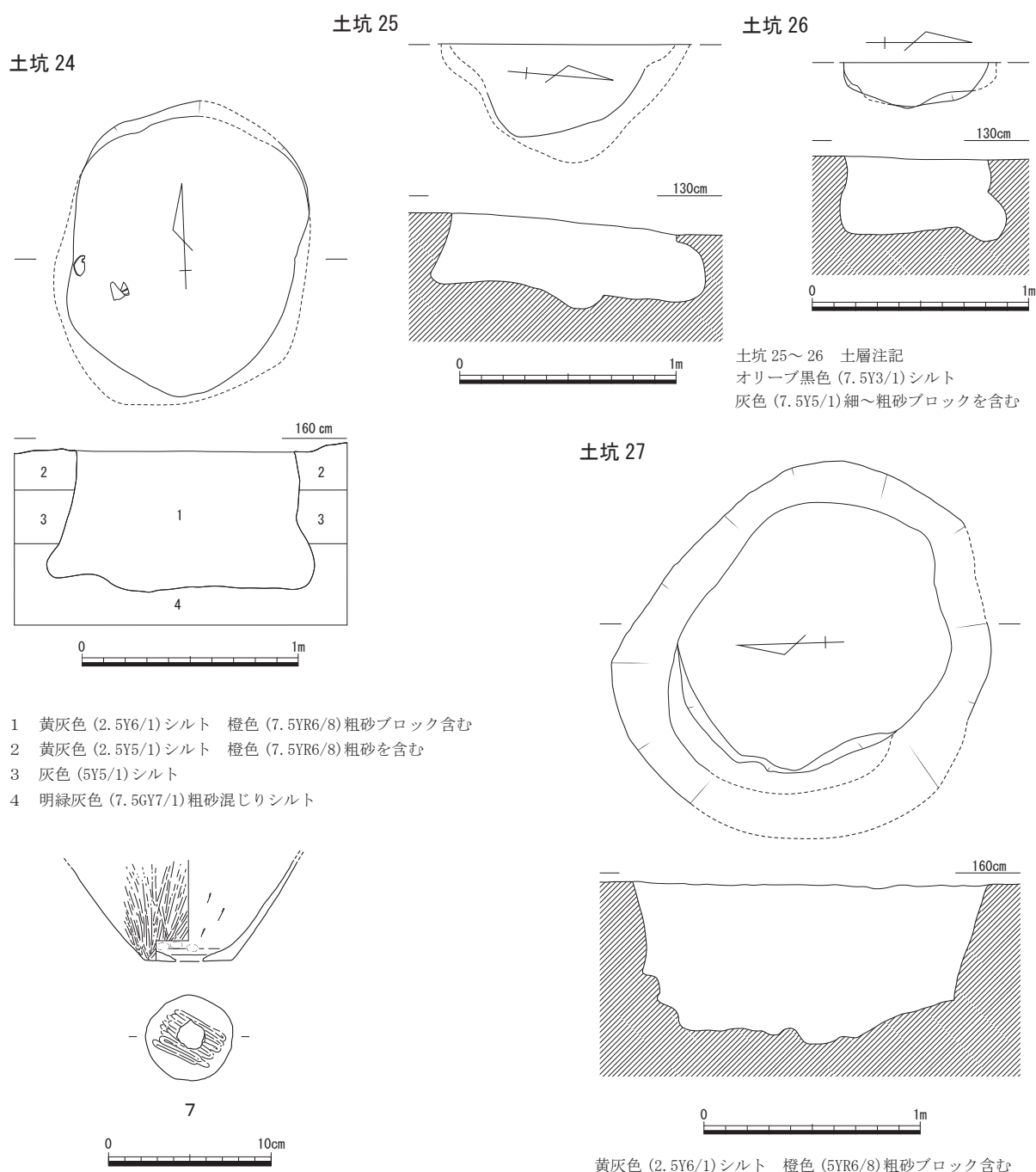


第 15 図 土坑 19 ～ 23 (1/30)

26 は調査区西端断面に接するため全形が分からないが、他の土坑同様底面を外側に広げている。土坑 27 は土坑 25 の東、標高 155cm で検出した。出土遺物は土器小片 1 点のみである。土坑 24 ～ 27 の埋土も粗砂をブロック状に含むシルトで、埋没時期は他の土坑と同じ弥・後・Ⅲ～Ⅳであろう。

土坑 28 ～ 32 (第 17 図、巻頭図版 2)

土坑 28 ～ 32 は土坑 27 などと同じく標高 155cm で検出している。土坑 28 は底面より少し上側を若干外側へ掘り込んでいる。埋土中から木片が出土した。土坑 29 は土坑 26 のすぐ南東に位置し、北側に段を持ち南側底面を外側へ掘り込む。土坑 30 は土坑 28 の東隣で、底面から 15cm 上を外側に掘り進めている。土坑 31 は検出が若干困難であった。南西側の底面付近を外側へ抉りこんでいる。土坑



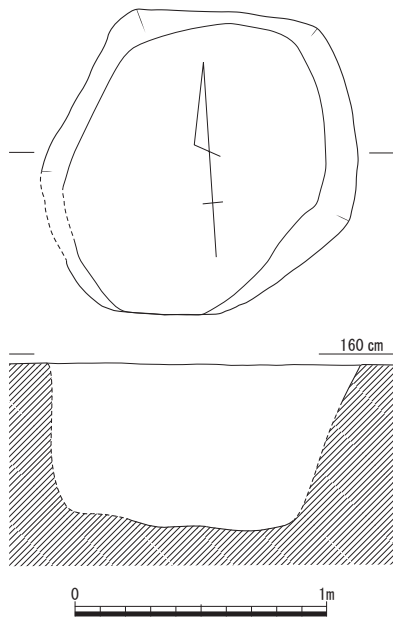
第 16 図 土坑 24 ～ 27 (1/30)・出土遺物 (1/4)

32 は当初南側の方形部分が先に検出できたが、後に北へ続くことが分かって再検出・掘削している。側面に細かな凹凸が認められ、埋土上面標高 155cm から弥生土器片が出土した。土坑 28～32 の埋土も粗砂をブロック状に含むシルトで、埋没時期は他の土坑と同じ弥・後・Ⅲ～Ⅳと考えている。

土坑 33～37 (第 18 図、図版 3)

土坑 33 は土坑 32 の南西で、長径 236cm になる大形の土坑である。検出面は標高 155cm で、土器片

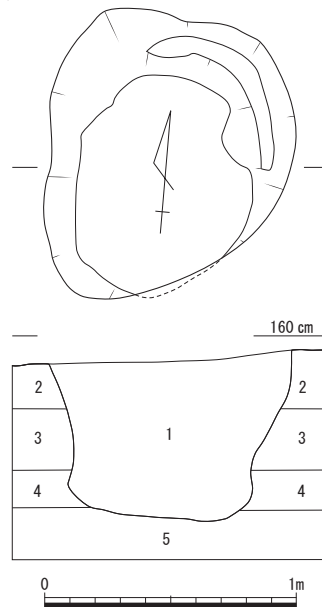
土坑 28



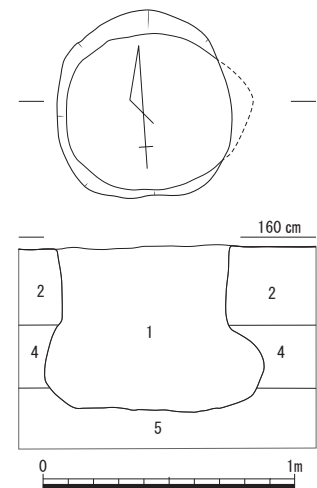
黄灰色 (2.5Y5/1) シルト

明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗砂混じりシルトブロック含む

土坑 29



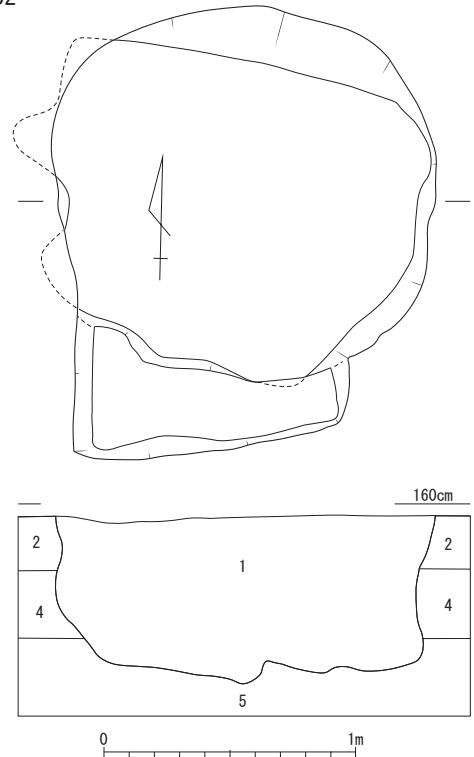
土坑 30



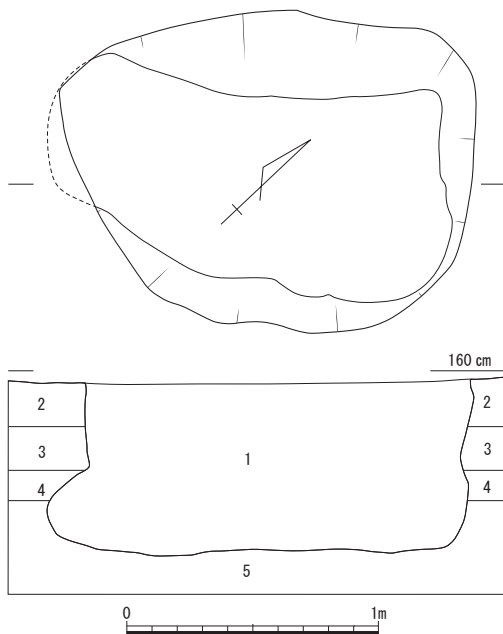
土坑 29～32 土層注記

- 1 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト
- 2 橙色 (7.5YR6/8) 粗砂の不整形ブロック含む
- 3 黄褐色 (2.5Y5/1) 細砂
- 4 橙色 (7.5Y6/8) シルト
- 5 灰褐色 (5Y5/1) シルト
- 6 明緑灰色 (7.5GY7/1) 粗砂混じりシルト

土坑 32



土坑 31

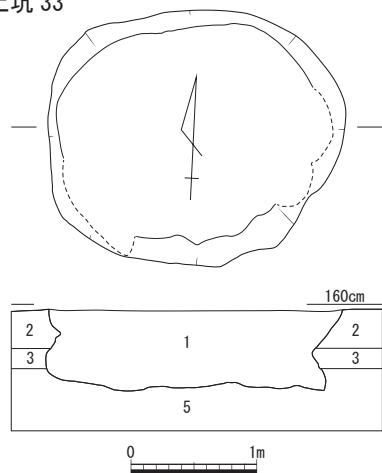


第 17 図 土坑 28～32 (1/30)

第3章 発掘調査の成果

1点が出土した。土坑 34 は東側を段状に掘り下げ、底面より 20cm 上を外側へ掘り込んでいる。土坑 35 は調査区境で壁面に掛かって検出したため、断面観察が可能であった（図版 3 参照）。中世包含層直下まで掘り方の立ち上がりが確認でき、埋土の粗砂ブロックを含む層が途中で切れ、その上部には碗状の堆積があることが分かる。土坑 36 は窪地 1 内に位置し検出面は標高 135cm であった。東・北・西側の底面付近を外側へ掘り込んでいる。土坑 37 は西側に標高 130cm で段を持ち、底部付近を若干外側へ掘り広げている。出土土器は壺と思われる底部 8 で、全体に摩滅が著しい。土坑 33 ～ 37 の埋土も粗砂をブロック状に含むシルトで、他の土坑と同じく弥・後・Ⅲ～Ⅳに埋没したのであろう。

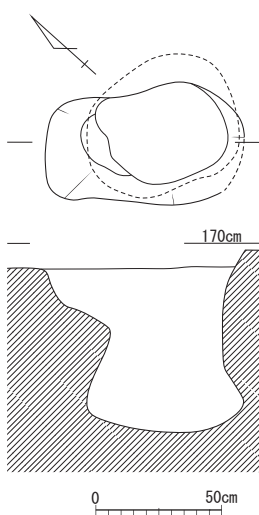
土坑 33



土坑 33・36 土層注記

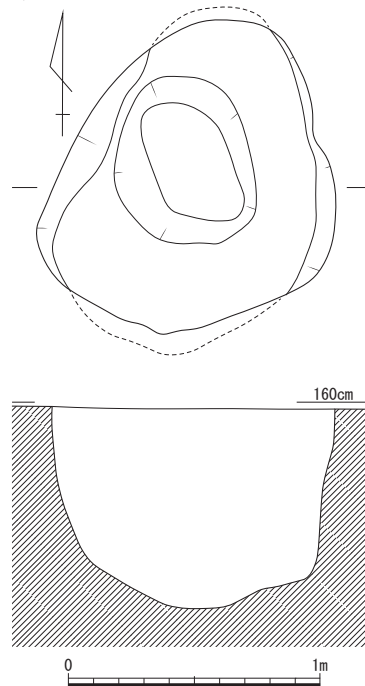
- 1 黄灰色 (2.5Y6/1)シルト
- 2 黄褐色 (2.5Y6/1)細砂 褐色 (7.5YR6/8)粗砂を含む
- 3 灰色 (5Y6/1)シルト
- 4 灰色 (5Y5/1)シルト
- 5 明緑灰色 (7.5GY7/1)粗砂混じりシルト

土坑 34



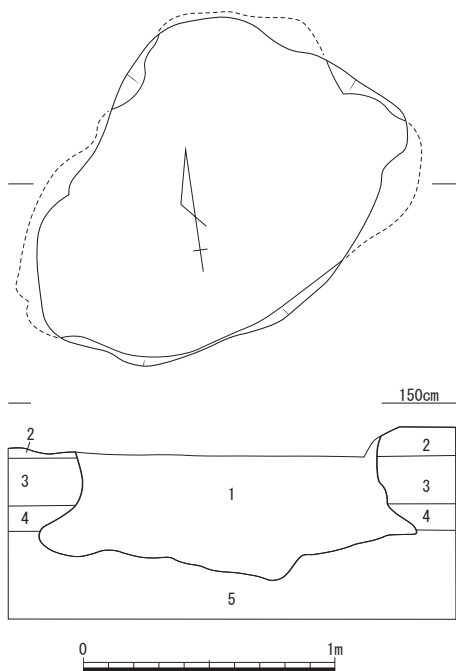
- 黄灰色 (2.5Y5/1)シルト
- 明黄褐色 (2.5Y7/6)粗砂混じりシルト
- ブロック含む

土坑 35

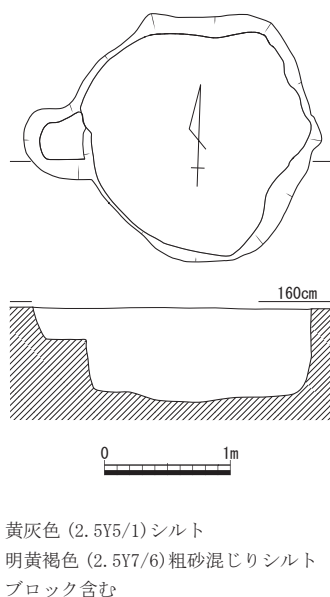


- 黄灰色 (2.5Y5/1)シルト
- 浅黄色 (2.5Y7/4)粗砂混じりシルト
- ブロック含む

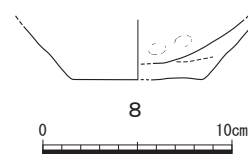
土坑 36



土坑 37



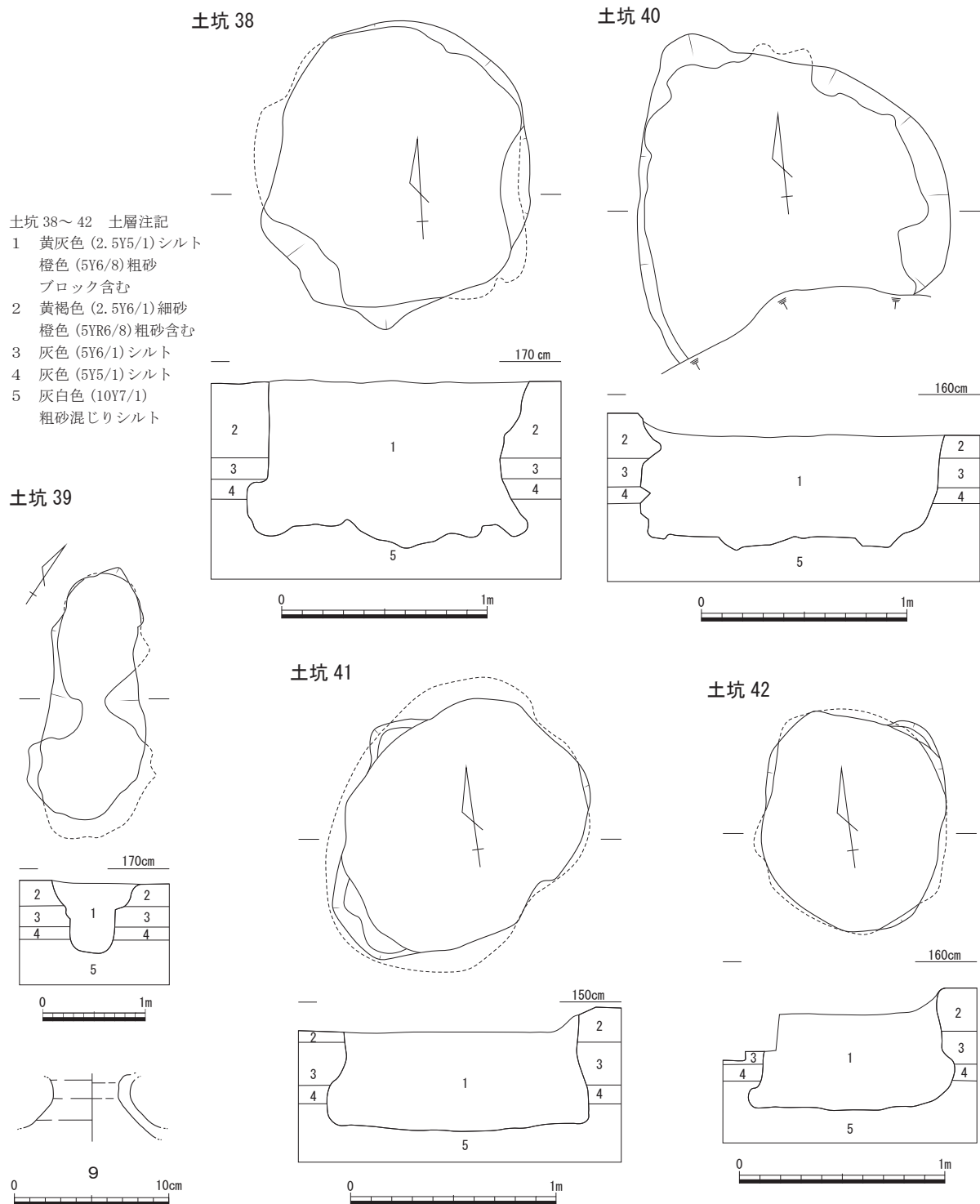
- 黄灰色 (2.5Y5/1)シルト
- 明黄褐色 (2.5Y7/6)粗砂混じりシルト
- ブロック含む



第 18 図 土坑 33 ～ 37 (1/30・1/60)・出土遺物 (1/4)

土坑 38 ～ 42 (第 19 図)

土坑 38 は調査区西端の標高 160cm で検出した。既存建物のコンクリート基礎杭のため南側の掘り方底部の掘削が難しかったが、東・西側底面付近を外側へ掘り込んでいる様子が確認できた。土坑 39 も調査区西端に位置し、細長い楕円形で底面中央が狭まる形状である。調査中に南北 2 基の土坑が重なっている可能性が考えられたが、土層観察からは別々の土坑かどうかを判別することができなかった。出土した 9 は鉢の底部であろうか、摩滅が著しい。土坑 40 は土坑 39 の東の窪地 1 内で、東側で



第 19 図 土坑 38 ～ 42 (1/30・1/60)・出土遺物 (1/4)

は検出面が標高 140cm、南側を井戸 2 で切られる。壁面に細かい凹凸が見られる。土坑 41 も窪地 1 に位置し、西側の検出面の標高が 135cm である。全周の底面付近を外側へ掘り込む。南西に標高 120cm の段がある。土坑 42 は土坑 41 の南に位置し検出面が標高 135cm である。土坑 38 ～ 42 の埋土は黄灰色粗砂混じりシルトで、弥・後・Ⅲ～Ⅳの埋没と思われる。

土坑 43 ～ 46 (第 20 図)

土坑 43 は土坑 39 南の標高 160cm で検出し、北東側を井戸 2 で切られる。南側、特に南西側の壁面

底部を外側へ掘り広げている。

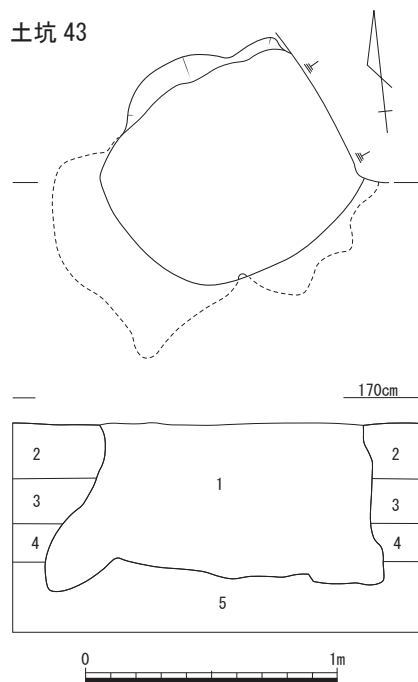
土坑 44 は土坑 46 の西隣で、南西側標高 112cm に

段がある。全周の底面付近を若干外側へ掘り込んでいる。

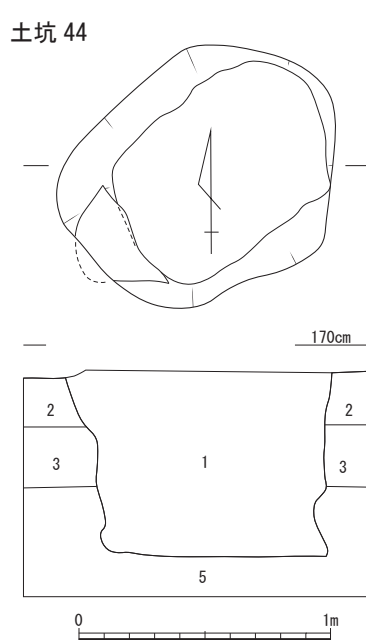
土坑 45 は土坑 43 東の標高 160cm で検出し、北側

を井戸 2 で切られる。土坑 46 は土坑 45 の南側、土坑 44 の東側に隣接してい

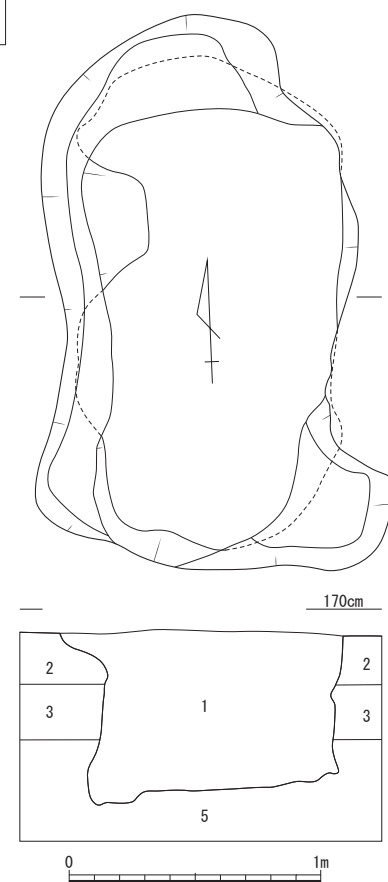
土坑 43



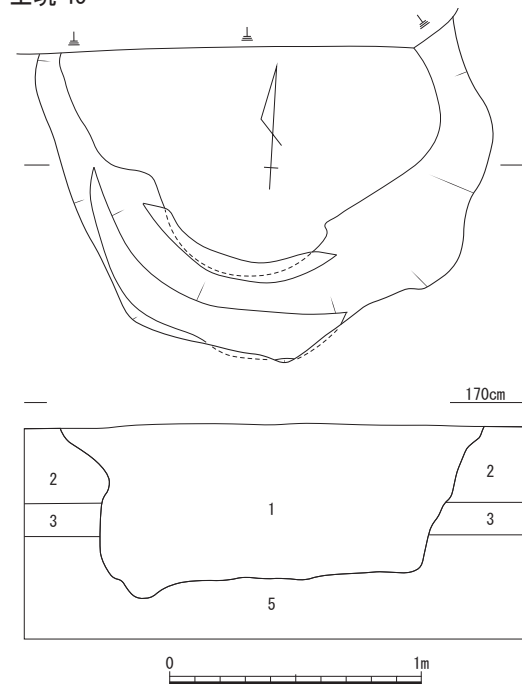
土坑 44



土坑 46



土坑 45



土坑 43～46 土層注記

- 1 黄灰色 (2.5Y5/1)シルト
橙色 (5Y6/8)粗砂の
不整形ブロック含む
- 2 黄褐色 (2.5Y6/1)細砂
橙色 (5YR6/8)粗砂を含む
- 3 灰色 (5Y6/1)シルト
- 4 灰色 (5Y5/1)シルト
- 5 灰白色 (10Y7/1)
粗砂混じりシルト

第 20 図 土坑 43 ～ 46 (1/30)

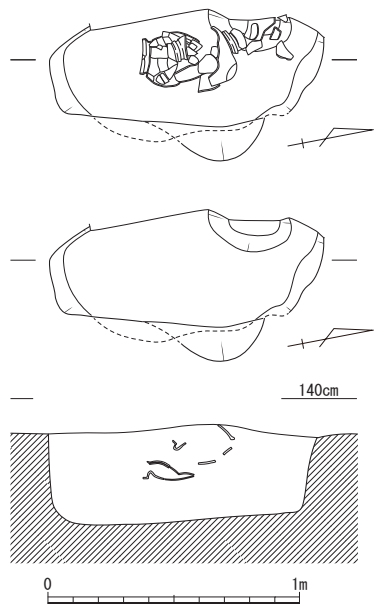
るが切り合い関係はない。北側と南東側に段を伴い、特に底面北・南端で外側へ壁面を強く掘り込む。この土坑については、基盤層及び埋土南東隅の壁面を抉り込んだ部分の埋土を採取し花粉・植物珪酸体分析を行ったが、基盤層の植物珪酸体が埋土に対し少ないことがわかった。基盤層が埋土に対し地表への露出が少なかったためと考えられる。出土遺物は、土器小片が土坑 43～45 で 1～2 点、土坑 46 では 5 点である。埋土は黄灰色粗砂混じりシルトで、他の土坑同様弥・後・Ⅲ～Ⅳの埋没であろう。

土坑 47～49（第 21・22 図、図版 3・7）

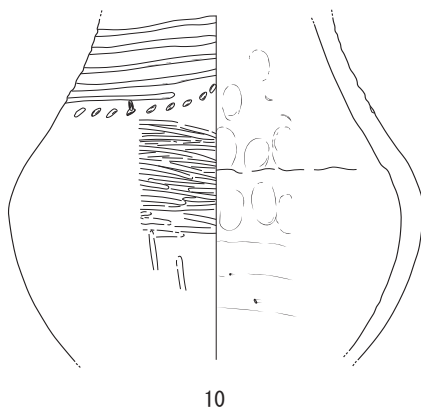
土坑 47 は調査区西端に位置し、掘り方は断面が長方形で、埋土に粗砂ブロックを含まない。出土遺物は土器が床面から 15cm より上に集中して出土した。土器は壺 10・11、甕 13・14 が上部に位置し、最下部にはほぼ完形の甕 12 が横倒しに置かれていた。土器周辺には炭化物が層状に多く分布する部分があり、甕 12 の底面にも存在した。甕 12 の底面に接着していた炭化物は、樹種同定により広葉樹の若年枝との結果を得ている。土坑 48 は土坑 46 の南 1.2 m に位置し、ほぼ全周の底部から 15cm 程度

上までの面を抉り込むように外側へ掘削している。埋土中には上部から底面まで土器を含んでいた。甕 15 は破片が土坑南側で分散して出土した。外面に吹きこぼれ痕が見られ、内面には粒状の炭化物が付着する。土坑 49 は調査区南西端に位置し、出土遺物は甕底部 18 ほか土器小片である。土坑 48・49 の埋土は灰色粗砂混じりシルトで、土坑 47～49 は他の土坑同様弥・後・Ⅲ～Ⅳの埋没であろう。

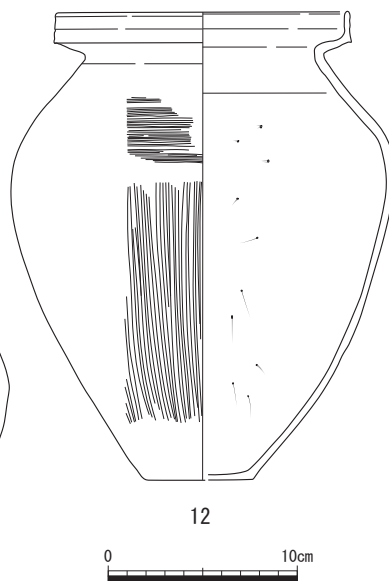
土坑 47



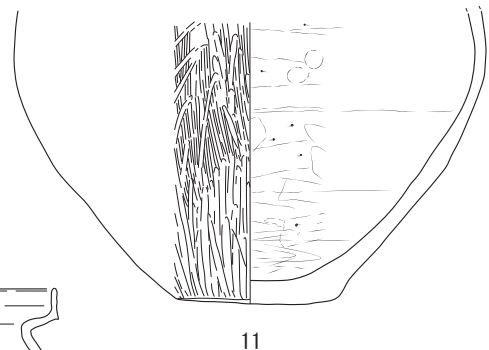
灰色 (7.5Y4/1～N4/)シルト
オリーブ灰色 (2.5GY5/1)シルトブロック
多く含む



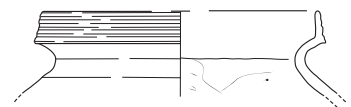
10



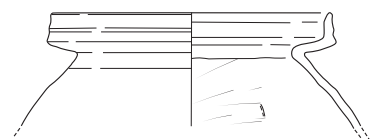
12



11



13



14

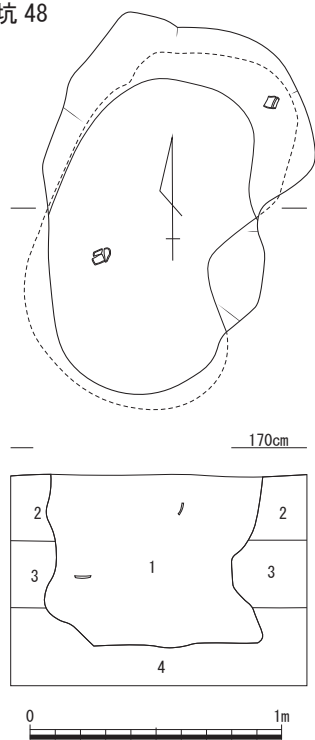
第 21 図 土坑 47 (1/30)・出土遺物 (1/4)

包含層出土遺物（第23図、図版7）

弥生時代中期・後期、古墳時代後期、奈良時代、鎌倉時代に区分できる。弥生時代中期の遺物は、調査区北東部と窪地1・2に見られたが、数は少ない。壺頸部19は南東窪地2、台付鉢20は北東端包含層からの出土で、中期中葉と考えられる。弥生時代後期の遺物は土坑群と同時期の遺物が多い。22・27は北東微高地付近弥生包含層出土で後期後葉か。23～25は中央北部で土坑12・18を中心とする部分の標高155～165cmに当たる。26は土坑53上層出土である。28は弥生時代後期～古墳時代初頭に当たる製塩土器の脚部である。古墳時代後期の遺物は少ない。中世包含層中が29、30は北端から中央北部まで出土範囲の広い破片が接合した。31は中央北部標高175cmまでで、古墳～古代包含層中と思われる。奈良時代の遺物は蓋32などごく少量で、中世包含層中である。

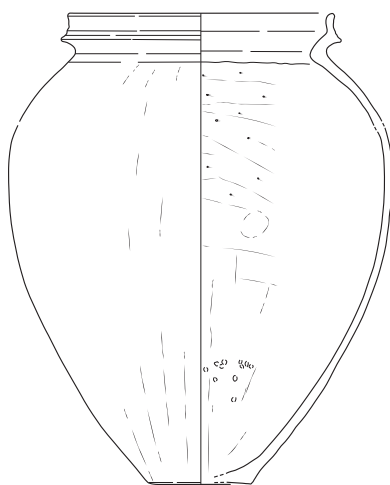
鎌倉時代の遺物は、土師器高台付碗を中心に破片で出土した。青磁皿33・白磁碗34は12世紀中頃から13世紀前半の使用が想定される遺物である。土師器高台付碗は底径が7cm近くの39、6cm程度の40、5.4～4.9cmの38・41・43、4cm程度の44・45があり、12世紀末から14世紀前半に該当しよう。46は竈底部片である。

土坑 48

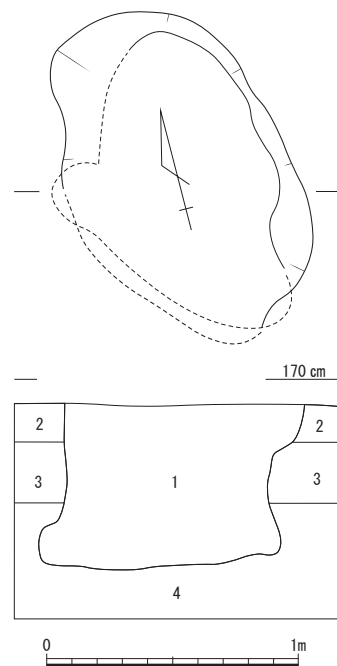


土坑 48 土層注記

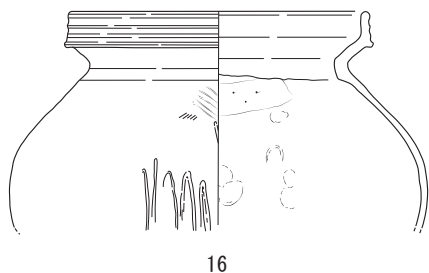
- 1 灰色 (7.5Y5/1) シルト
灰色 (7.5Y6/1) 粗砂混じりシルトを
ブロック状に含む
- 2 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 細砂
- 3 灰オリーブ色 (5Y5/3) シルト
- 4 灰色 (7.5Y6/1) 粗砂混じりシルト



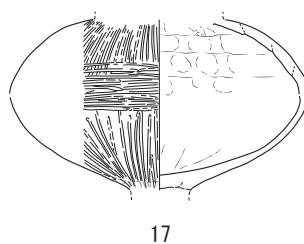
土坑 49



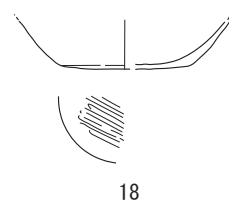
- 1 灰色 (5Y5/1) シルト
明黄褐色 (2.5Y6/6) 細砂ブロック含む
- 2 灰黄色 (2.5Y6/2) 細砂
- 3 灰色 (5Y5/1) シルト
- 4 灰色 (7.5Y6/1) 粗砂混じりシルト



16



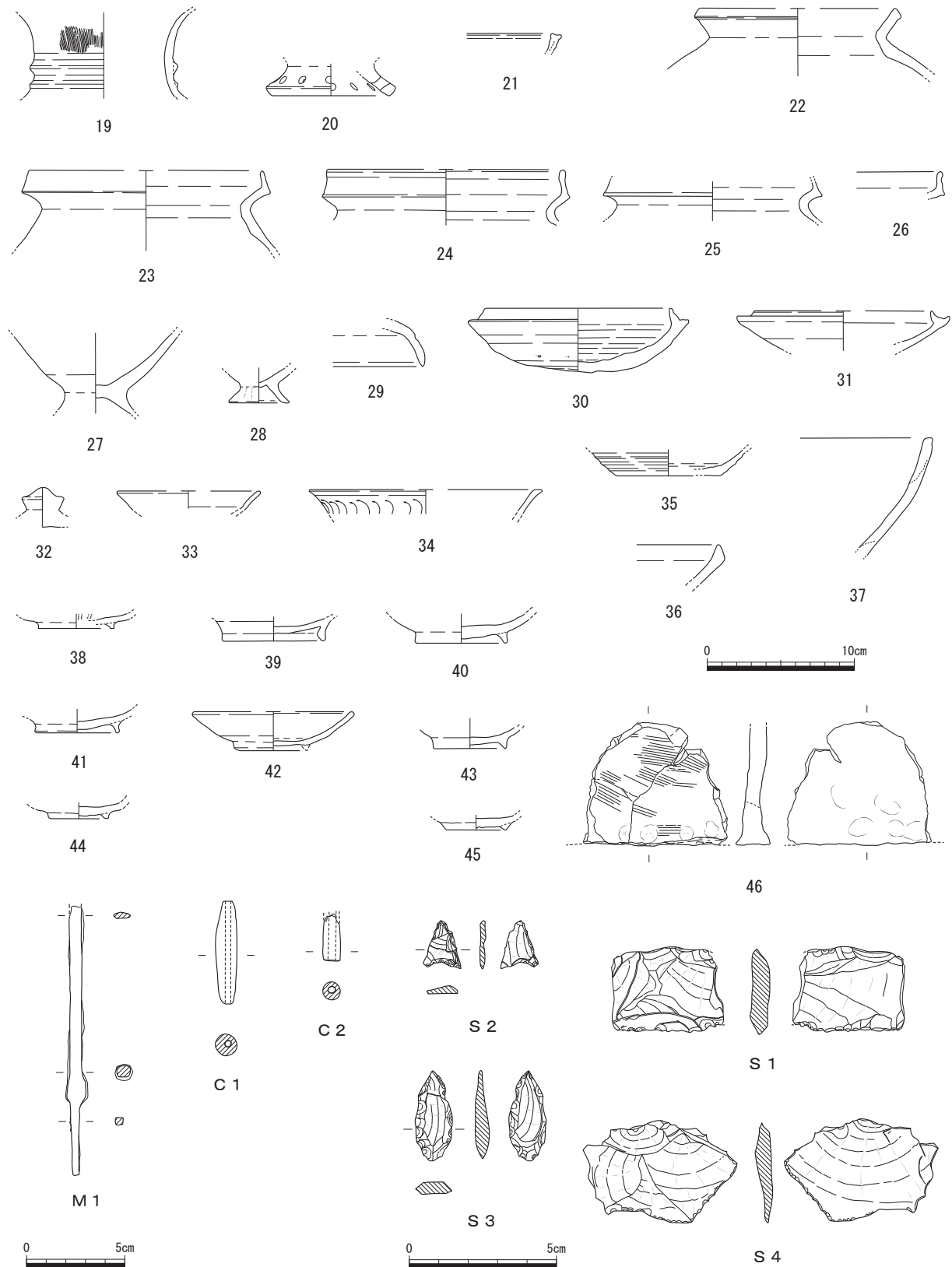
17



18

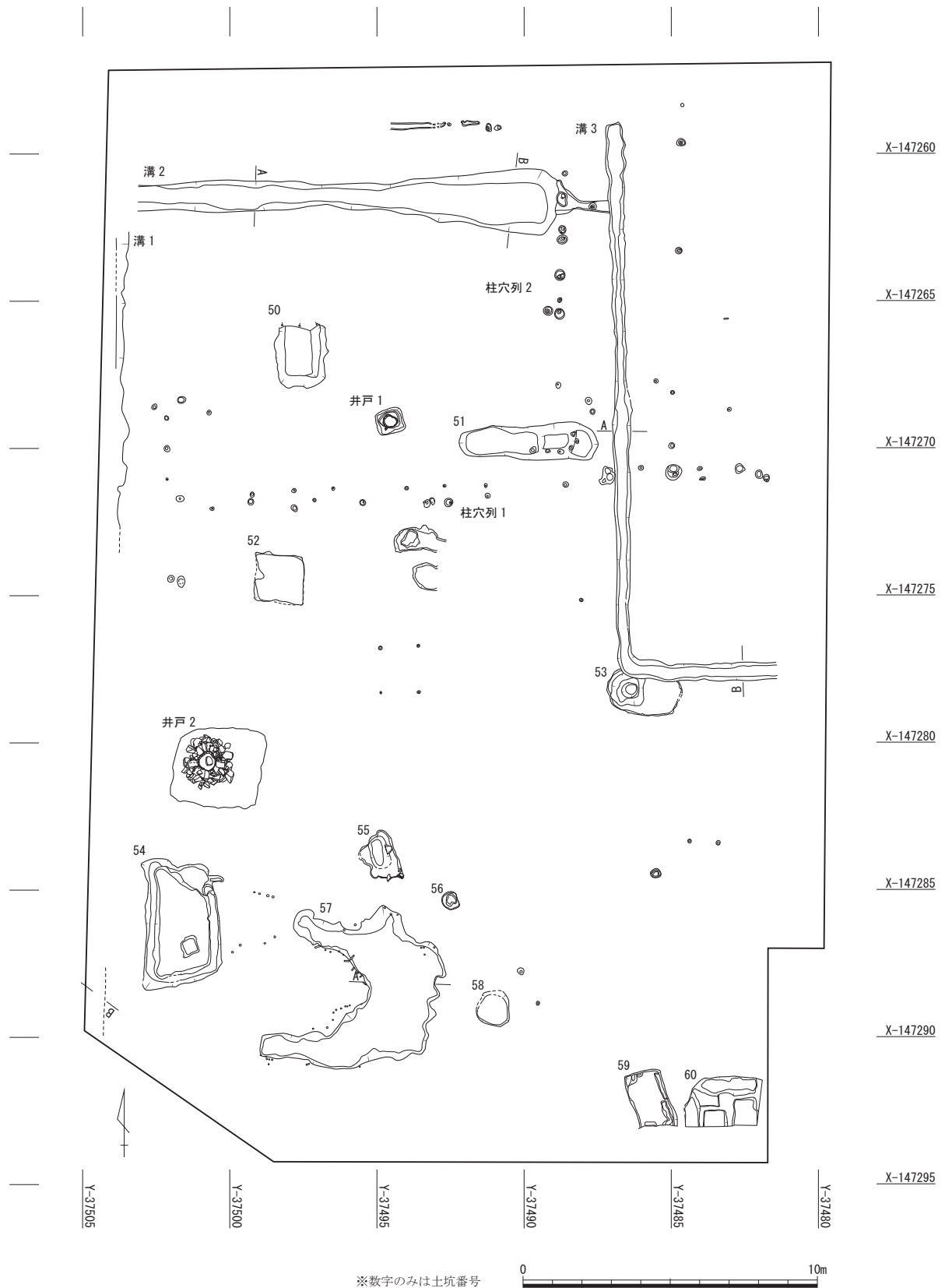
第22図 土坑48・49 (1/30)・出土遺物 (1/4)

M 1は調査区北東側の中世包含層中標高 195cm から出土した鉄鍬で、先端は欠損している。石器で図示できたのは弥生時代のサヌカイト製打製石器のみで、ごく少数である。**S 1**は江戸時代後半の土坑 60 に混入していた打製石包丁の破片で、**S 4**は使用痕のある剥片である。



第23図 包含層出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

第3節 江戸時代以降の遺構と遺物



第24図 江戸時代以降遺構全体図 (1/200)

1 概要

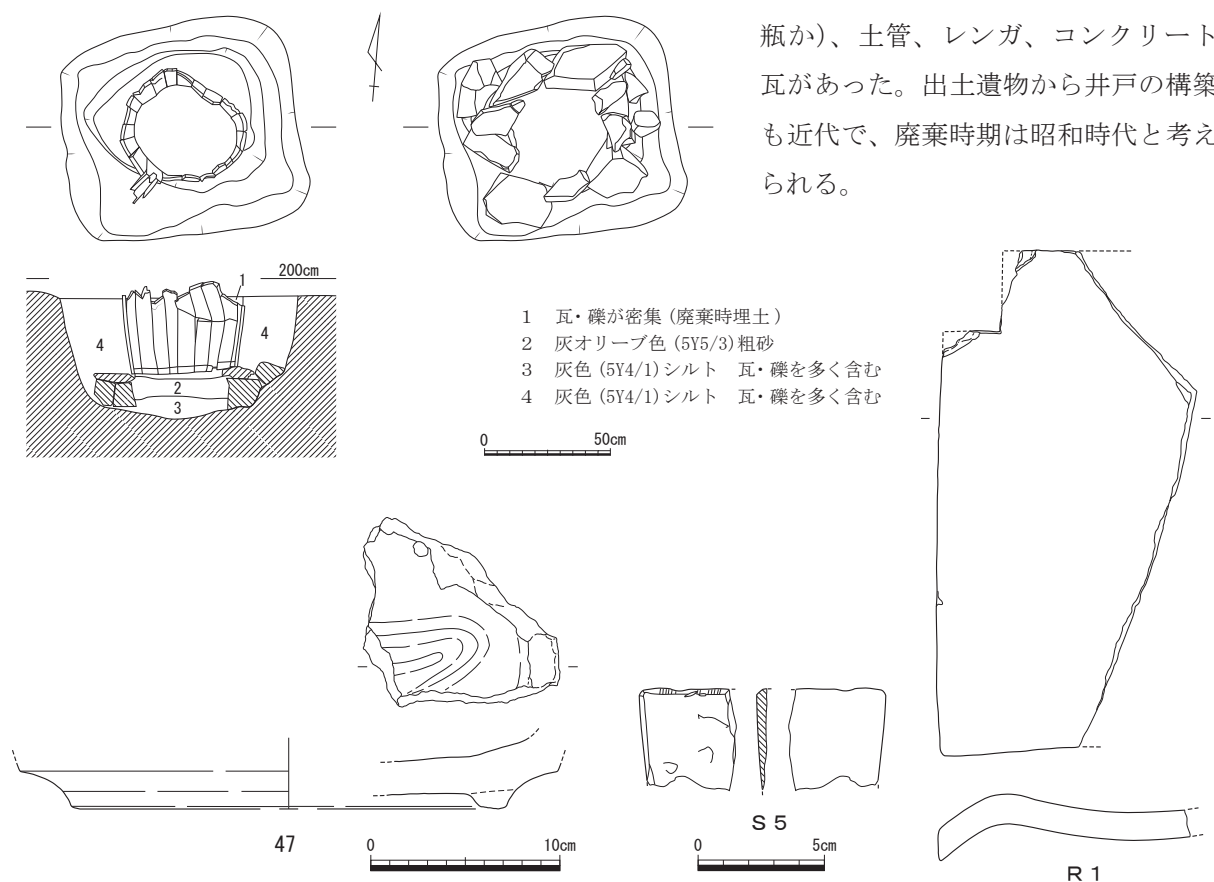
現代造成土と近世以降の堆積土を除去した後に遺構を検出した。検出面は北側の1区で標高200cm、南側の2区で190cm、南端の土坑59・60周辺では210cmであった。土層断面を確認したところ（第7図参照）、造成土直下で検出できる遺構も存在した。検出した遺構は、井戸2基、土坑11基、溝3条とピットである。ピットについてはいくつかのまとまりが認められ、土坑51南側にある東西方向の集まりを柱穴列1、溝2・3間にある南北方向の集まりを柱穴列2と呼称する。柱穴列1は約20mの範囲に約27基のピットがあり、その底面標高は186cm程度が多い。柱穴列2は約7.5mの範囲に9基のピットがあり、底面の標高は190cm程度が多い。両柱穴列とも杭の痕跡である可能性が高く、塀の存在が想定できる。土坑52の南東3mに位置する4基のピットは、直径が10cm、検出面180cmからの深さが2～10cmと小規模だが、柱間が130cmになる1×1間の建物になる可能性を挙げておきたい。なお、確認調査で検出した板材は、所属する遺構を明確にできなかった。

2 遺構・遺物

井戸1（第25図、図版4）

調査区中央北部に位置する。検出状況では桶と掘り方のみが残存し、上部構造は不明である。構築順序としては、掘り方の底に角礫を輪状に配し（平面図右側）、その上に桶が据えられて瓦・礫を掘り方内に充填し、桶内に約10cmの厚さで第2層の粗砂を多く含む土を入れて完成となったようである。

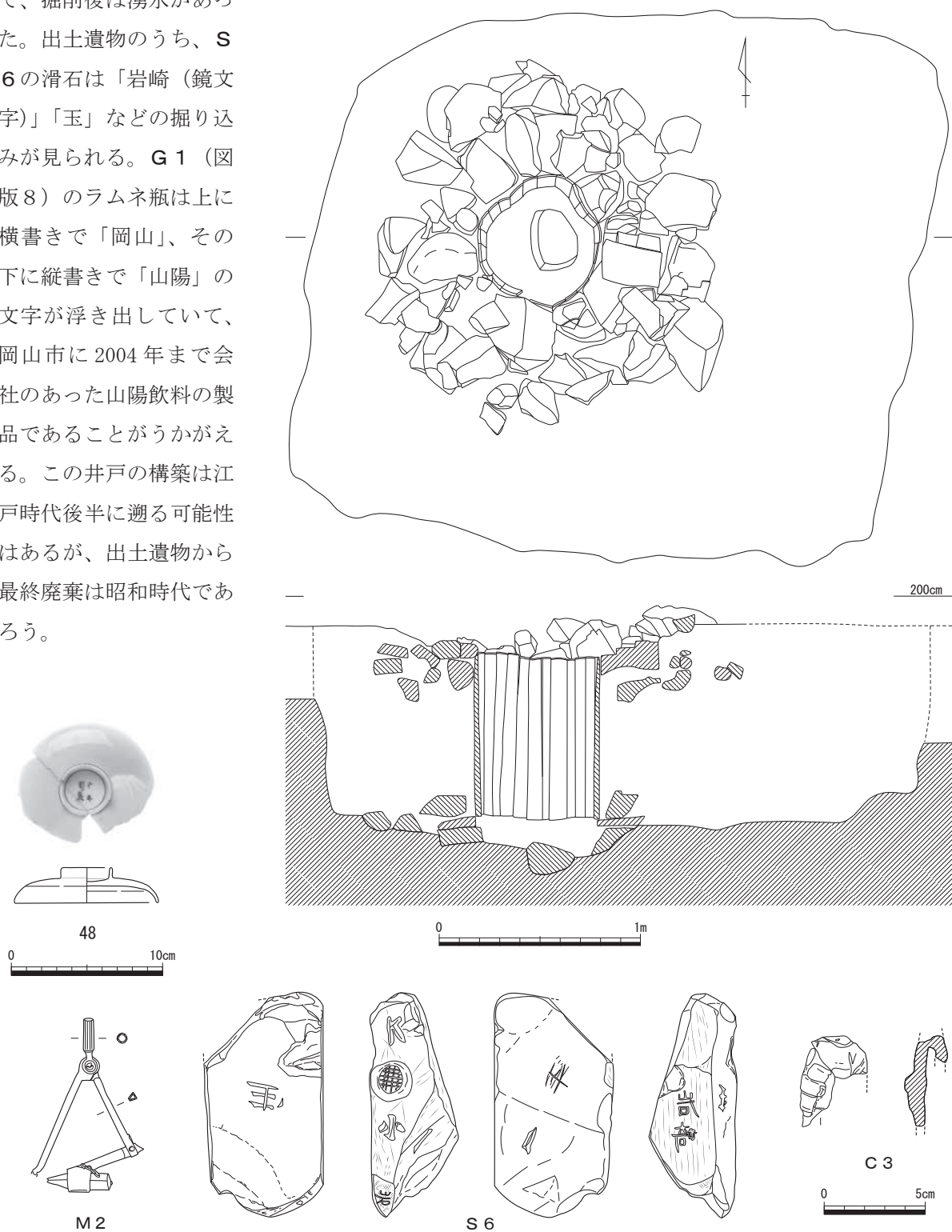
出土遺物には図示以外にガラス瓶（薬瓶か）、土管、レンガ、コンクリート瓦があった。出土遺物から井戸の構築も近代で、廃棄時期は昭和時代と考えられる。



第25図 井戸1（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

井戸2（第26図、図版4・8）

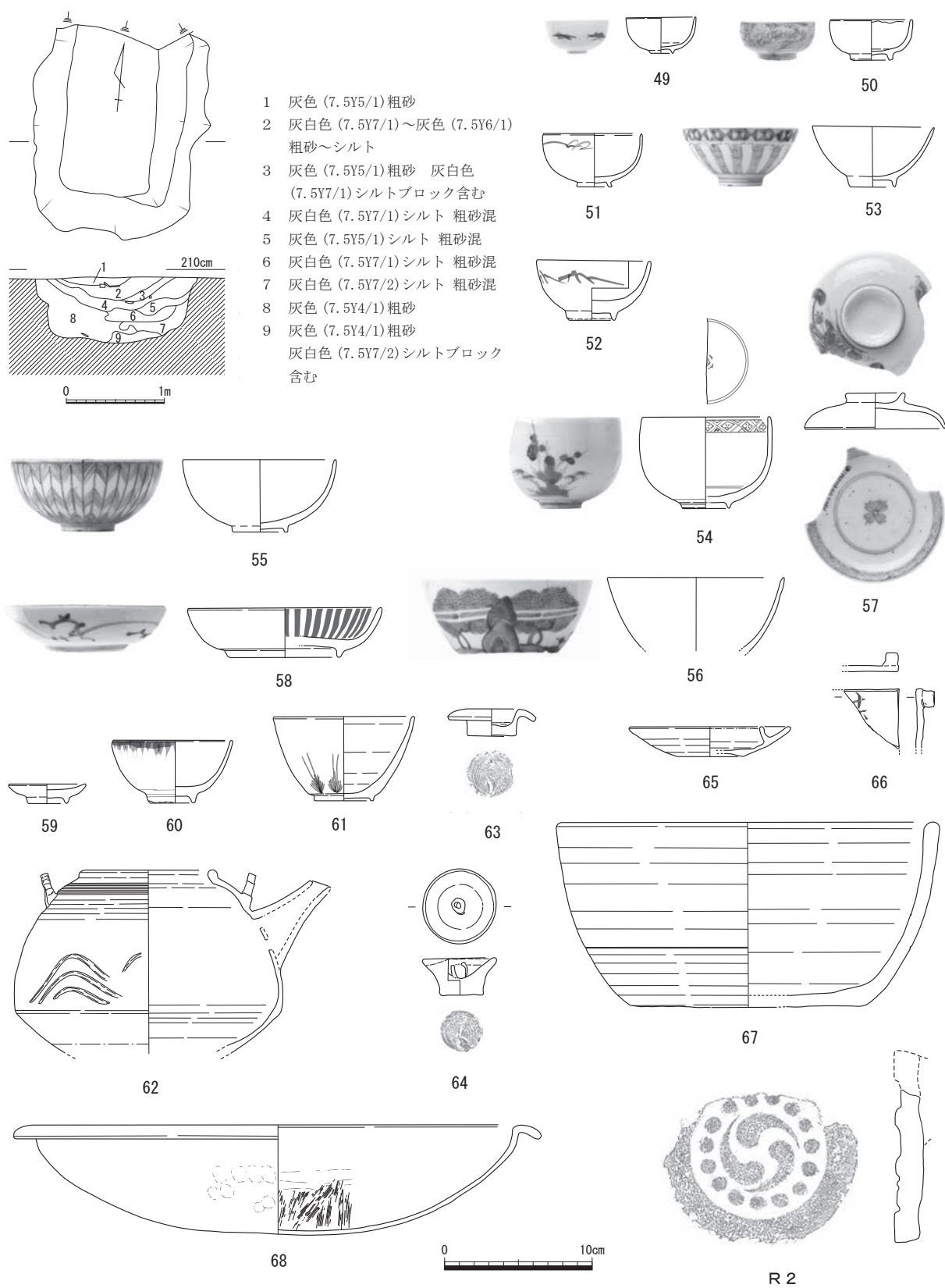
調査区南西に位置する。桶内部を掘削したところ、長さ80cmの礫1点が残されていた。掘り方埋土は基盤層がブロック状になった土で、掘削した土をそのまま埋めているものと考えられる。構築順序は、掘り方の北西寄りに礫を輪状に並べ、その上に井戸側最下部となる桶を据え、さらに上部に礫を配している。このことから、上部構造は石組みであった可能性が高い。掘り方の最低部は標高71cmで、掘削後は湧水があった。出土遺物のうち、S6の滑石は「岩崎（鏡文字）」「玉」などの掘り込みが見られる。G1（図版8）のラムネ瓶は上に横書きで「岡山」、その下に縦書きで「山陽」の文字が浮き出していて、岡山市に2004年まで会社があった山陽飲料の製品であることがうかがえる。この井戸の構築は江戸時代後半に遡る可能性はあるが、出土遺物から最終廃棄は昭和時代であろう。



第26図 井戸2（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

土坑 50 (第 27・28 図、巻頭図版 4、図版 8)

調査区北西部に位置し、撈乱に北端を切られる南北に長い長方形の土坑である。埋土は粗砂層か粗砂を含むシルト層で、主に木片からなる有機物と 0.5～7 cm 大の礫を含み中央が窪んでいる。また土

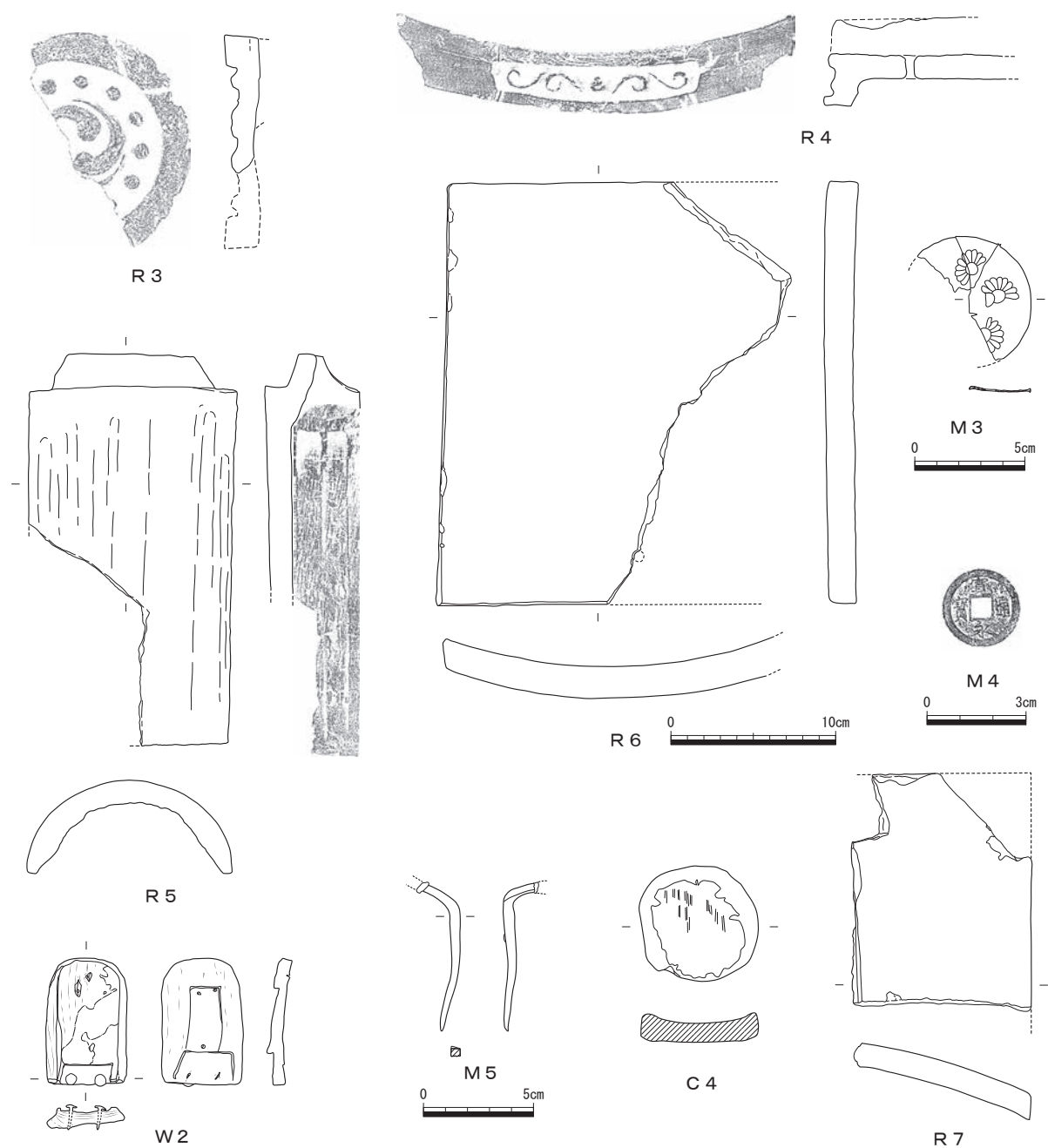


第 27 図 土坑 50 (1/60)・出土遺物 1 (1/4)

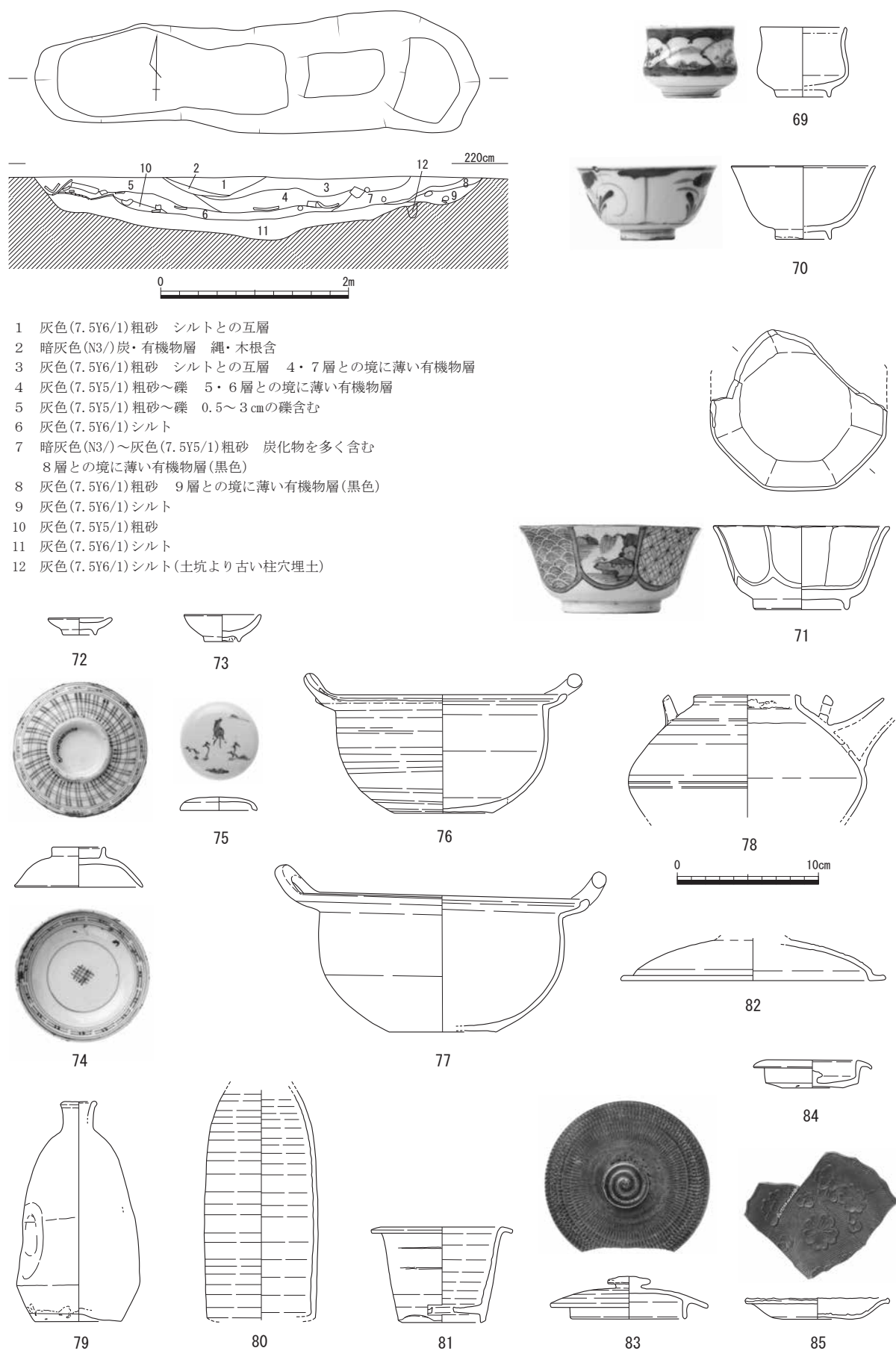
坑の底面・側面には凹凸が見られる。このことから、洪水により埋土が一括堆積したものと思われる。遺物は図示したものとその同類、縄、貝・骨、種子などの他に瓦片 34.8kg があった。磁器類には焼継は見られず、陶器には雨降文 61、信楽小杉椀 62 がある。軒丸瓦 R 2 は珠文 15 個、キラコ（瓦範から剥離剤に使用される雲母粉）が用いられ 19 世紀の特徴を示す。R 7 は熨斗瓦である。これら遺物から、この土坑は 19 世紀に埋没した可能性が高い。

土坑 51（第 29 ～ 31 図、巻頭図版 4、図版 5・8・9）

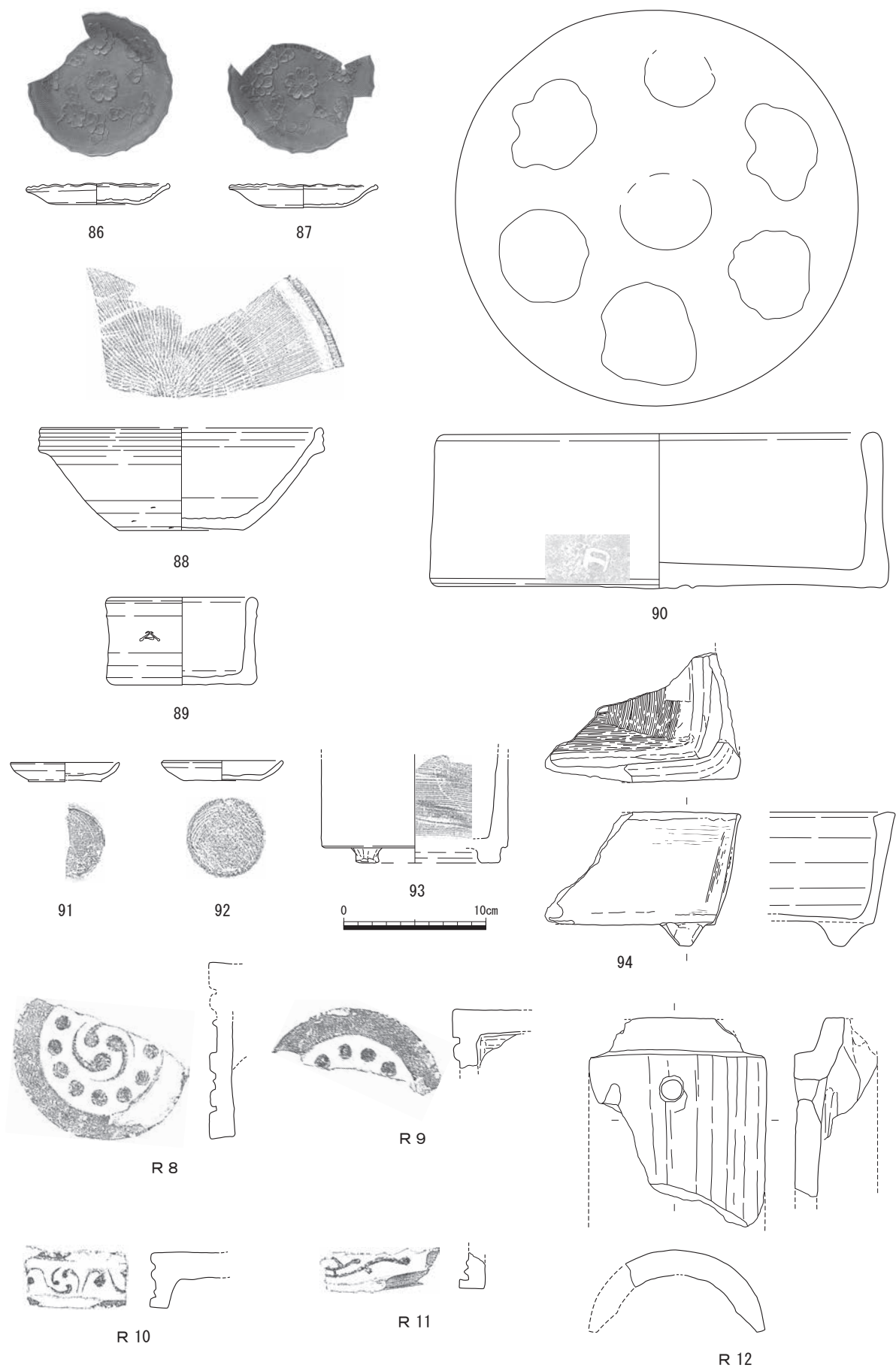
調査区北東部に位置し、東西に長い楕円形の土坑である。埋土は上層部（1 ～ 10 層）が土坑 50 同様に粗砂層か粗砂を含むシルト層で、黒色層状の有機物、木片、礫と遺物を含み 1・3 層にはラミナが発達している。遺物は、西端の 11 層との境で底のない桶や匣鉢 90 が集中出土した部分がある。こ



第 28 図 土坑 50 出土遺物 2 (1/4・1/3・1/2)

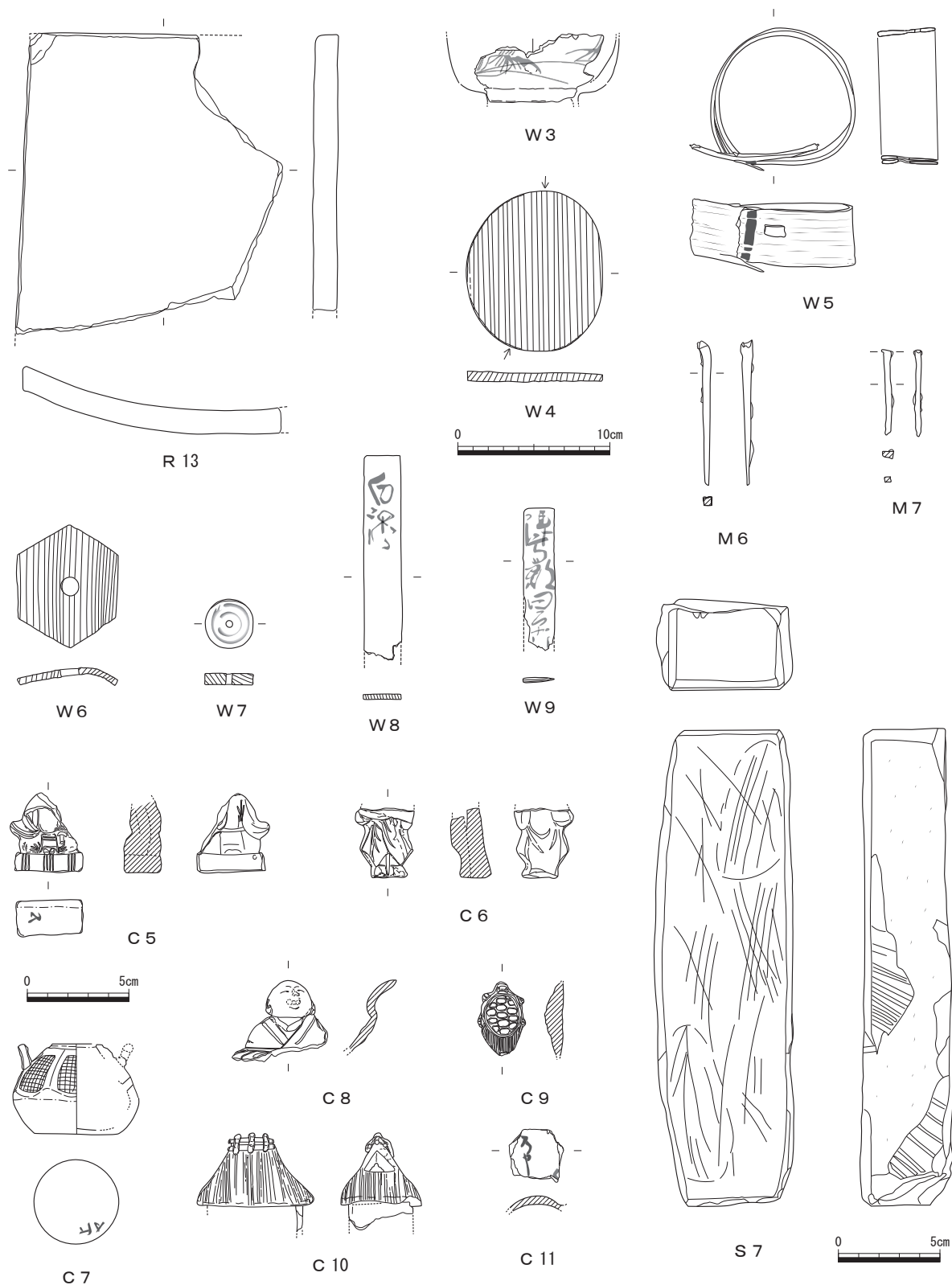


第29図 土坑51(1/60)・出土遺物1(1/4)

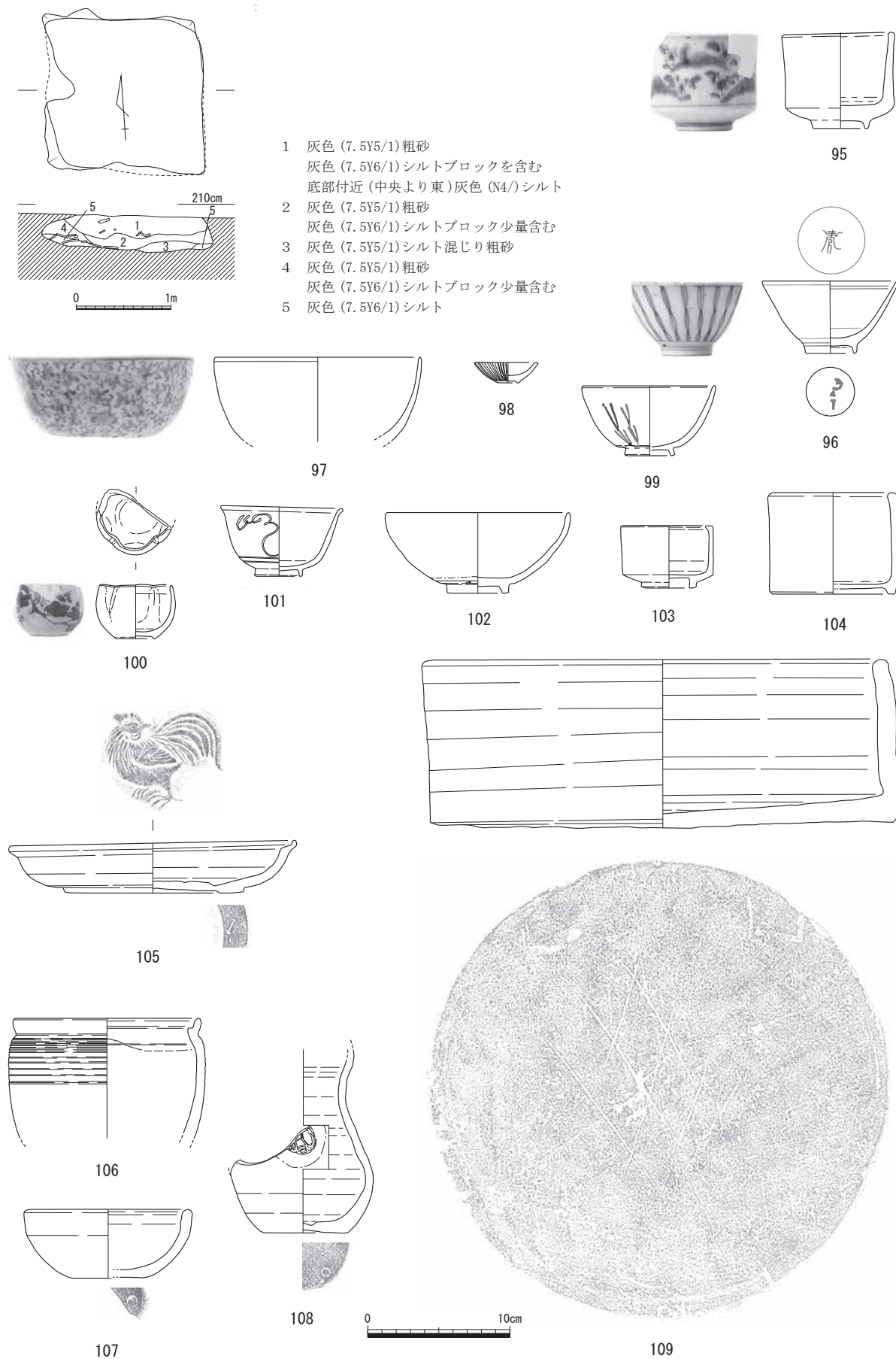


第30図 土坑51出土遺物2 (1/4)

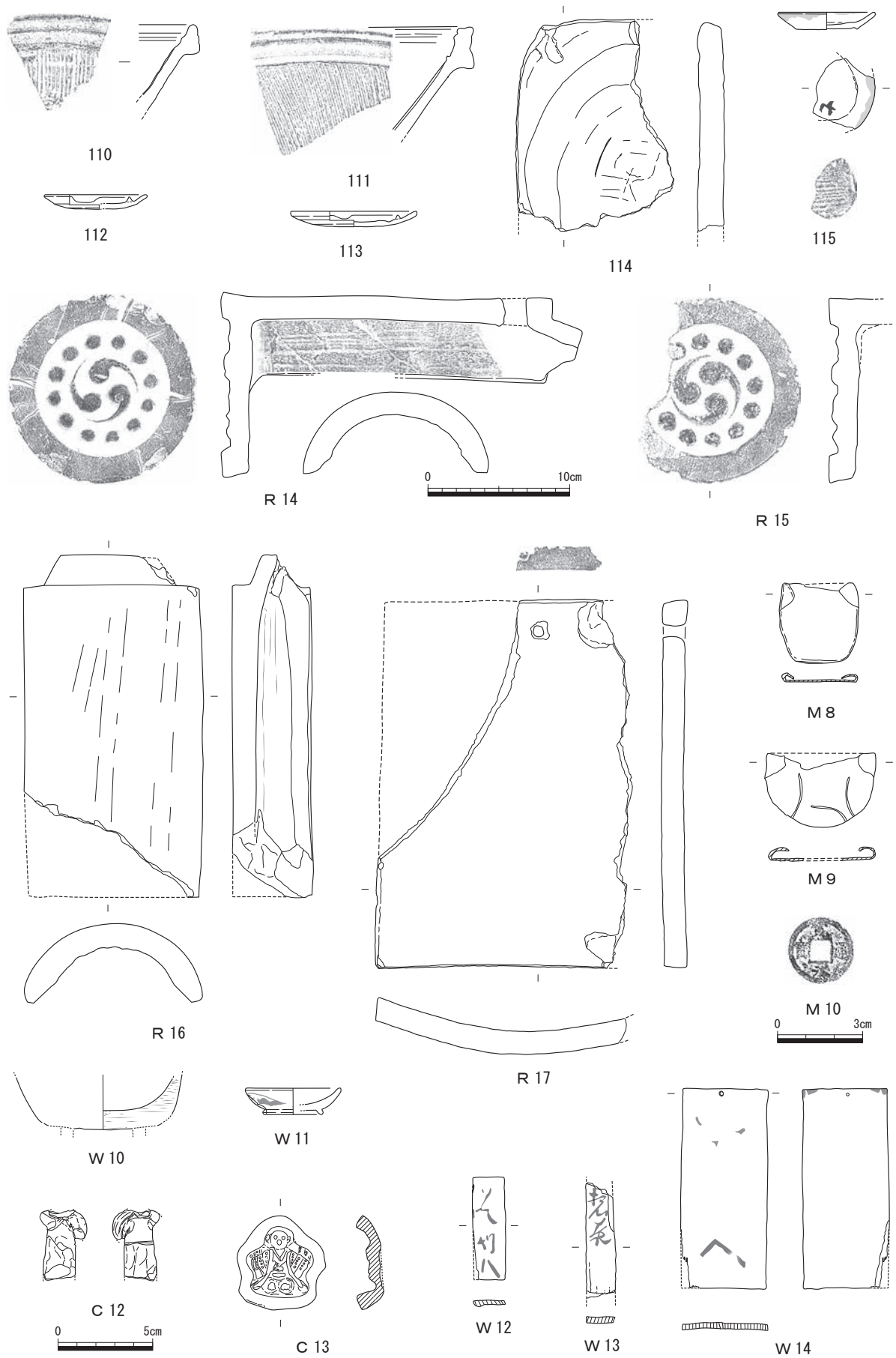
のような状況から、上層部は洪水による一括堆積が考えられる。下層部 11 層は均質なシルト層で、11 層除去後に本土坑以前に掘削されたピットが検出されている。遺物では、図示したものとその同類、貝・骨、種子、瓦片 26.8kg があつた。染付 70 は瀬戸・美濃産と思われる。85～87 は備前の型押皿で、桜の文様を施す。R 10 は軒平瓦の中央部で、巴文がある。遺構は 19 世紀に埋没した可能性が高い。



第 31 図 土坑 51 出土遺物 3 (1/4・1/3)



第32図 土坑 52 (1/60)・出土遺物 1 (1/4)



第33図 土坑52出土遺物2 (1/4・1/3・1/2)

土坑 52 (第 32・33 図、巻頭図版 4、図版 4・9)

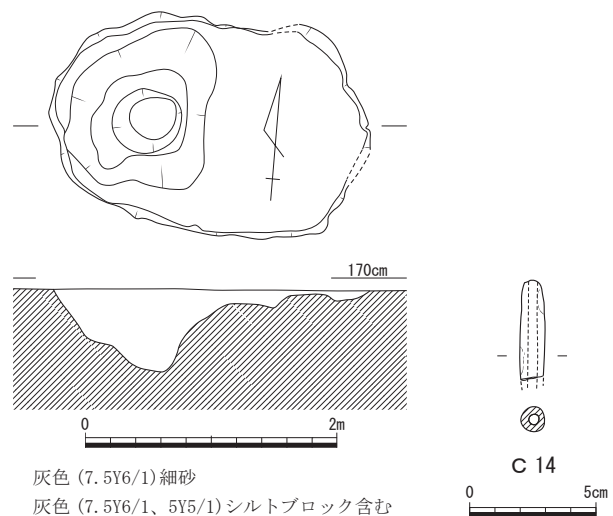
調査区中央西に位置する、ほぼ正方形の土坑である。埋土は第 1 層がシルト質のブロックを含み下部に黒色層状の有機物ラミナのある粗砂層、その下層は粗砂を含むシルト層である。西側の側面は下部が外側へ折り込んだ形になっている。このことから、埋土は洪水による一括堆積であると想定できる。出土遺物は図示したものとその同類、縄、貝・骨、種子の他に瓦片 21.2kg があった。皿 105 や徳利 108 のような備前焼型押しは 18 世紀以降とされる。陶器には信楽小杉椀 99 があり、100・101 も信楽産かもしれない。110 は備前、111 は関西系の播鉢である。軒丸瓦 R 14 は 18 世紀末～19 世紀代の特徴を示す。遺物から遺構は 19 世紀に埋没したと考えられる。

土坑 53 (第 34 図)

調査区中央東で溝 3 の下層に位置する、楕円形の土坑である。埋土は溝 2・3 に類似し、粗砂を含む灰色細砂で、シルト質のブロックを少量含んでいる。調査時江戸遺構検出面では認識できず、標高 160cm まで掘り下げて検出できたものである。掘り方は西側半分だけを摺鉢状に深く掘り込み、標高 100cm 付近で直径 30cm の円形になって停止している。出土遺物は図示したものと土師器皿、瓦片、鉄滓のいずれも小片であった。遺構は遺物からは時期決定が難しいが、埋土から溝 3 とほぼ同時か若干古い 18 世紀代に埋没した可能性が高い。

土坑 54 (第 35・36 図、巻頭図版 4、図版 5・9)

調査区南西に位置する、長方形の土坑である。埋土は第 6 層の粗砂含むシルト質層の上から第 1～5 層の粗砂層・シルト～微砂層が挟りこむように積み重なっている。中でも第 1・5 層は粗砂と礫からなる層で、第 6 層まで含めて洪水による堆積と思われる。土坑の東側辺には、掘り方側縁に沿った長さ最大 215cm の 2 枚の板が折り重なり、その東側に同じ方向・長さで 6～7 本の竹が並んだ状態で検出された。また 2 枚の板の間に東下がりには打ち込まれた杭も確認できた。これらは土坑の壁面に沿って立てられていたと推測され、平成 22 年調

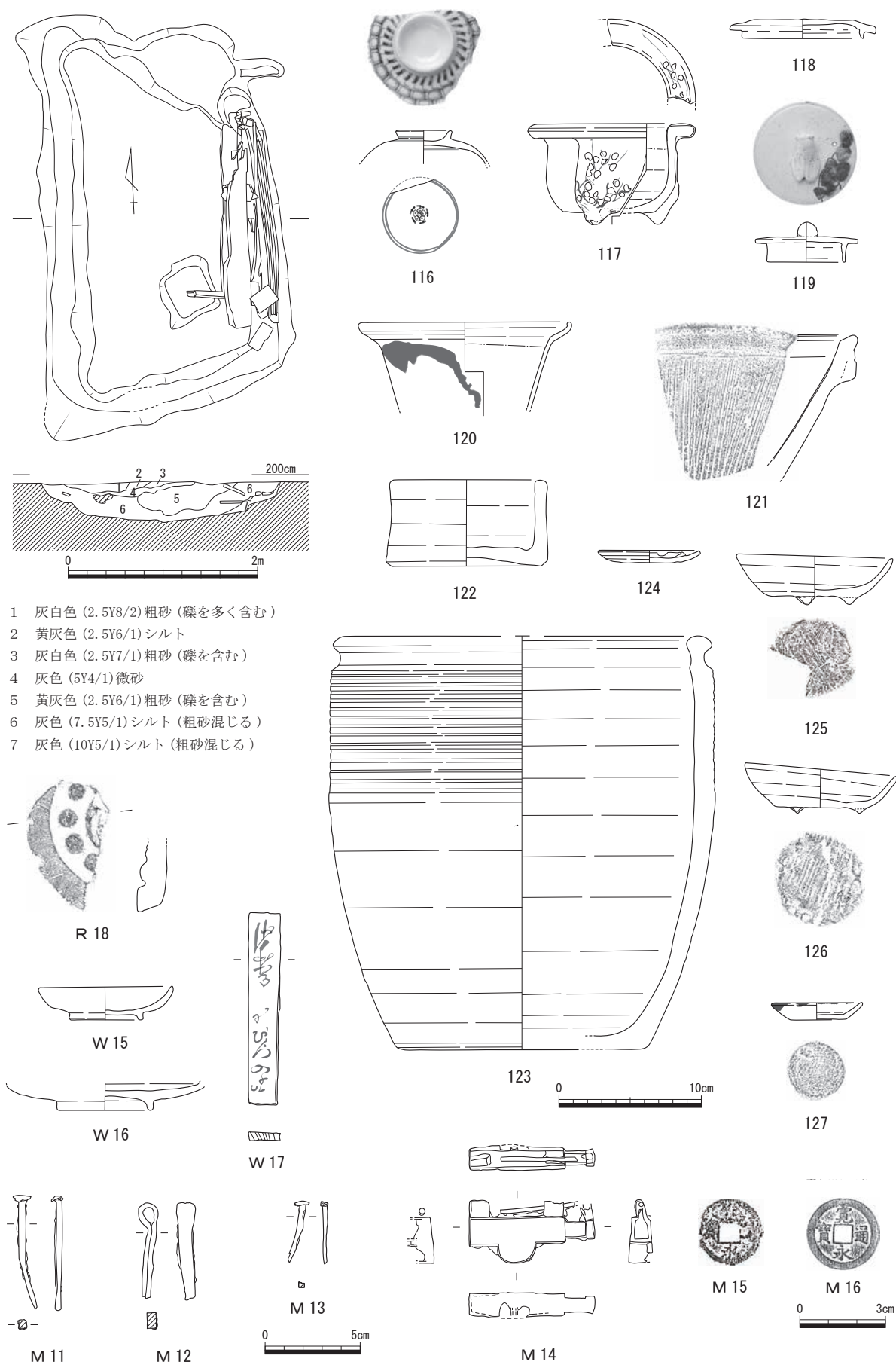


第 34 図 土坑 53 (1/60)・出土遺物 (1/3)

査時に認められ穴倉とした土坑と同様の遺構である可能性が高い。西側辺には幅約 20cm の段が存在するが、この部分にも板や杭で壁面が構築されていたものと考えられる。南辺は西辺と類似するが、北辺は攪乱で元来の形状が分からない。出土遺物は図示したものとその同類、縄、貝・骨、種子、鉄滓の他に瓦片 22.8kg があった。染付蓋 116 の呉須は暗緑灰色で 18 世紀後半の製品であろうか。M 14 は錠前で、錠穴周辺の残存が悪いため実測図は裏面を中心に掲載している。シリンダー部が外れかけの状態で、錠穴周辺に棒状の痕跡があるため錠が錠穴に刺さった状態だった可能性がある。M 15 は不鮮明だが M 16 はいわゆる新寛永である。遺物から遺構は 19 世紀に埋没したと考えられる。

土坑 55 (第 37 図)

調査区南側で土坑 57 の北に位置する、不整形の土坑である。埋土は微砂層でシルト質の 2 cm 台程



第35図 土坑 54 (1/60)・出土遺物 1 (1/4・1/3・1/2)

第3章 発掘調査の成果

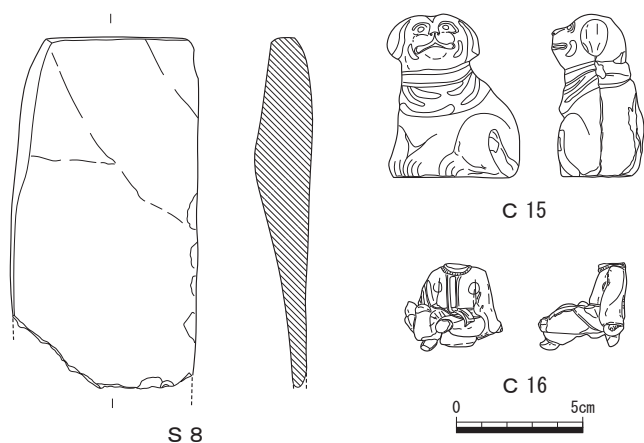
度のブロックを含み、ラミナ状の堆積が見られる部分もあって溝2・3の埋土に似ている。土坑内と南側辺には、10～30cm大の角・円礫が点在する。出土遺物はW 18・19と陶磁器、瓦片、貝、種子が少量であった。W 18・19は柄杓で、同一個体の可能性が高い。周辺土坑と同じく19世紀に埋没したと考えられる。

土坑 56 (第38図)

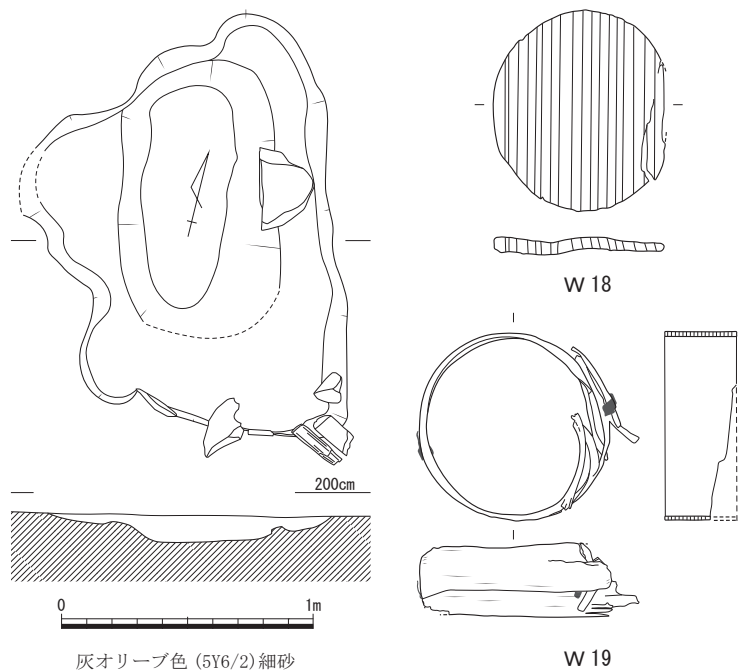
調査区南側で土坑 55 の南東に位置する、楕円形の土坑である。埋土は微砂層と有機質を含む粗砂層がラミナ状に堆積し、土坑 50～53・54などと似る。底面と壁面には、意図的に掘られたとは見えない凹凸が残る。出土遺物は図示したものと陶磁器、瓦片、木製品、貝、種子があった。木製品には箸・曲物がある。130は関西系の播鉢である。この土坑は、土坑 50～53・54に近い埋土ではあるがそれらと同時期かどうかの判断は難しく、19世紀以降の埋没と考えられる。

土坑 57 (第39・40図、巻頭図版4、図版6・9)

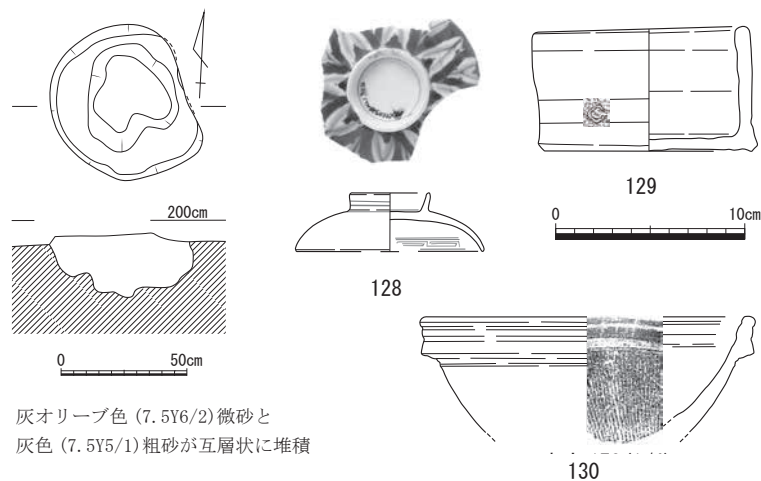
調査区南端に位置する、北から見ると「コ」の字形をした不整形の土坑である。底面と壁面には凹凸があり、断面は浅い皿状を呈している。掘り方上端近くには杭及びその痕跡が残されていた。それらの直径は10cm程度で、掘り方西側に21本、北側に9本、南西端に8本を確認した。埋土は細砂の混じったシルト質で、5～30cm大の円礫を含んでいる。出土遺物は図



第36図 土坑 54 出土遺物 2 (1/3)

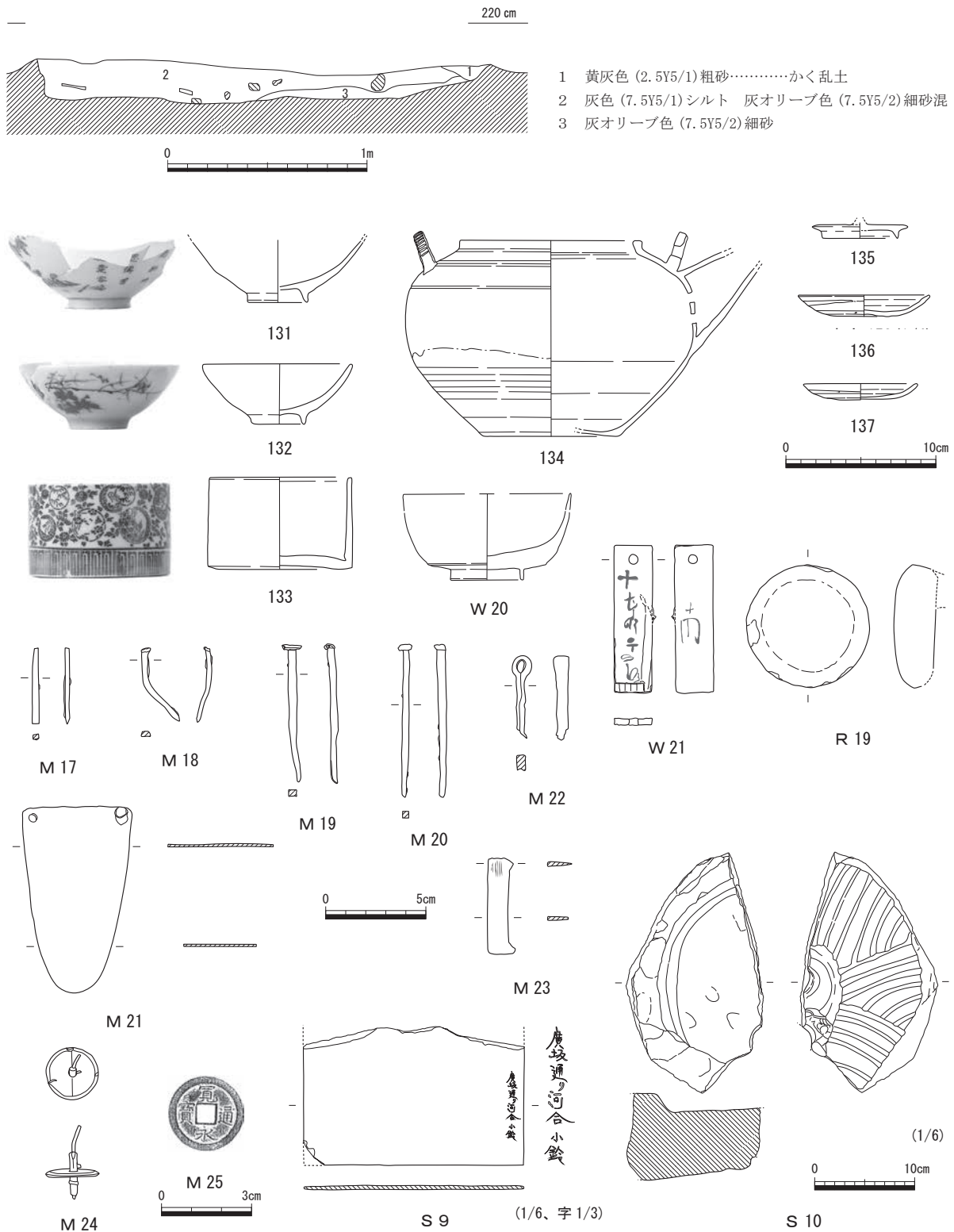


第37図 土坑 55 (1/30)・出土遺物 (1/4)

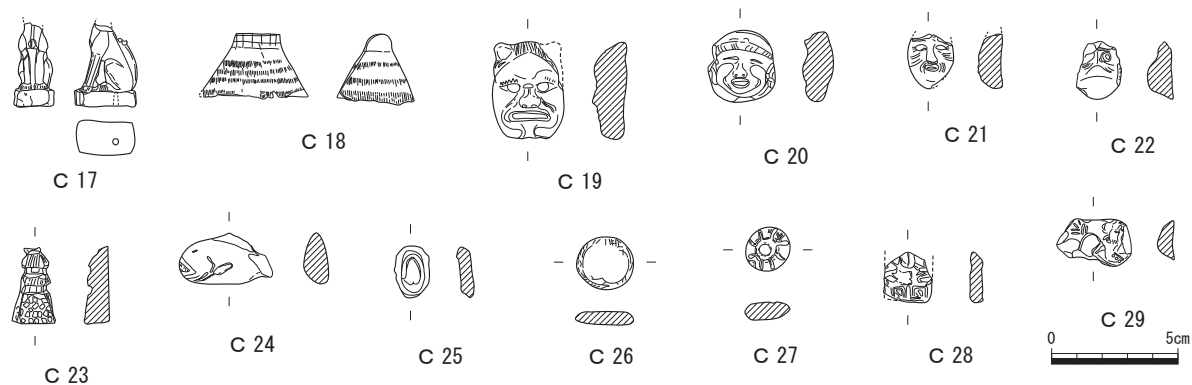


第38図 土坑 56 (1/30)・出土遺物 (1/4)

示したものとその同類、火打ち石片、曲物片、縄、貝・骨、種子の他に瓦片 10kg 弱があった。S 9 は石版で、「廣坂通り河合小鈴」の線刻がある。土製品は泥面子・箱庭道具が 13 点あった。C 18・23 が陶製の他は土製である。江戸時代後半の遺物が多いが、131・132 や S 9 などから第 2 次大戦までの近代に埋没したと推測される。



第 39 図 土坑 57 (1/30)・出土遺物 1 (1/6・1/4・1/3・1/2)



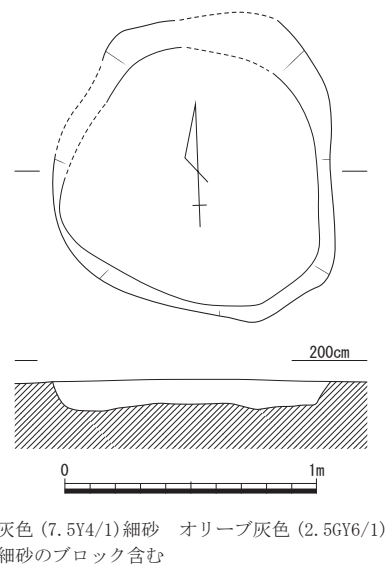
第40図 土坑 57 出土遺物 2 (1/3)

土坑 58 (第 41 図)

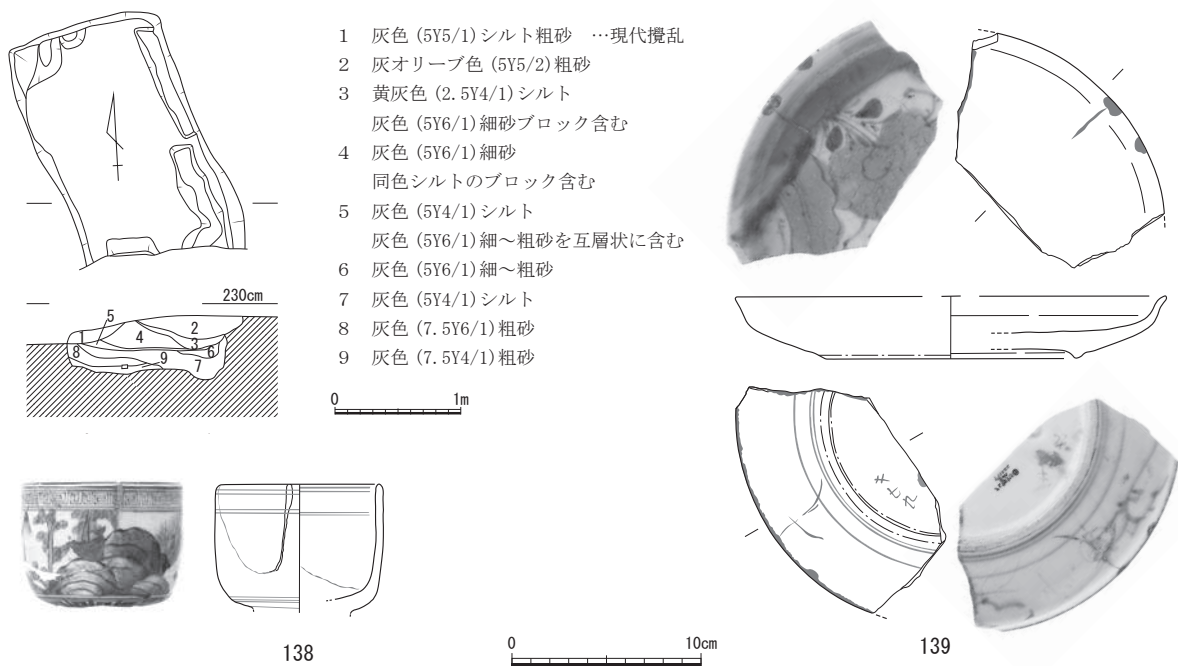
調査区南側で土坑 57 の東に位置する、楕円形の土坑である。埋土は細砂層で溝 2・3 の埋土に似ている。出土遺物は土師器皿、青磁、瓦で、いずれも小片である。この土坑は溝 2・3 とほぼ同じ、18 世紀代に埋没した可能性が高い。

土坑 59 (第 42・43 図、巻頭図版 4、図版 6・10)

調査区南東端で土坑 60 の西に位置する、方形の土坑である。側面はほぼ垂直だが、底面は東側に溝を掘った形状になっている。南端は一部登り斜面を検出しているが、調査範囲外へさらに広がり確認できなかった。埋土はシルト層と有機質を多く含む粗・細砂層がラミナ状に堆積し、土坑 60 と似る。出土遺物は図示したものと陶磁器、木製品、貝、種子の他に瓦片 11.7kg があつた。染付 138 は 19 世紀前半、139 は 18 世紀前半と思わ



第41図 土坑 58 (1/30)

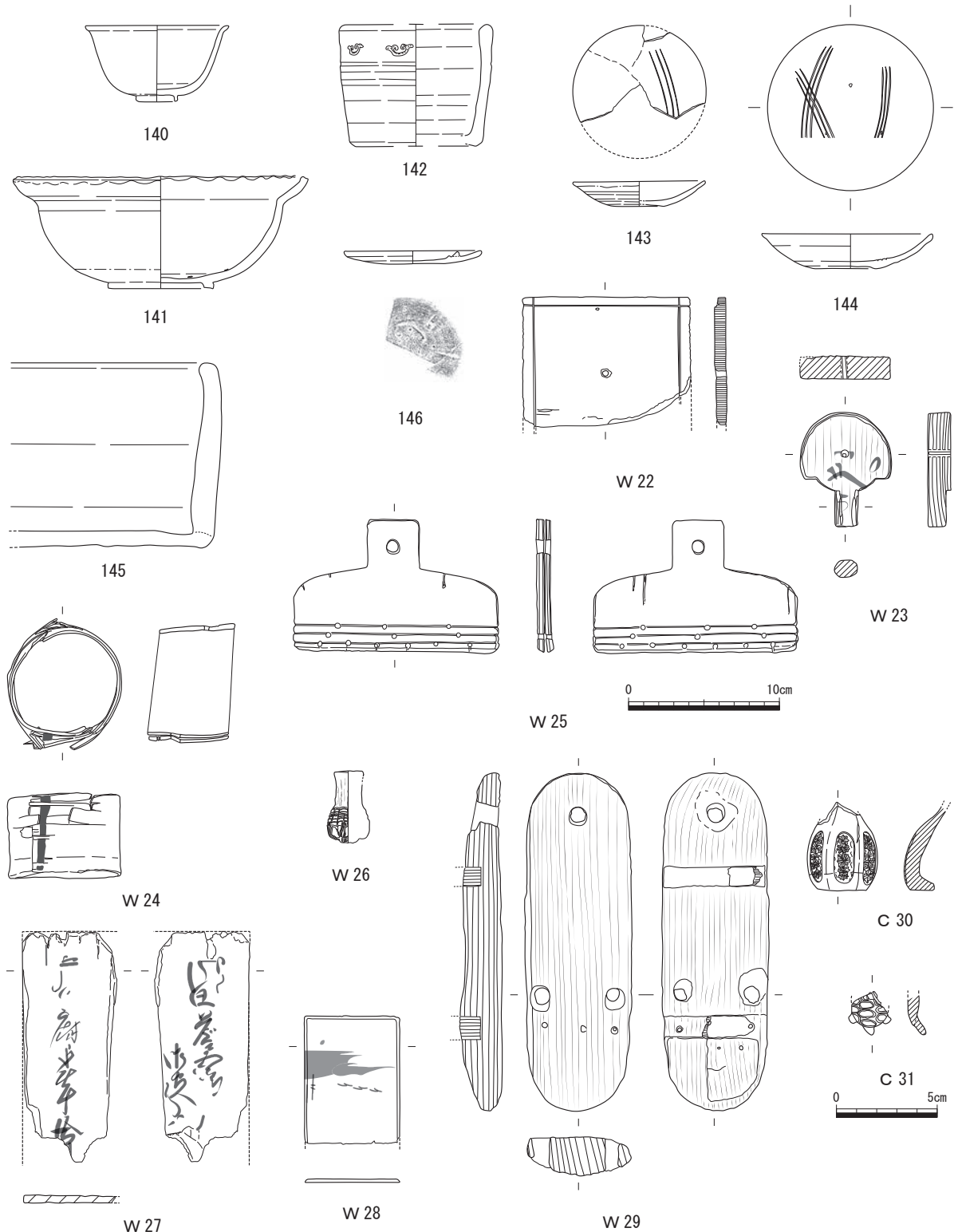


第42図 土坑 59 (1/60) ・出土遺物 1 (1/4)

れるが、共に焼継がある。遺構は19世紀以降の埋没と考えられる。

土坑 60 (第44～47図、巻頭図版4、図版6・10)

調査区南東端で土坑 59 の東に位置する、方形の土坑である。側面はほぼ垂直で、内側に方形区画を何か所か掘りくぼめる形状になっている。東・南側は調査範囲外へ伸びるため、正確な規模は不明である。埋土はシルト層と有機質を多く含む粗・細砂層がラミナ状に堆積している。このシルト層も



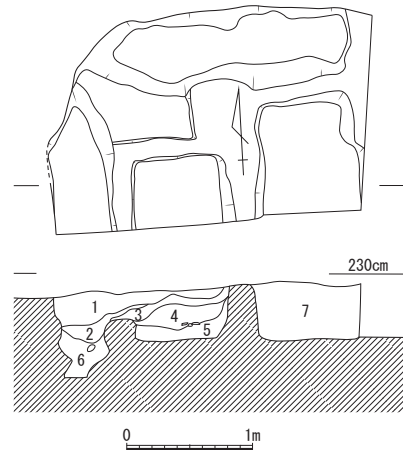
第43図 土坑 59 出土遺物2 (1/4・1/3)

第3章 発掘調査の成果

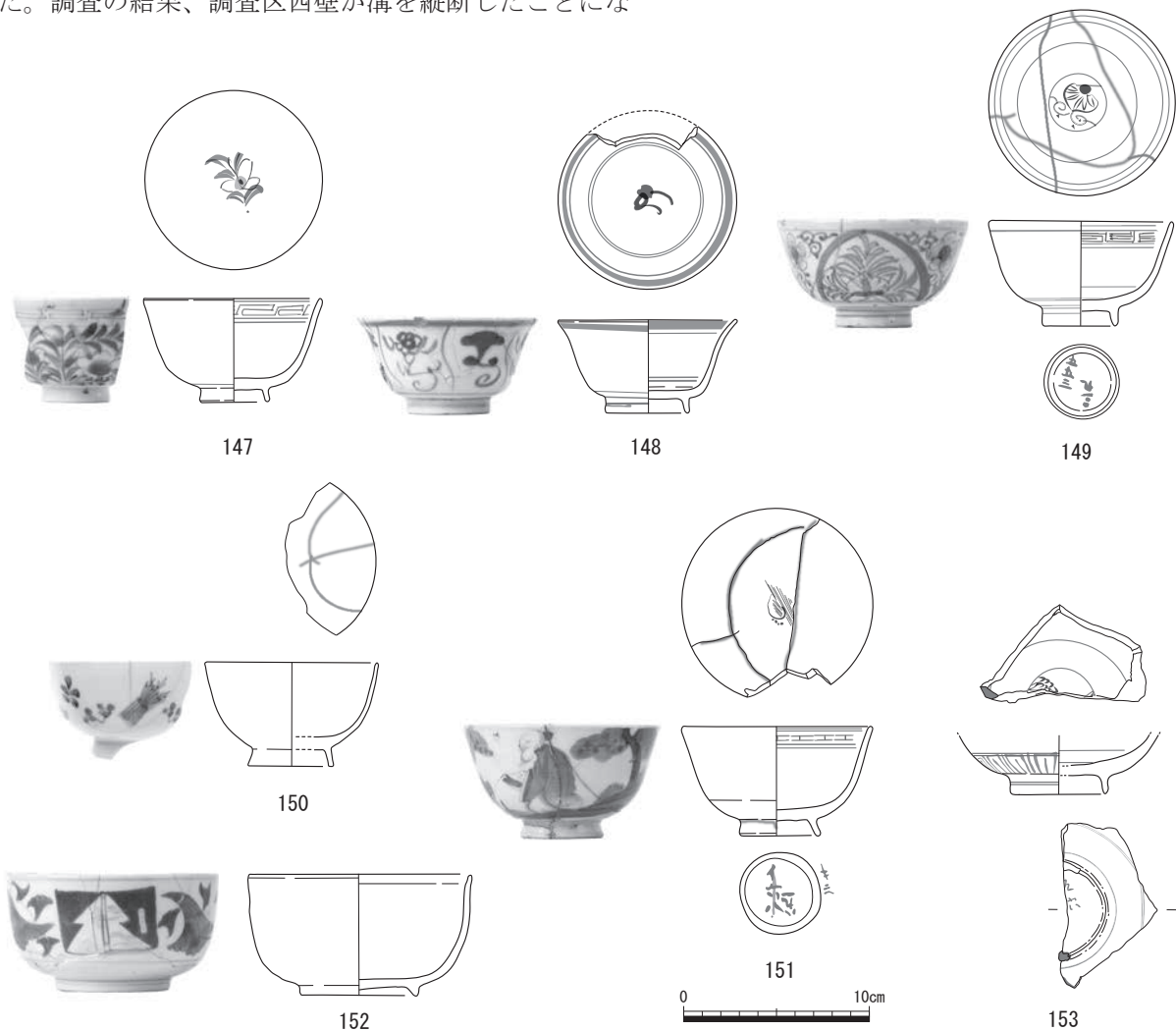
単一の堆積層とはいえないものである。出土遺物は10箱分と非常に多いが、瓦片が73.8kgと多数を占める。他には図示したものとその同類、縄、貝、種子があった。染付 149 ～ 151・153 ～ 155・161・163 には焼継がある。165 は高台内面に「志戸呂」の刻印があり、静岡県島田市に窯がある志戸呂焼と考えられる。186 は見込みのスリメが放射状に入り、明石産であろう。191 は胎土に砂粒を多く含み、内面に光沢のない黒色のスラグが付着していて、埴塼とみていいだろう。この遺構も19世紀以降の埋没と考えられる。

溝 1 (第6・24・48 図)

調査区西壁と並行して南北方向に検出された溝である。重機掘削時に礫の出土から遺構の存在が予想されたが、礫を残すと以後の調査に支障が生じると考え、これを除去して断面観察で規模を押さえることにした。調査の結果、調査区西壁が溝を縦断したことにな

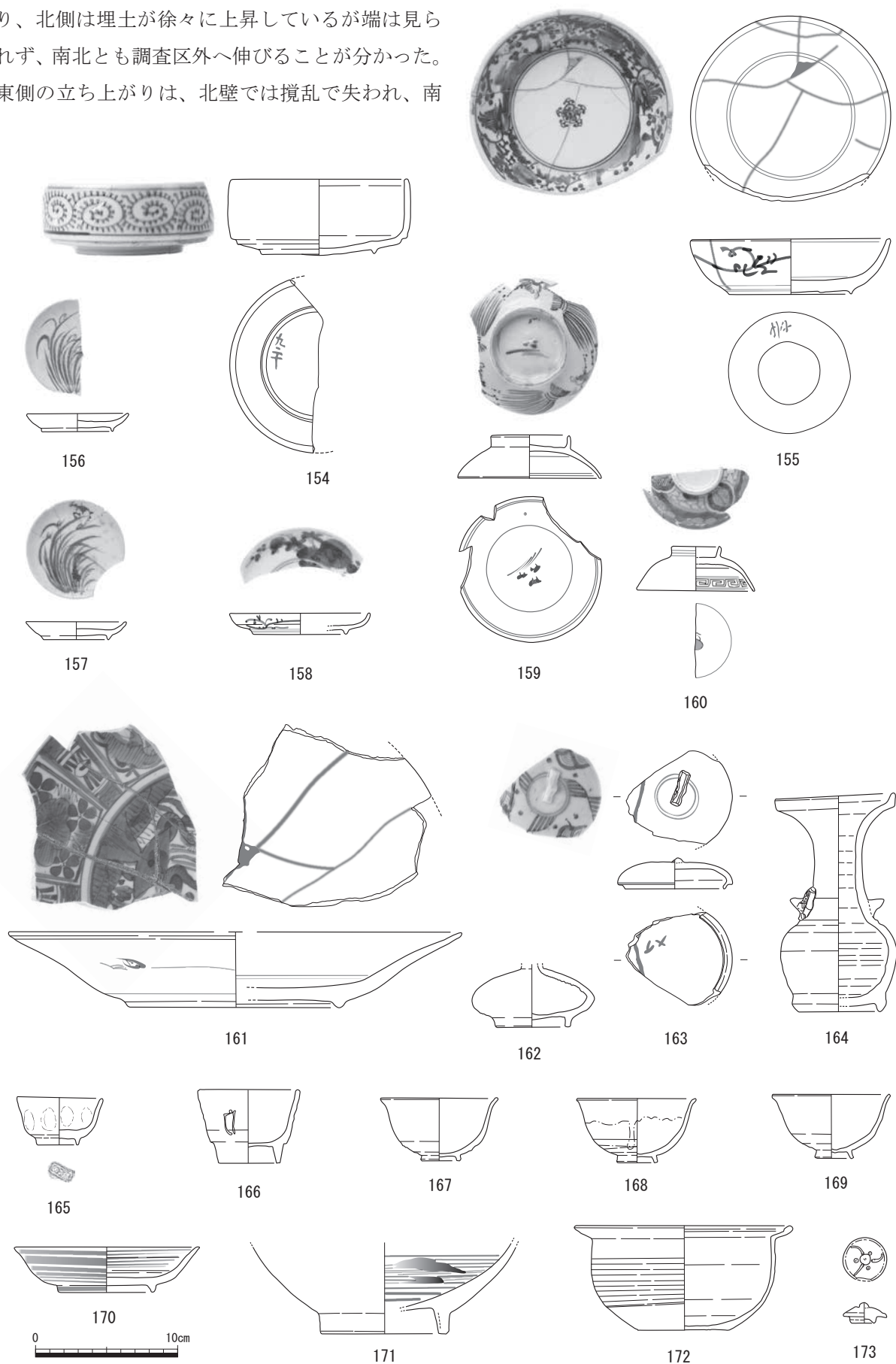


- 1 黄灰色 (2.5Y4/1) 微～粗砂
- 2 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粗砂 植物性有機物の水性堆積
- 3 灰オリーブ色 (5Y6/2) シルト 礫微かに含む
- 4 黄灰色 (2.5Y5/1) 粗砂 礫含む 植物性有機物の水性堆積
- 5 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト
- 6 灰色 (5Y5/1) シルト 植物性有機物の水性堆積
- 7 黄灰色 (2.5Y5/1) 粗砂 有機物を多く含む間層あり

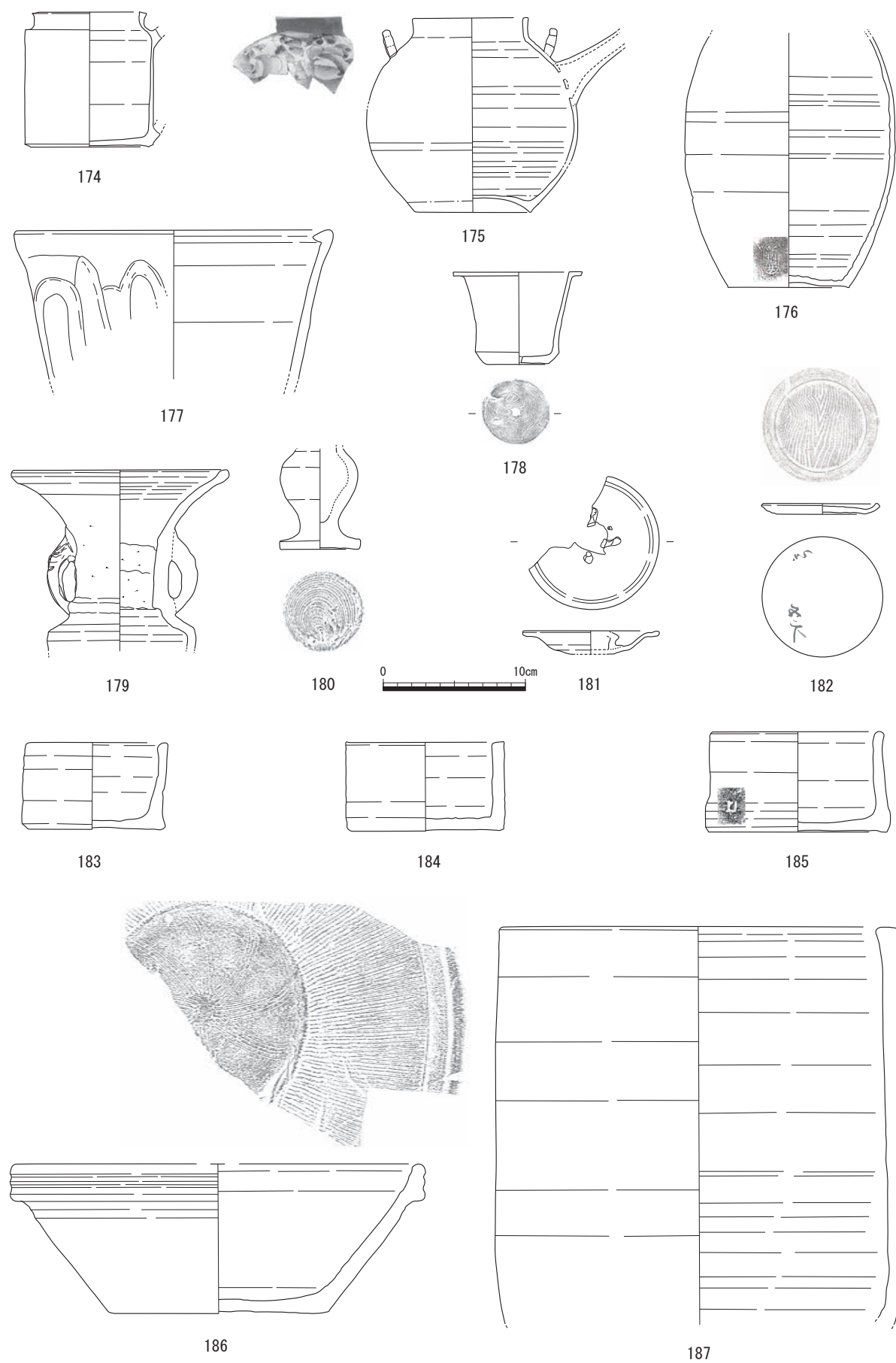


第44図 土坑 60(1/60)・出土遺物 1 (1/4)

り、北側は埋土が徐々に上昇しているが端は見られず、南北とも調査区外へ伸びることが分かった。東側の立ち上がりは、北壁では攪乱で失われ、南

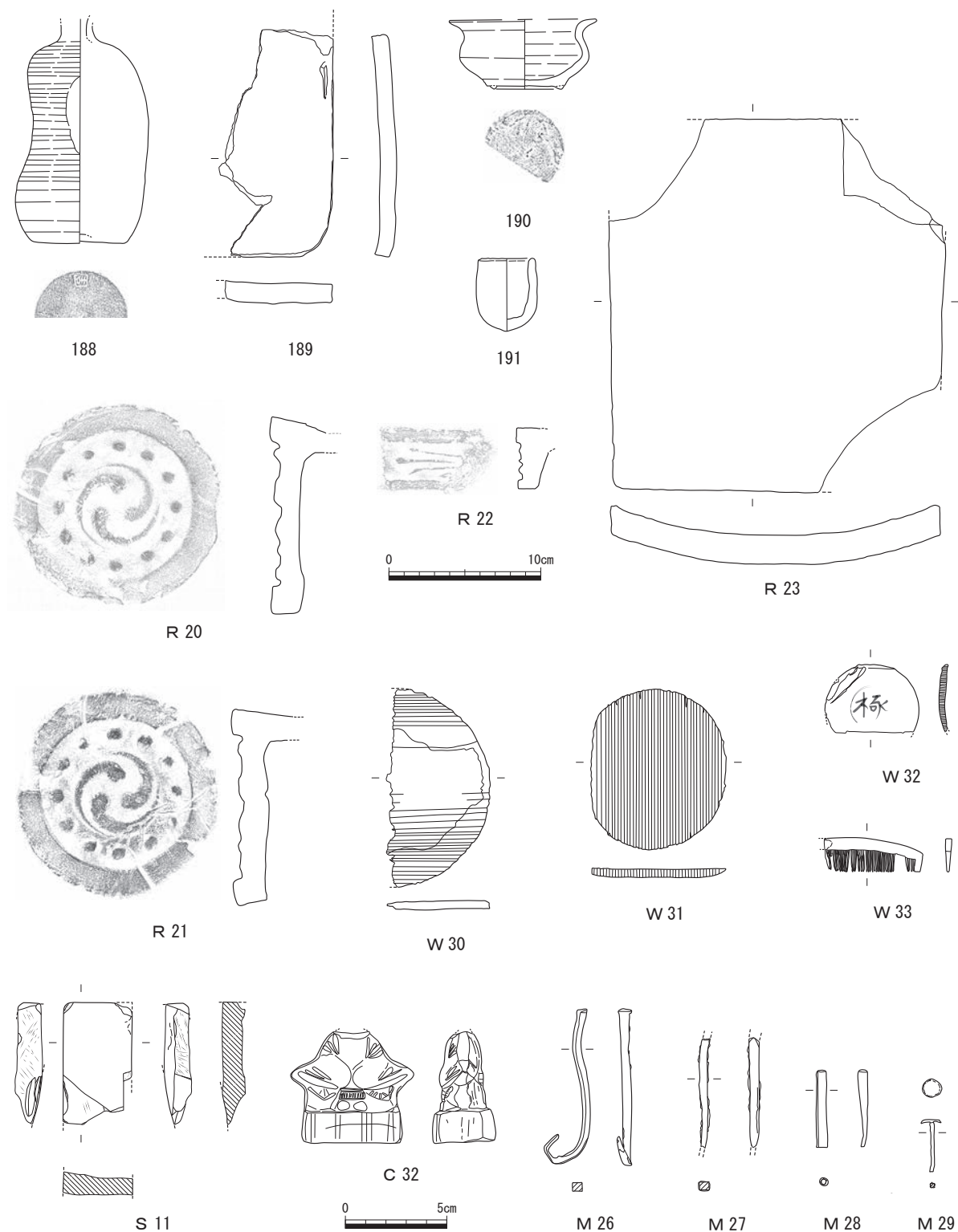


第45図 土坑60出土遺物2 (1/4)



第46図 土坑60出土遺物3 (1/4)

壁では第48図の通り素掘りで垂直に近いものであった。溝は大きく2層に分かれ、上層は第6図第2・3層で、内訳は第2層が粗砂からなる堆積、第3層が微砂～シルト層となり、最大60cmの角礫、板材を含み杭が打ち込まれている。角礫の存在から溝の兩岸に石垣が構築されていた可能性が高い。下層は第4～7層で、南から6.5～9.5mで断面に残らない部分があるため、この部分は溝が蛇行していたか、幅が狭まっていたと考えられる。遺物は陶磁器、土師器皿、瓦、木製品など少数が取り上げ



第47図 土坑 60 出土遺物 4 (1/4・1/3)

られた。上層が昭和時代まで、下層は江戸時代後半の埋没と考えられる。

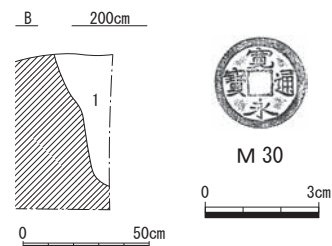
溝2 (第24・49図)

調査区北側にある東西方向の溝で、西側の溝1下層との切り合いは明確ではなく、東側の溝3とは平面観察を行ったが区別できなかった。埋土は溝1下層や溝3と似た灰色細砂～シルト層で、葉・枝などの植物遺体を含むラミナ状の堆積である。溝底面は西から東へ下がって断面Bの位置で最も深くなり、東端部は最小幅26cm・深さ4cmと浅くなって溝3と接続するように見える。出土遺物は図示したものと陶磁器、土師器、箸や曲物など木製品、貝・骨、種子があった。

備前焼徳利192・193は小形品で18世紀中頃に相当し、遺構自体は18世紀後半代の埋没と考えられる。

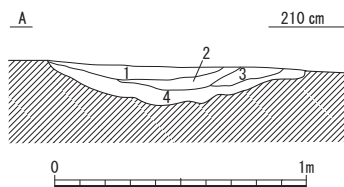
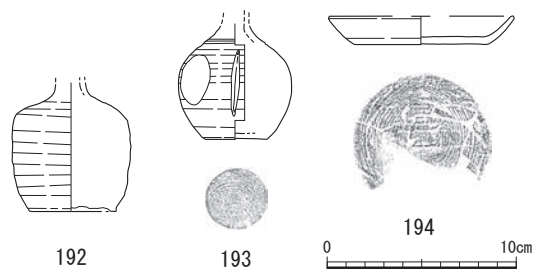
溝3 (第7・24・50図)

調査区東側で南北から東西に屈曲する溝で、北端は削平で検出できなかったが、長さは北から屈曲部

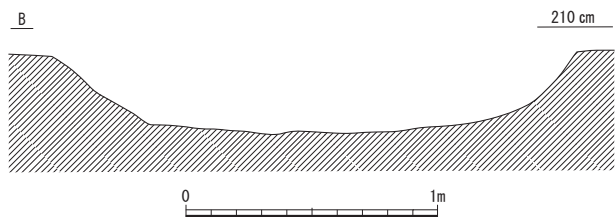


1 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 粗砂

第48図 溝1 (1/30)・出土遺物 (1/2)

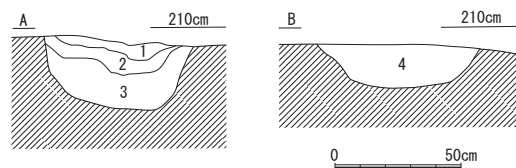


1 灰色 (7.5Y7/2) 細砂 3 灰オリーブ色 (5Y6/2) 細砂～シルト
2 灰色 (5Y5/1) 細砂 4 灰色 (5Y5/1) シルト

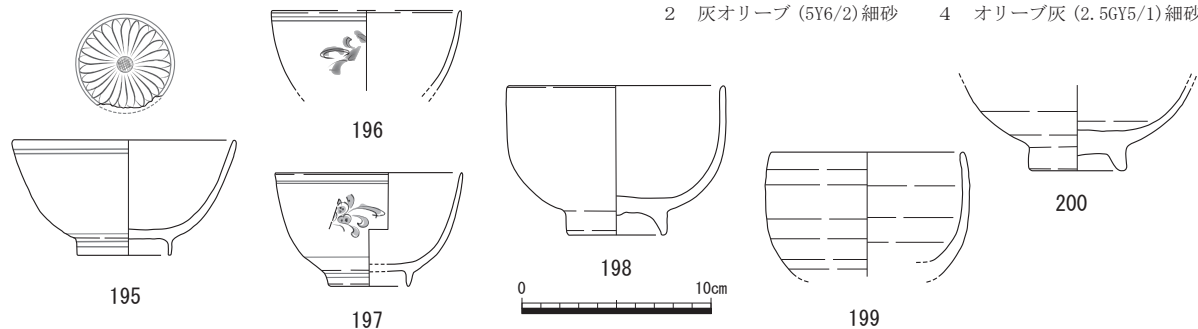


第49図 溝2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

までが19m以上、そこから東西は6m以上になる。全体が素掘りで杭や礫の設置はなく、断面は逆台形を示す。埋土は溝1下層・溝2と類似した灰色細砂で、葉・枝などの植物遺体を含んでラミナ状の堆積をしている。溝2との間に同じ埋土の浅い溝状の堆積を確認したので、溝2と接続している可能性が高い。出土遺物は図示したものと陶磁器、土師器、鉄滓、骨、種子があった。染付碗195～197は18世紀前半代、陶器碗198～200も18世紀代で、遺構自体は18世紀後半代の埋没と考えられる。



1 灰色 (5Y6/1) 細砂 3 灰色 (5Y5/1) 細砂
2 灰オリーブ (5Y6/2) 細砂 4 オリーブ灰 (2.5GY5/1) 細砂



第50図 溝3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第4章 自然科学的分析

第1節 出土木材の樹種同定と土壌の微化石分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

南方遺跡は、岡山県岡山市北区南方に所在し、旭川西岸の沖積平野に形成された比較的大規模な微高地のひとつに立地する。今回、岡山法務局本庁舎新営に伴う発掘調査区での調査により、弥生時代後期や江戸時代の遺構や遺物が認められた。このうち、弥生時代後期の遺構では土坑が検出され、木製品や植物遺体が出土した。

本分析調査では、木製品および植物遺体について使用材などを明らかにするために樹種同定を行う。また土坑内などの埋土や調査区壁面に見られた土層について遺跡の構造を復元するための資料として、当該期の周辺植生に関する情報を得るために花粉分析と植物珪酸体分析を実施する。

I 出土木材の樹種同定

1. 試料

試料は、2点である。試料の詳細は結果とともに表2に示す。このうち、資料番号W1は1区で検出された土坑9より出土した鋤の一部から採取された。もう1点は、2区の土坑47埋土下層より出土した甕形土器の下に見られた植物遺体（資料番号W2）で、その形状から編物の可能性が指摘されている。

2. 分析方法

試料のうち、W1は剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の切片を作成する。ガムクロラルで封入、光学顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。W2は炭化しているため、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3割断面を作成し、走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。これらの試料で観察された材組織の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお木材組織の名称や特徴は島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3. 結果

結果を表2に示す。W1は常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属に同定された。W2は、広葉樹（若年枝）でつる植物？の可能性がある。以下に各分類群の解剖学的特徴を述べる。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*） ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔

表2 樹種同定結果

試料番号	調査区	出土遺構	樹種	種別など	備考
W1	1区	土坑9	コナラ属アカガシ亜属	鋤（一部）	掲載番号 W1
W2	2区	土坑47	広葉樹（若年枝）	編み物の可能性あり	下層土器底の植物

を有す。放射組織は同性、単列で1～15細胞高のものと、複合放射組織とがある。

・広葉樹（若年枝）

直径は2mm程度で中心に髄がみられる。道管は100μm程度で放射方向に配列する。道管は階段穿孔、放射組織は1～6列で、高さは1mm程度。細くて年輪界が無いため、若年枝とみられる。木材組織が未発達であるため、種類の特定は難しい。

4. 考察

鋤の一部から採取されたW1は、高木になる常緑広葉樹のアカガシ亜属に同定された。アカガシ亜属は、国産の木材の中で最も重硬な部類に入る。非常に堅く、粘りがあるため、強度・耐久性ともに優れる。このため農具など強度を必要とする場面に使われることが多い。今回は、アカガシ亜属の強度を生かした用材選択が行われている。

W2は炭化しており、広葉樹（つる植物？）の若年枝である。土壌ごとに取り上げた試料は炭化し、小枝の集合である粗朶が一部交差しており、編み物のようにも見える。ただし、全体として不規則な配列をしているため、用途は不明である。なお粗朶は燃料材など様々な資材として使われたことから、当時利用されたものに由来すると考えられる。

II 土壌の微化石分析

1. 試料

微化石分析試料一覧を表3に示す。試料は、土坑や土器内より採取された4点（試料番号C1～C4）と、調査区東壁より採取された2点（試料番号C5とC6）の、合計6点である。

C1は、1区より検出された土坑6の埋土、C2は2区より検出された土坑46の北東に位置する最下層に当たる埋土、C3は同じ土坑46の底面に見られた粘土、C4は2区より検出された土坑47の下層土器内の埋土である。C4は、土器内容物を含む可能性が指摘されている。C5とC6は、2区東壁南端の土層から採取されており、C5は弥生時代後期の土坑の直上層とされる黒色土、C6は上位に見られた古墳時代の遺物包含層の可能性が指摘される土層に当たる。

2. 分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.2）による有機

表3 微化石分析試料

試料番号	調査区	出土遺構	詳細	備考
C1	1区	土坑6	埋土サンプル	
C2	2区	土坑46	北東最下層埋土	
C3	2区	土坑46	粘土サンプル	底面の土を採取
C4	2区	土坑47	下層土器内埋土	
C5	2区	調査区東壁南端	黒色土（弥生包含層）	
C6	2区	調査区東壁南端	黒色土の上の層（古墳包含層？）	

物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が 100 個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめておく。

(2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1 g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は 10 の位で四捨五入し 100 単位に丸め、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、100 個 / g 未満は「<100」で表示する。

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を表 4、第 51 図に示す。各試料から、花粉化石が豊富に産出する。保存状態は普通～やや悪い。

花粉群集組成は、C 3 で木本花粉が優占するが、それ以外の 5 点では木本花粉と草本花粉が同率、もしくは草本花粉の割合がやや高い。

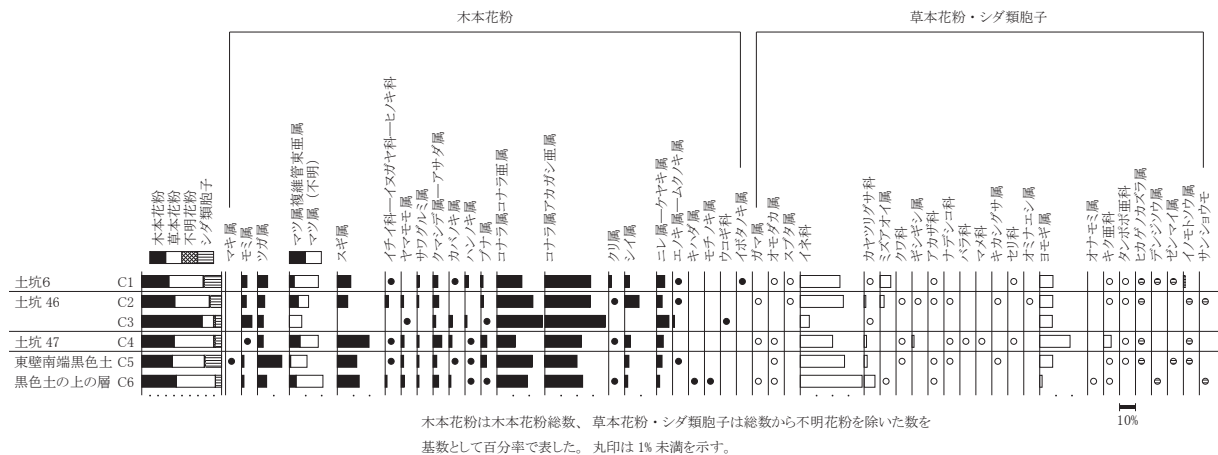
木本花粉について見ると、いずれの試料も群集組成が類似しており、コナラ属コナラ亜属とコナラ属アカガシ亜属が多産し、ツガ属、マツ属、スギ属、クマシデ属—アサダ属、シイ属、ニレ属—ケヤキ属などを伴う。

草本花粉について見ると、C 1 と C 2 ではイネ科が多産し、ミズアオイ属、ヨモギ属などを伴う。C 3 は少ないながらもイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが認められる。C 4 はイネ科やヨモギ属が多く認められ、カヤツリグサ科などを伴う。

2 区東壁南端の C 5 と C 6 には、産状に違いが見られる。C 5 はイネ科やヨモギ属が多く認められ、カヤツリグサ科などを伴う。一方、C 6 はイネ科が優占し、カヤツリグサ科などを伴う。多産するイネ科には、粒径の大きさが栽培種のイネ属に似るものが含まれるが、保存状態が良好でないためにイネ属か否かの判定は困難である。また、水湿地生植物に由来するものとしてミズアオイ属をはじめとしてガマ属、オモダカ属、スブタ属、デンジソウ属、サンショウモなどが確認される。

表4 花粉分析結果

種類	1区	2区				
	土坑 6	土坑 46		土坑 47	調査区東壁南端	
	埋土サンプル	北東最下層埋土	粘土サンプル	下層土器内埋土	黒色土	黒色土の上の層
	C1	C2	C3	C4	C5	C6
木本花粉						
マキ属	-	-	-	-	2	-
モミ属	8	6	16	1	4	4
ツガ属	15	9	9	6	40	15
マツ属複維管束亜属	7	11	-	11	2	11
マツ属(不明)	36	13	19	19	27	44
スギ属	20	13	-	33	32	36
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	2	4	-	1	2	3
ヤマモモ属	-	3	2	3	4	5
サワグルミ属	3	2	-	2	3	3
クマシデ属—アサダ属	7	7	4	9	6	9
カバノキ属	1	-	5	3	2	3
ハンノキ属	5	-	3	1	2	1
ブナ属	3	3	2	6	9	2
コナラ属コナラ亜属	37	45	70	19	58	50
コナラ属アカガシ亜属	68	57	93	38	53	62
クリ属	4	1	-	1	-	2
シイ属	7	18	-	6	7	5
ニレ属—ケヤキ属	12	7	19	7	9	5
エノキ属—ムクノキ属	1	1	3	-	1	-
キハダ属	-	-	-	-	-	1
モチノキ属	-	-	-	-	-	1
ウコギ科	-	-	1	-	-	-
イボタノキ属	1	-	-	-	-	-
草本花粉						
ガマ属	-	1	-	2	-	1
オモダカ属	6	-	-	1	1	3
スブタ属	1	1	-	-	-	-
イネ科	171	129	18	81	188	234
カヤツリグサ科	4	5	3	6	13	41
ミズアオイ属	46	12	-	-	-	4
クワ科	-	3	-	2	1	-
ギンギン属	-	4	-	5	-	-
アカザ科	4	2	-	-	2	1
ナデシコ科	-	2	-	1	3	-
バラ科	-	-	-	1	-	-
マメ科	-	-	-	2	-	-
キカシグサ属	-	2	-	-	1	-
セリ科	2	-	-	2	-	-
オミナエシ属	-	1	-	-	-	-
ヨモギ属	57	39	25	76	55	9
オナモミ属	-	-	-	-	-	1
キク亜科	4	4	-	19	6	1
タンポポ亜科	3	3	-	3	3	-
不明花粉						
不明花粉	9	5	8	8	7	1
シダ類孢子						
ヒカゲノカズラ属	3	2	-	2	3	-
デンジソウ属	1	-	-	-	-	1
ゼンマイ属	1	-	-	-	1	-
イノモトソウ属	7	1	-	2	1	-
サンショウモ	-	1	-	-	-	1
他のシダ類孢子	141	66	25	29	137	45
合 計						
木本花粉	237	200	246	166	263	262
草本花粉	298	208	46	201	273	295
不明花粉	9	5	8	8	7	1
シダ類孢子	153	70	25	33	142	47
合計(不明を除く)	688	478	317	400	678	604



第51図 花粉化石群集

表5 植物珪酸体分析結果 (個/g)

分類群	1区	2区				
	土坑6	土坑46		土坑47	調査区東壁南端	
	埋土サンプル	北東最下層埋土	粘土サンプル	下層土器内埋土	黒色土	黒色土の上の層
	C1	C2	C3	C4	C5	C6
イネ科葉部短細胞珪酸体						
タケ亜科	400	500	<100	400	500	400
ヨシ属	<100	<100	—	—	<100	<100
不明	100	100	—	—	200	100
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ属	—	—	—	—	<100	200
タケ亜科	300	600	200	400	600	600
ヨシ属	<100	<100	—	—	100	100
不明	400	400	<100	400	500	600
合計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	500	700	<100	400	800	600
イネ科葉身機動細胞珪酸体	700	1,000	200	900	1,300	1,600
植物珪酸体含量	1,200	1,700	300	1,300	2,100	2,200
イネ科起源(その他)						
棒状珪酸体	*	*	—	**	**	**
長細胞起源	*	*	—	*	*	*
毛細胞起源	*	*	—	*	*	*

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)
合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている
<100: 100個/g未満
—: 未検出, *: 含有, **: 多い

(2) 植物珪酸体分析

結果を表5に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。また植物珪酸体含量が概して少ない。

各試料では、タケ亜科や分類群が明確にならない不明が見られる。またC1とC2では、ヨシ属も僅かに認められる。

2区東壁南端のC5とC6ではタケ亜科やヨシ属と共に、イネ属(機動細胞珪酸体)も僅かに産出

する。

なお、各試料からイネ科起源（棒状珪酸体，長細胞起源，毛細胞起源）も検出されるが、分類群の特定には至らない。

4. 考察

今回の調査対象とされた土坑や土器内より採取された土壌（C 1～C 4）および調査区東壁の2層位（C 5とC 6）では、周辺の森林植生を反映する木本類の群集組成が概ね同様であった。すなわち、コナラ属コナラ亜属とコナラ属アカガシ亜属が多産し、ツガ属、マツ属、スギ属などの針葉樹、クマシデ属ーアサダ属、シイ属、ニレ属ーケヤキ属などの広葉樹を伴う。このうち、アカガシ亜属はシイ属などとともに暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素であり、ツガ属やスギ属などは温帯性針葉樹の種類、コナラ亜属はクマシデ属ーアサダ属、ニレ属ーケヤキ属などと共に河畔林の構成要素である。これより、土坑や土器内を埋積する土壌および調査区東壁の層位が形成された弥生時代後期頃や後代（古墳時代？）の調査地周辺にはアカガシ亜属やシイ属などから成る照葉樹林が分布しており、部分的にツガ属やスギ属などの温帯性針葉樹も生育していたと推測される。またコナラ亜属、クマシデ属ーアサダ属、ニレ属ーケヤキ属などは、旭川沿いの河畔などに林分を形成していた可能性がある。マツ属複雑管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は極端な陽樹で二次林の代表的な種類でもあることから、周辺森林の林縁部などで二次林として存在した可能性がある。既存の調査事例によると、近畿地方では縄文時代末以降の気候の冷涼・多雨化に伴い、それまで照葉樹林が主体であったところに、ツガ属、スギ属等の針葉樹が分布拡大することが推定されている（那須，1989 など）。今回の調査結果も、既存の調査事例と矛盾しない。

次に、土坑周辺の草本植生、農耕を含む植物利用に関して、主に草本花粉の産状から検討する。

1区の土坑6の埋土サンプル（C 1）、2区の土坑46の北東最下層埋土（C 2）、土坑46の底面に見られた粘土サンプル（C 3）、土坑47の下層土器内埋土（C 4）は、いずれも土坑に由来する埋土等である。草本類ではイネ科が多産し、ヨモギ属などを伴う。植物珪酸体で検出された分類群からは、イネ科には少なくともタケ亜科が含まれる。イネ科やヨモギ属などは開けた明るい場所に生育する「人里植物」を多く含む分類群であり、その他にも同様の生育環境を示す種群が確認されている。したがって、これらの草本類は調査区内や周辺の草地に生育していた可能性が高い。またミズアオイ属をはじめとして、ガマ属、オモダカ属、スブタ属などの水湿地生草本、デンジソウ属、サンショウモなどの水生シダ類が確認されたことから、周辺にこれらが生育する水湿地も存在したことがうかがえる。1区の土坑9の埋土サンプル（C 1）や2区の土坑46の北東最下層埋土（C 2）では湿潤な場所に生育するヨシ属も見られており、前述と矛盾しない。

なお、土坑46底面の粘土サンプルは、他の試料と比較すると検出される花粉化石の種類や割合に違いが認められる。土坑底面に見られたことから、何処か別の場所に堆積した粘土を持ち込んで土坑底面に貼った可能性も考えられる。この点は、粘土の産状など発掘調査所見を含めて検討したい。

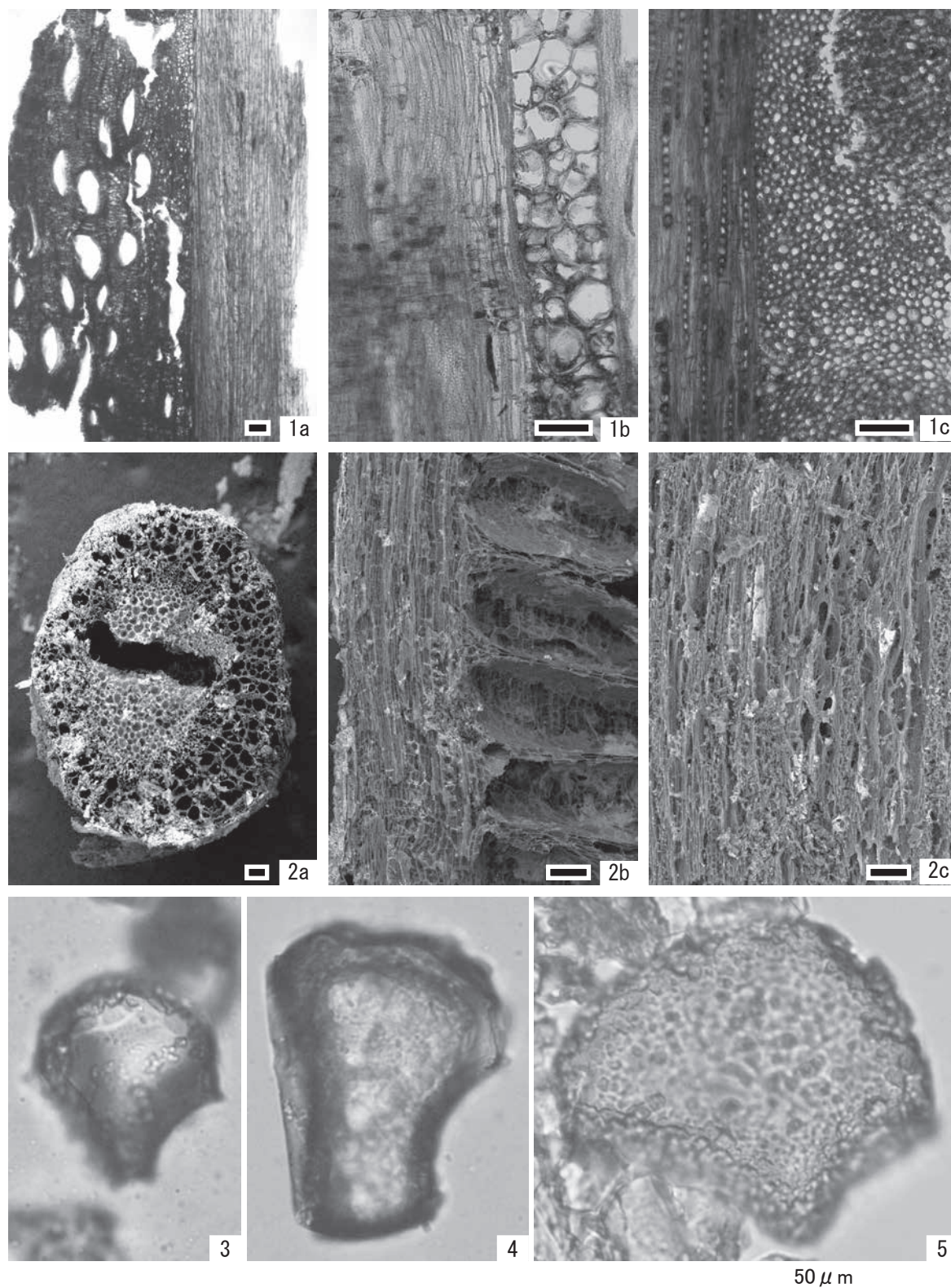
土坑47の下層土器内埋土（C 4）では、土器の内容物を含む可能性が指摘された。しかし、草本花粉は他の土坑試料と大きな違いは見られなかった。また稲穀殻や稲藁に由来する植物珪酸体や珪化組織片も検出されなかった。これらの状況を見る限り、栽培植物などの混入を積極的に支持することは難しい。

2区の東壁南端に見られた弥生時代後期の土坑の直上層とされる黒色土（C 5）と上位層（C 6）でも、

基本的にはイネ科が多産し、カヤツリグサ科やヨモギ属を伴う草本花粉群集が認められ、前述した土坑の周辺と同様な草本植生が想定される。ただし、層位的な変化を見ると、上位層でイネ科とカヤツリグサ科の割合が高くなり、ヨモギ属の割合が低くなる。上位層でガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属、デンジソウ属、サンショウモなどが検出されること、植物珪酸体分析で栽培種のイネ属が産出することなどを踏まえると、多産するイネ科は周辺で稲作が行われ、随伴する水湿地植物は水田雑草に由来する可能性もある。また黒色土層よりも上位層で前述の種類が増加することから、周辺で稲作地が拡大した可能性も想定される。このような傾向は、これまで岡山平野で行われている弥生時代を中心とする水田の容態に関する自然科学分析調査の成果と類似する。

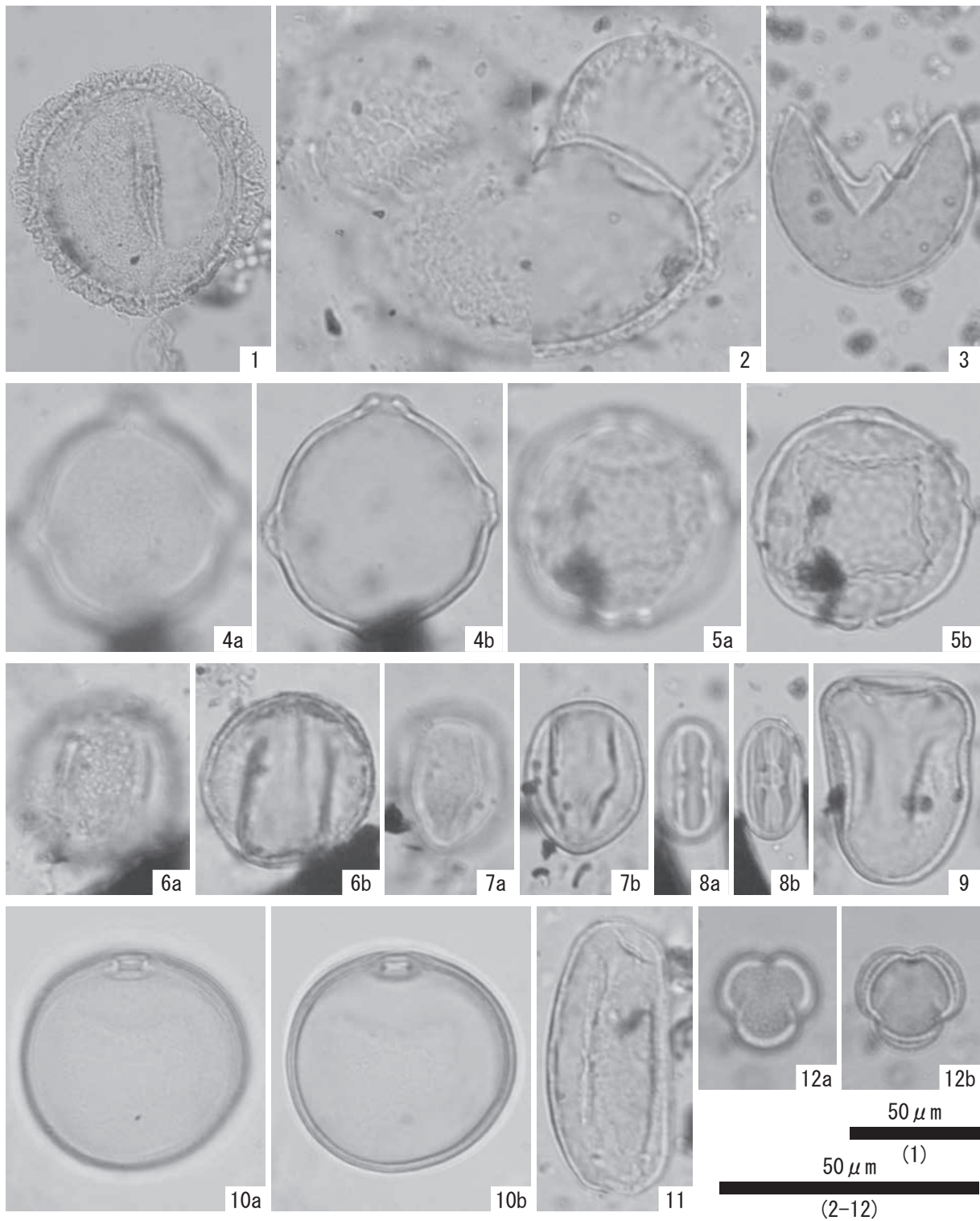
引用文献

- 藤木利之・小澤智生, 2007, 琉球列島産植物花粉図鑑. アクアコーラル企画, 155p.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所. 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 近藤鍊三, 2010, プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会, 824p.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標徴ⅠⅡ(図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.
- 那須孝悌, 1989, 活動の舞台: 概論. 永井昌文・那須孝悌・金 関恕・佐原 真(編著), 弥生文化の研究1 弥生人とその環境, 雄山閣出版, 119-130.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- 島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. アカガシ亜属(W1) a: 木口 b: 柾目 c: 板目スケールは100 μm
2. 広葉樹の若年枝(W2) a: 木口 b: 柾目 c: 板目スケールは100 μm
3. イネ属機動細胞珪酸体(黒色土; C5)
4. タケ亜科機動細胞珪酸体(土坑6 埋土サンプル; C1)
5. ヨシ属機動細胞珪酸体(土坑46 北東最下層埋土; C2)

第52図 木材・植物珪酸体



- | | |
|------------------------------|--------------------------------|
| 1. ツガ属(黒色土の上の層;C6) | 2. マツ属(土坑6 埋土サンプル;C1) |
| 3. スギ属(土坑47 下層土器内埋土;C4) | 4. クマシデ属—アサダ属(土坑46 北東最下層埋土;C2) |
| 5. ニレ属—ケヤキ属(黒色土の上の層;C6) | 6. コナラ属コナラ亜属(土坑6 埋土サンプル;C1) |
| 7. コナラ属アカガシ亜属(土坑6 埋土サンプル;C1) | 8. シイ属(土坑46 北東最下層埋土;C2) |
| 9. カヤツリグサ科(黒色土の上の層;C6) | 10. イネ科(黒色土の上の層;C6) |
| 11. ミズアオイ属(土坑6 埋土サンプル;C1) | 12. ヨモギ属(土坑47 下層土器内埋土;C4) |

第53図 花粉化石

第2節 動物遺存体同定結果

岡山理科大学 生物地球学部 富岡 直人

表6 動物遺存体属性表(脊椎動物門)

整理 No.	旧調 査区	遺構名	大分類	小分類	部位名	LRM	部分	色調	備考
4	1区	土坑 50	硬骨魚綱	サワラ	尾椎	M	椎体	茶褐色	包丁による切創あり
17	1区	土坑 50	硬骨魚綱	マゴチ	擬鎖骨	L	完形	茶褐色	
41	1区	土坑 50	硬骨魚綱	クロダイ属	主上顎骨	R	完形	茶褐色	
20	1区	土坑 51	鳥綱	サギ科	胸骨	M	完形一部欠損	茶褐色	
22	1区	土坑 51	硬骨魚綱	マゴチ	擬鎖骨	L	完形	茶褐色	
23	1区	土坑 51	硬骨魚綱	マゴチ	骨盤骨	L	骨幹部	茶褐色	
24	1区	土坑 51	硬骨魚綱	目不明	不明	?	骨幹部	茶褐色	
25	1区	土坑 51	硬骨魚綱	マゴチ	前鰓蓋骨	R	完形	茶褐色	
26	1区	土坑 51	鳥綱	目不明	上腕骨	L	近位端 + 骨幹部	茶褐色	破損：sp?
27	1区	土坑 51	硬骨魚綱	マゴチ	尾椎	M	椎体	茶褐色	
28	1区	土坑 51	硬骨魚綱	クロダイ属	歯骨	L	完形	茶褐色	
29	1区	土坑 51	硬骨魚綱	マゴチ	眼窩骨	L	完形	茶褐色	
30	1区	土坑 51	硬骨魚綱	マダイ	角骨	R	完形	茶褐色	
31	1区	土坑 51	硬骨魚綱	ハタ科	主上顎骨	R	完形	茶褐色	
32	1区	土坑 51	硬骨魚綱	目不明	背鰭 or 臀鰭棘	M	完形	茶褐色	
33	1区	土坑 51	硬骨魚綱	目不明	不明	?	骨幹部 + 棘	茶褐色	
34	1区	土坑 51	硬骨魚綱	目不明	不明	?	骨幹部	茶褐色	
35	1区	土坑 51	硬骨魚綱	目不明	不明	?	骨端部	茶褐色	
36	1区	土坑 51	硬骨魚綱	目不明	不明	?	骨幹部	茶褐色	
37	1区	土坑 51	硬骨魚綱	目不明	前鰓蓋骨	L	骨幹部	茶褐色	
38	1区	土坑 51	硬骨魚綱	目不明	不明	?	骨幹部	茶褐色	破損：切創
39	1区	土坑 51	硬骨魚綱	目不明	不明	?	骨幹部	茶褐色	
40	1区	土坑 51	硬骨魚綱	目不明	不明	?	骨幹部	茶褐色	
6	1区	土坑 52	硬骨魚綱	カサゴ科	前鰓蓋骨	L	完形一部欠損	茶褐色	カサゴに似る
42	2区	土坑 57	鳥綱	目不明	上腕骨	R	近位端 + 骨幹部	茶褐色	破損：sp
43	2区	土坑 57	哺乳綱	イノシシ類	上腕骨	L	骨幹部 + 遠位端	茶褐色	破損：イヌ咬痕
43	2区	土坑 57	硬骨魚綱	目不明	不明	?	骨幹部 + 骨端部	茶褐色	
44	2区	土坑 57	硬骨魚綱	マゴチ	骨盤骨	R	骨幹部 + 骨端部	茶褐色	
45	2区	土坑 57	硬骨魚綱	目不明	不明	?	棘	茶褐色	
46	2区	土坑 57	硬骨魚綱	目不明	部位不明	?	骨幹部 + 棘	茶褐色	
47	2区	土坑 57	硬骨魚綱	タイ科	腹椎	M	椎体	茶褐色	

整理 No.	旧調 査区	遺構名	大分類	小分類	部位名	LRM	部分	色調	備考
7	1区	溝 2	哺乳綱	イエネコ	頭蓋			茶褐色	
8	1区	溝 2	哺乳綱	イエネコ	頭蓋	R	前頭骨	茶褐色	接合
9	1区	溝 2	哺乳綱	イエネコ	頭蓋	L	頭頂骨	茶褐色	接合
10	1区	溝 2	哺乳綱	イエネコ	頭蓋	M	後頭骨	茶褐色	接合
11	1区	溝 2	哺乳綱	イエネコ	底蝶形骨	M	完形	茶褐色	接合
12	1区	溝 2	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	茶褐色	
13	1区	溝 2	哺乳綱	イエネコ	頭蓋	L	前頭骨	茶褐色	接合
14	1区	溝 2	哺乳綱	イエネコ	底蝶形骨	M	完形	茶褐色	接合
15	1区	溝 2	哺乳綱	イエネコ	頭蓋	R	頭頂骨	茶褐色	接合
18	1区	溝 3	哺乳綱	目不明	不明	?	骨端部	茶褐色	
19	1区	溝 3	哺乳綱	食肉目	上腕骨	L	骨幹部遠位寄	茶褐色	
1	1区	包含層	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	茶褐色	
2	1区	包含層	哺乳綱?	目不明	不明	?	遠位端	茶褐色	
3	1区	包含層	哺乳綱	目不明	不明	?	骨幹部	茶褐色	
16	1区	包含層	哺乳綱	ウシ or ウマ	臼歯	?	歯冠部破片	茶褐色	鉄が付着?

表 7 動物遺存体属性表(軟体動物門)

			腹足綱							斧足綱					二枚貝綱	
			吸腔目		古腹足目	原始腹足目	カサガイ目	原始紐舌目		カキ目	フネガイ目		ハマグリ目			
整理 No.	旧調査区	遺構名	ア ク キ ガ イ 科	カ ワ ニ ナ 科	リ ュ ウ テ ン サ ザ エ 科	ミ ミ ガ イ 科	ツ タ ノ ハ ガ イ 科	タ ニ シ 科	イ タ ボ ガ キ 科	フ ネ ガ イ 科	イ 科	マル ス ダ レ ガ イ 科	マ シ ジ ミ	属不明		
			ア カ ニ シ	カ ワ ニ ナ	サ ザ エ	属不明	サ ガ イ	シ オ オ タ ニ	種不明	属不明	ハ イ ガ イ	ガ イ	サル ボ ウ	ア サ リ	ハ マ グ リ	マ シ ジ ミ
9	1区	土坑 50	○									○			○	
11	1区	土坑 50			○						○	○			○	
12	1区	土坑 50	○													
16	1区	土坑 50	○		○										○	
10	1区	土坑 51					○					○			○	
15	1区	土坑 51								○					○	
4	1区	土坑 52			○										○	
5	1区	土坑 52	○		○											
21	2区	土坑 54	○		○										○	
23	2区	土坑 54	○												○	
20	2区	土坑 55							○?							

第4章 自然科学的分析

			腹足綱							斧足綱						二枚貝綱	
			吸腔目		古腹足目	原始腹足目	カサガイ目	原始紐舌目		カキ目	フネガイ目		ハマグリ目				
整理 No.	旧調査区	遺構名	アカキガイ科	カワニナ科	リュウテンサザエ科	ミミガイ科	ツタノハガイ科	タニシ科		イタボガキ科	フネガイ科		イ科	マルスダレガイ科	シジミガイ科		
			アカニシ	カワニナ	サザエ	属不明	サガイ	シ	オオタニ	種不明	属不明	ハイガイ	サルボウガイ	アサリ	ハマグリ	マシジミ	属不明
17	2区	土坑 56	○														
19	2区	土坑 57	○	○				○	○						○		
24	2区	土坑 59	○														
27	2区	土坑 59	○														
25	2区	土坑 60	○														
25	2区	土坑 60	○														
28	2区	土坑 60	○														
29	2区	土坑 60	○														
31	2区	土坑 60			○												
32	2区	土坑 60	○														
8	1区	溝 2			○												
1	1区	包含層									○						
2	1区	包含層	○														
7	1区	包含層	○											○		○	
7	1区	包含層									○						
13	1区	包含層														○	
33	2区	包含層				○										○	

第5章 総括

第1節 弥生時代

1 南方遺跡の変遷と調査区周辺の環境

南方遺跡は、岡山県で弥生時代中期を代表する集落遺跡である。広義の南方遺跡は、現在の岡山市北区国体町及び南方1・2・3丁目に位置し、その範囲は東西1.2km、南北約1kmの北東－南西に長軸を置いた紡錘形をしている。集落の存続時期は前期後葉（弥・前・Ⅲ期、以降弥・は省略）～中期中葉（中・Ⅱ期）で、中期後葉（中・Ⅲ期）以後は遺構が見られなくなるとされる⁽¹⁾。

中期の南方遺跡の中心部分は、西川の旧流路を挟んで存在する北・南・東の集落域で、それぞれが居住域と墓域を持つと考えられている⁽²⁾。東集落域の南縁に位置する南方（後楽館）遺跡の体育館調査区では、用水路と考えられる溝が複数みられることから水田域、あるいは水田域に近接していた可能性が想定され⁽³⁾、中期集落域の南限を示す。また平成16年調査の岡山地方裁判所調査区では、北東端に中・Ⅱ期の遺構が検出されており（P60 第Ⅱ調査区土坑16・17など）⁽⁴⁾、北側にある別の微高地⁽⁵⁾に関連している可能性がある。今回の法務局調査区では東側の窪地2から中期土器片が少数出土したので、法務総合庁舎調査区⁽⁶⁾から続く中期の低位部と判断できる。

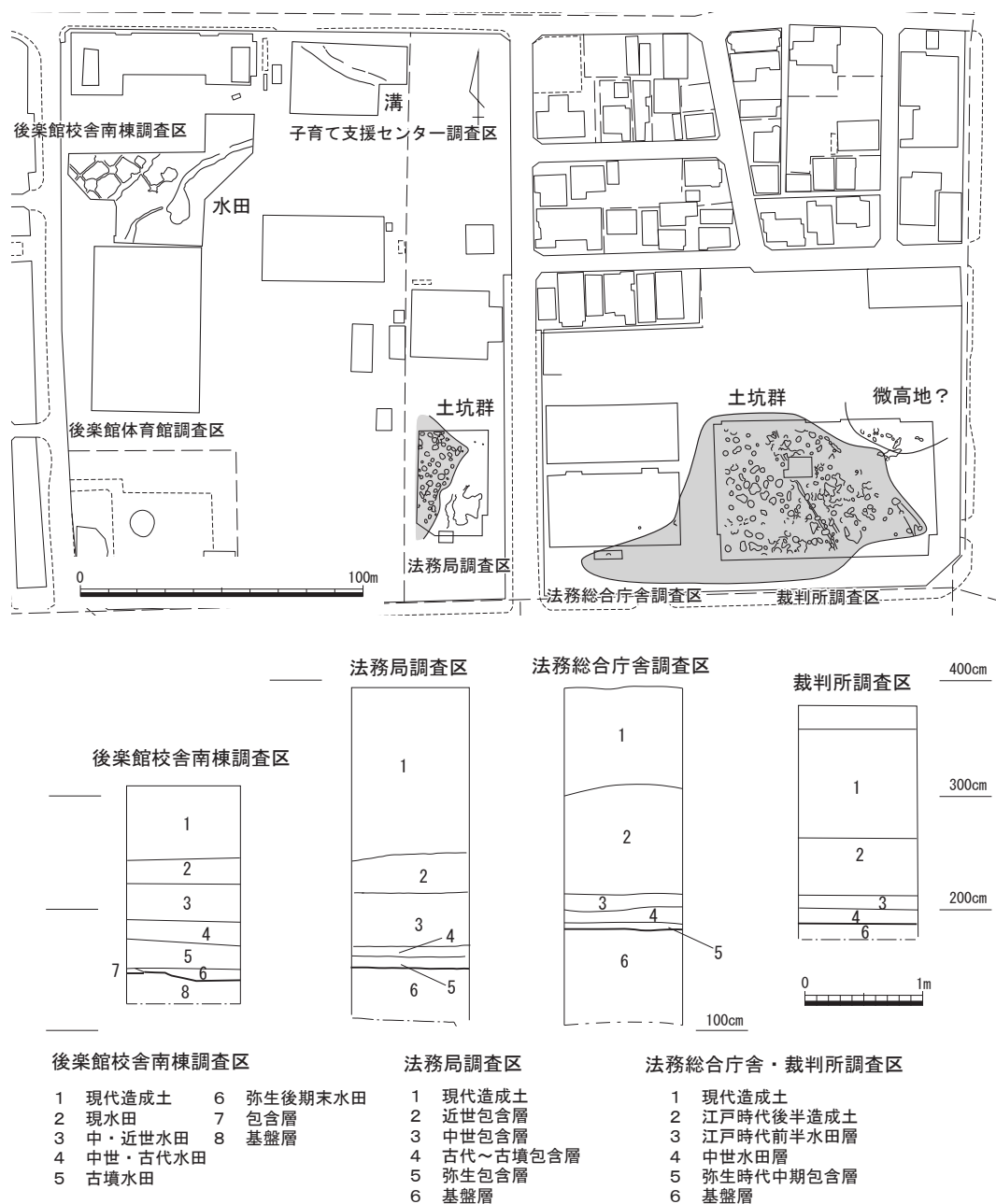
空白期間の後、後期後葉～末葉（後・Ⅲ～Ⅳ期）に該当する遺構が確認されている。南方（後楽館）遺跡校舎南棟調査区では畦畔を伴う水田が存在し、今回の法務局調査区西側、法務総合庁舎調査区の東・南端、裁判所調査区で土坑群が出現している。また、子育て支援センター調査区⁽⁷⁾では中期の溝を踏襲する形で後期中葉（後・Ⅱ期）の溝が検出された。これらの遺構は集落の縁辺の状況を表すが、その中心の位置は現在のところわかっていない。

続いて、周辺の調査から後楽館校舎南棟調査区、後楽館体育館調査区、法務局調査区、法務総合庁舎調査区、裁判所調査区の層位を比較する（第54図参照）。まず校舎南棟調査区では、後・Ⅲ～Ⅳ期の水田層とそれを覆う洪水砂層が確認されているが、ここから東・南には存在しない。基盤層の標高は後楽館校舎南棟調査区が155cm、同体育館調査区が北150cm～南120cm（遺構検出面から想定）、法務局調査区で南西160～北東180cm、法務総合庁舎調査区が西150～東180cm、裁判所調査区が中央部180～北東190cm（遺構検出面から想定）で確認でき、校舎南棟調査区から体育館調査区へ下がり、体育館調査区から裁判所調査区へは徐々に高まっている。後楽館校舎南棟調査区北に位置する県総合福祉・ボランティア・NPO会館調査⁽⁸⁾での中期微高地の基盤層が標高240～200cmになるので、いずれの地点でもそこよりは低いことがわかる。体育館調査区では標高120cmのかかなり低い地点まで中期の遺構が検出されており、今後の周辺での調査において、たとえ低位部とみられる地点でも遺構の残存については留意すべきであろう。

調査地の東の法務総合庁舎調査区における花粉分析・植物珪酸体分析によると⁽⁶⁾、中期以前の層ではアカガシ・コナラを主体にシダ類が繁茂する森であったが、中期包含層の堆積時では二次林の代表

的樹種であるマツなどが増加し、草地というより開けた場所であった。周辺の森林は伐採され、開拓の手が入ったことを示す。中期の南方遺跡の拡大を表しているのであろう。

今回の調査でも土坑・土器内埋土と基盤層、東壁の土壌について花粉・植物珪酸体分析を依頼した。花粉分析で、土坑・土器内埋土と基盤層、黒色土では草本花粉は開けた明るい場所と湿地に多い種類が見られる。これに対し東壁の黒色土上層でイネ科（イネ属かは不明）の花粉が多く検出している。いずれも木本花粉は同じものが産出されていて森林植生では明確な差異が見られない。植物珪酸体では、土坑46の底面の基盤層（粘土サンプル）が同土坑埋土や他のサンプルに対し植物珪酸体含有量が著しく少ない。原因は不明だが、地表へ露出していた時期が少ないからかもしれない。



第54図 弥生時代後期の調査区周辺と土層柱状図 (1/2, 500・1/60)

2 土坑群について

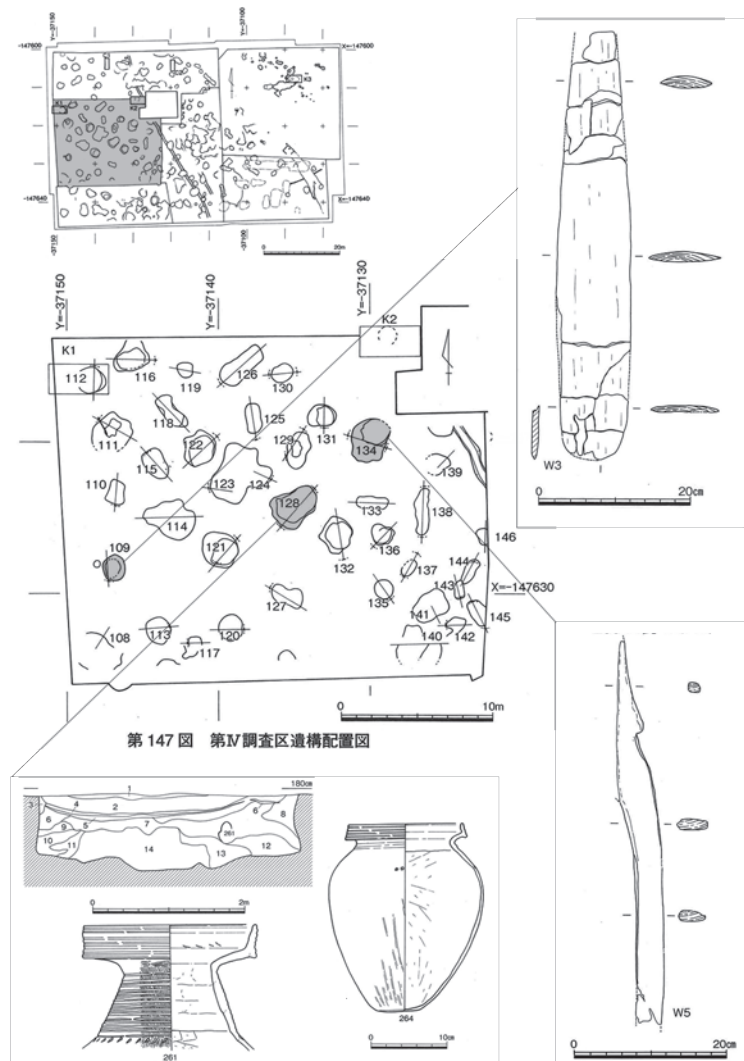
調査区の西側半分で確認された後・Ⅲ～Ⅳ期の土坑のうち土坑 10・14・47 を除く 46 基は、東側の裁判所調査区で検出された袋状土坑と呼ばれた土坑と類似することが判明した。今回の調査と裁判所調査区の土坑の検討を行い、周辺の類例と照らし合わせてみたい。

まず、今回調査の土坑の特徴を挙げる。平面形は円形・楕円形で、土坑 8・9 のように複雑な形状を取るものは少数である。ただし、外形が波打ったように出入りがあるため正確な円形・楕円形を示さないものが多い。断面はこの不均整な様子をそのまま示し、全体が箱形・逆台形を示すものでも側面・底面には細かい凹凸がある。底面付近を外側へ掘り込む土坑は 29 基あったが、掘り込みは全周を巡らず部分的であった。土坑の位置は、低位部 1 の範囲周辺に限られる。隣り合う土坑同士の距離は、最小 5 cm から最大 233 cm を測った。主に 30 ～ 50 cm ・ 70 ～ 140 cm の間に分布があり、110 ～ 140 cm を測るものが全体の約 3 割を占め最も多い。土坑は単独で存在し切り合うことはなかったが、土坑 3・4、12・13 のように近接するものもあった。

土坑埋土を子細に観察すると、シルト質と 5 ～ 20 cm 単位の粗砂ブロックから構成されている。水性堆積に起因するラミナ状の堆積は認められない。グライ化による色調の違いは層位の差とすべきではなく、それを除外すると分層が困難であった（写真図版 2・3 を参照）。

土坑側面の基盤層は 3 ～ 4 層に分層が可能である。検出面から標高約 120 cm までは比較的均質なシルト～微砂層の堆積で、そこから下は粗砂が混ざる量が徐々に増え、掘削最深部ではシルト質と粗砂が斑状に混ざる状態であった。

底面標高についても計測を行った（一覧は遺構一覧・新旧対照表を参照）。最も深い土坑 13 で標高 63 cm、浅い土坑 43 が 96 cm で、ほとんどが 76 ～ 94 cm の間に収まる。隣り合う土坑同士での比較では、最大 16 cm の差がある（土坑 34 が 94 cm、土坑 35 で 78 cm）。底面標高は基盤層の粗砂が混ざる層の範囲内に収まり、土坑群は全体としてほぼ同じ層位まで



第 55 図 南方遺跡（裁判所調査区）の袋状土坑（調査区位置 1/2000・配置図 1/500・土坑 1/100・遺物 1/10）

で掘り下げが終了したとみてよい。

土坑形状が不整形であることは、土坑群が形にこだわることなく掘削されたことを意味している。このような底面付近を外に掘り込んだ土坑は、長期間そのままの形状を保つのが難しい。実際に今回調査の土坑を開口したまま放置すると、1週間程度でも壁面がひび割れ、さらに雨天が重なると壁面が容易に崩落した。掘り方の不安定な形状とシルト質が強い地盤であることに起因するものであろう。埋土が分層困難なことも加味すると、土坑は短期間に埋没した、あるいは埋め戻されたと考えられる。

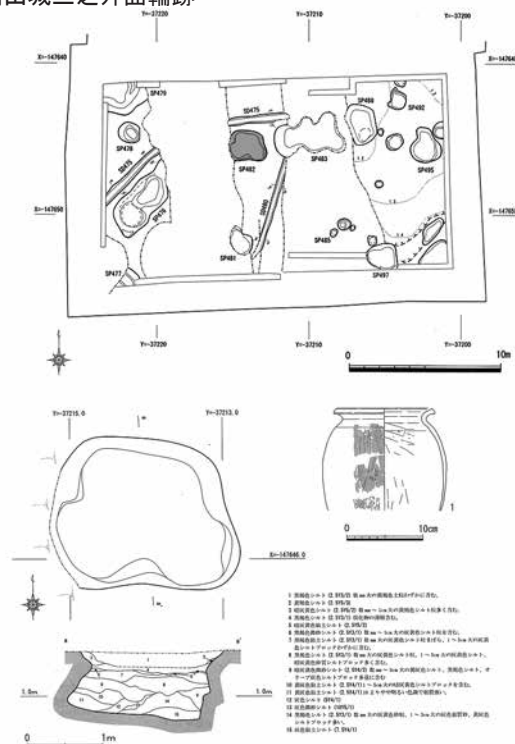
出土遺物は、木製品として土坑9からほぼ完形の一木造りの平鋤W1が、埋土中に水平に位置して出土していて意図的な廃棄が想定できる。土器は、図化したもので甕6個体(外面煤付着4)、壺1個体、他2個体と甕が多く、図化不可能な破片も甕胴部片が多かった。出土位置は埋土中で底面から浮いた状態のものが多く、一部で土坑底面に突き刺さった破片も存在した。

裁判所調査区の土坑は、断面形態が巾着袋状を示すことから袋状土坑(報告書では坑を「墳」と記載するが、現状の「坑」と呼びかえる)と呼称されているが、断面形状は袋状でないものもある。報告されたのは176基であるが、重複が40%超に認められ総数として233基と判断されている。木製品は7基から合計10点出土し、掘り棒、鋤・鍬先など掘削具が多い。出土状況は「埋め戻し前か埋め戻し途中に廃棄もしくは何らかの意図を持って置かれた⁽⁹⁾」とされている。土器は176基中116基からの出土で、甕286個体(外面煤付着45)、壺34個体、鉢1個体で、圧倒的に甕が多い。出土位置は、写真に記録されているものについては埋土中で、底面に設置された様子は見られない。

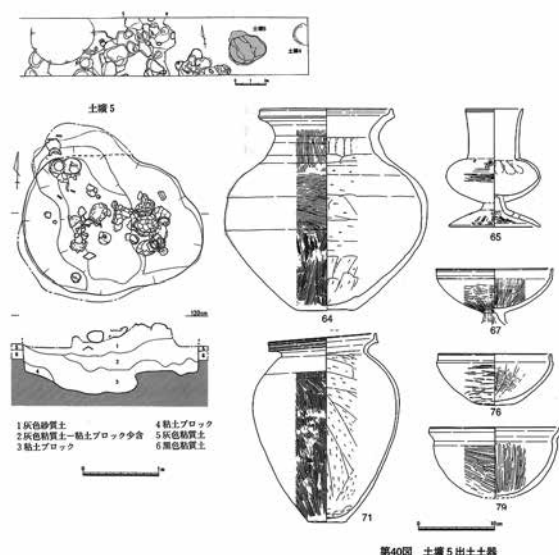
木器からは掘削に関する道具が多いことと、意図的な廃棄の可能性を指摘できる。また土器からは、当地での甕を使った調理、あるいは調理された食料の搬入が考えられる。

土坑の配置・形状から近接した多数の土坑の掘削、不整形で荒く底部を外に広げる掘り方、短期間

岡山城三之外曲輪跡



天瀬遺跡



第56図 岡山城三之外曲輪跡・天瀬遺跡の粘土採掘土坑(配置図1/500・土坑1/100・土器1/10)

の埋め戻しの3つの要素を抽出できた。出土遺物からは、掘削具に偏りなおかつ配置された木器、土器の多数を占める甕から、食料供給しながらの掘削作業を考えた。これらの要素から導き出せる土坑掘削の目的はいくつか想定できるが、土壌採取が最も状況に合うものと思われる。基盤層の下層部分はシルト質と粗砂からなり、粘土に混和剤としての砂粒を含む状態であるため、このまま土器として焼成可能であろう。ただ、この土壌を土器焼成に用いたとする直接の根拠を示すことは難しく、用途については今後の課題としたい。

近隣の遺跡で、岡山城三之外曲輪跡⁽¹⁰⁾と天瀬遺跡⁽¹¹⁾で類似の土坑群が調査されている。

岡山城三之外曲輪跡では、第2次調査（体育館・特別教室棟調査区）弥生・古墳時代遺構面で、弥生時代後期前半（後・Ⅱ期）の土坑16基以上が確認された。それらは「形態や埋土の特徴、底面のレベルなどで共通しており、同じ性格の土坑群」で、「底面のレベルである標高0.7 m付近の微高地基盤層が粘土質の部分から砂質の強い部分に変わる境界付近に当たっていることから、これらの土坑は粘土採掘坑と考えられる」としている。時期は異なるが、今回調査の土坑群と形状・配置が似る。土器は、図化・文中にあったもので甕6個体、壺5個体で、直口壺で煤の付着したものがあつた。出土土器も今回調査と同様の傾向にある。

また、天瀬遺跡の平成10(1998)年度の調査では、弥生時代後期後半～後期末（弥・後・Ⅲ～Ⅳ期）にあたる1区粘土採掘坑群とした土坑群がある。粘土採掘坑群は、「白色粘質土層近くから袋状を呈し、その下層まで掘り込むものがほとんどないこと、そして人為的に埋め戻していることから白色粘質土の採取を目的とした粘土採掘坑と判断した」。「平面的なあり方が溝状に列をなしたり、群としてまとまっている状況が認められる。また、掘り方に方形と円形の二種が認められることから、大きくは二時期に計画的に掘削されたと推察される」と結論している。平面は連結しているため個別の土坑を抽出するのは難しい。これとは別に土坑5が単独で存在し、形状は今回調査の土坑に似る。埋没中土器の廃棄が行われ、完形品に近い壺3個体、甕7個体、鉢5個体が図示されている。

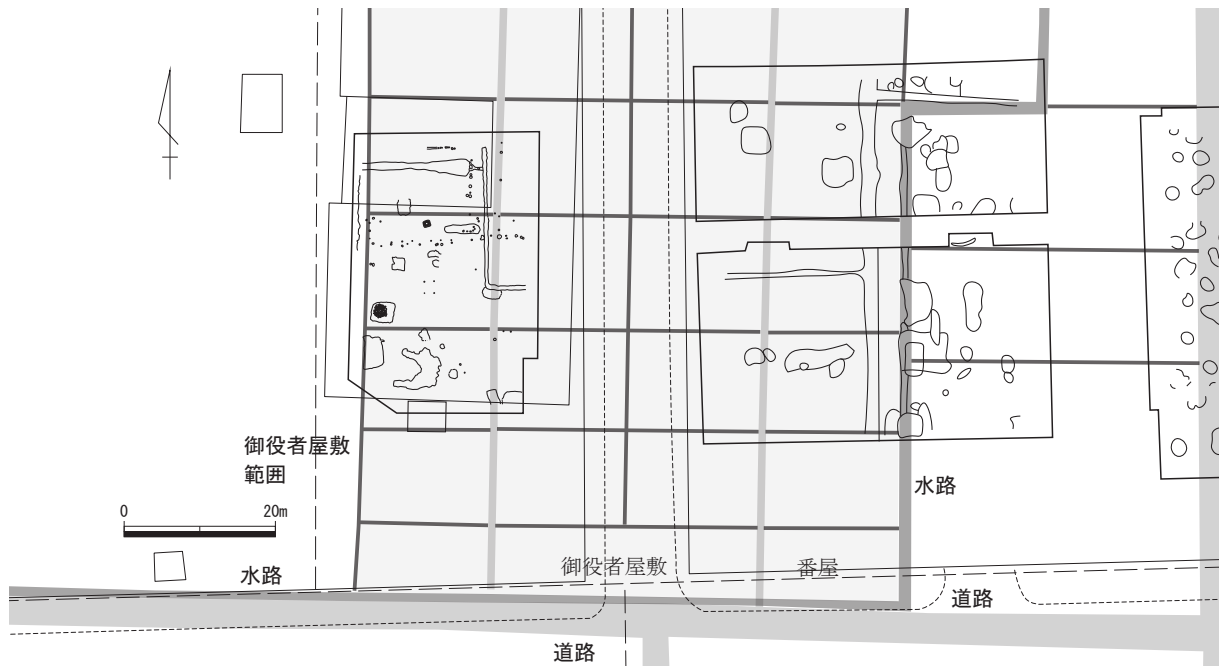
今回の調査地点は、後楽館体育館調査区で検出された基盤層より標高が高いにもかかわらず、中期の遺構は検出できなかった。北東端については基盤層の標高も高く、中世に削平があつたがピットも検出したので、この部分で中期の遺構が存在した可能性が高い。後期においても集落の縁辺であるが、調査区西側で土坑群が検出され、その分布がさらに西へ広がることが分かったことは大きい。近隣に今回の土坑群に似る粘土採掘土坑とされる土坑が見られ、時期は後・Ⅱ～Ⅳ期にあたり、形状は様々だが埋没状況は類似することが確認できた。後期の南方遺跡についてはこれまでも断片的な情報しか得られていないが、今後の調査に期待したい。

第2節 江戸時代以降

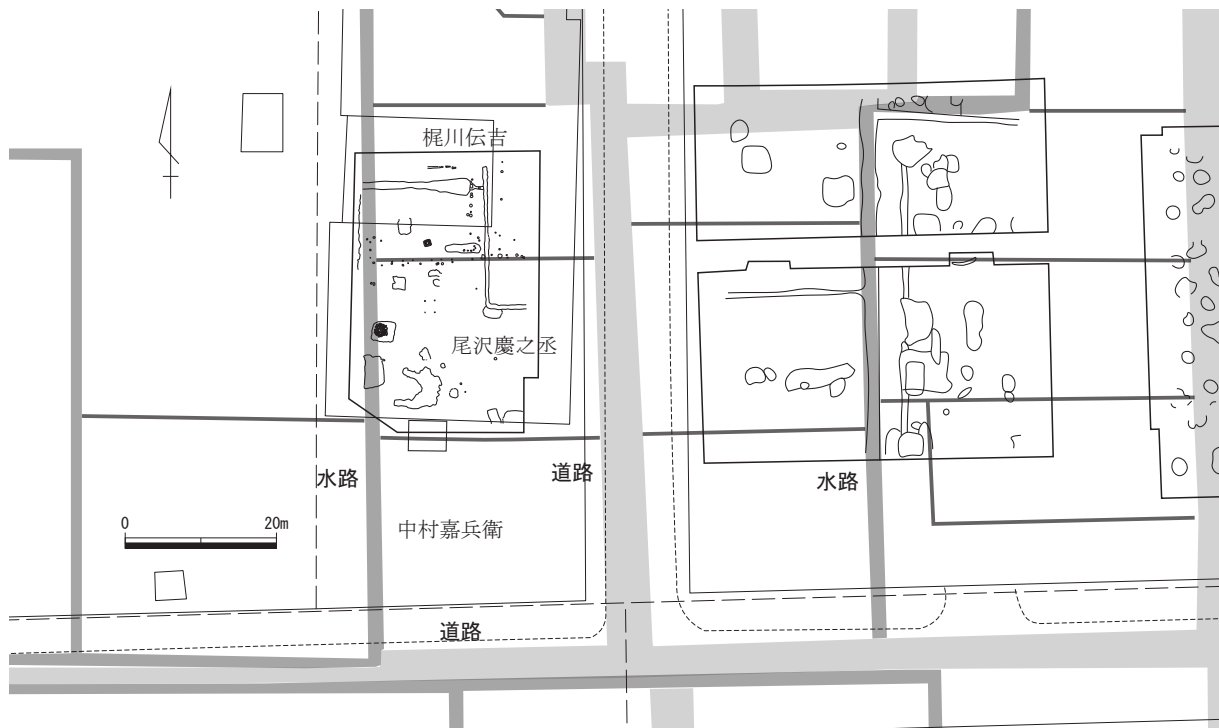
今回の調査地は旧八番町にあたる。八番町を含む一番町からの侍屋敷は番町と総称され、慶長年間(1596～1615)、池田光政の治世に最初に置かれたと推測される。その後徐々に西へ向かって新しい町が作られ、元禄年間(1688～1704)には七番町の西に八番町が成立した。元禄年間二代藩主池田綱政は江戸で能役者を召し抱え、八番町北の役者屋敷に住ませた。しかし三代継政が藩主となるとすぐに暇を出したようで⁽¹²⁾、役者屋敷は廃止されたのであろう。この役者屋敷は宝永5(1708)年頃の岡山城下絵図『岡山伊勢宮絵図』にある御役者屋敷に該当する。『岡山伊勢宮絵図』の約150年後、

文久元(1861)年に『備前岡山地理家宅一枚図』が描かれる。

法務総合庁舎の調査では17世紀後半～18世紀前半の遺構が存在し、絵図と照合が容易であった。今回の調査区は『岡山伊勢宮絵図』と重ね合わせると「御役者屋敷」範囲内に位置している。溝3が御役者屋敷内の通路と一部重なるが、溝2は区画とは関係ないよう見え、両溝ともこの絵図以降の土地利用による遺構と考えられる。『備前岡山地理家宅一枚図』と重ねてみたところ、絵図の溝は溝



第 57 図 『岡山伊勢宮絵図』と遺構配置図 (1/1,000) 岡山大学附属図書館蔵の絵図をトレース・加筆



第 58 図 『備前岡山地理家宅一枚図』と遺構配置図 (1/1,000) 岡山大学附属図書館蔵の絵図をトレース・加筆

1 から約 2 m 東に位置するが、おそらく同一とみてよい。柱穴列 1 は南北の屋敷の境に位置することがわかり、この 2 遺構が絵図と合致するものと思われる。この想定だと井戸 1・2 が南北の屋敷地に分かれて位置することになり、妥当な配置とみてよいだろう。

土坑 50～52、54・59・60 は洪水で埋没した堆積状況を呈していた。旭川の洪水についてだが、19 世紀代では享和元(1801)年と嘉永 5(1852)年に旭川で常水から十八尺余の増水があり、後者は『承応 3 年以来の大洪水』として城下の被害が詳細に記録されている。それによると、外郭でも難波町・滝本町(調査区の南側に位置する町)で床下あるいは床上 4～5 寸(12～15cm)の浸水を受けている。それ以前は元禄 15(1702)年まで大洪水の記録はない⁽¹³⁾ことから、これらの土坑は嘉永 5 年の洪水での埋没の可能性が高い。出土遺物からも 19 世紀代の埋没が妥当と考えられ、矛盾はない。

井戸 1・2、土坑 57 は近代に埋没したと考えられる遺構である。調査区の明治以降の土地利用について古地図を調べてみると、明治 39(1906)年の市街図⁽¹⁴⁾には八番町の記載があるが、『備前岡山地理家宅一枚図』とは道路の形が変わっている。大正 11(1922)年の地図⁽¹⁵⁾には法務局と法務総合庁舎の間の現在と同じ道が確認できる。東にだいぶ離れて弘西小学校(改称明治 10 年)が確認できる。昭和 8(1933)年の市街図⁽¹⁶⁾では、現在の後楽館中高校の位置に南方小学校があり、その南東は八番町として宅地化している。出土遺物ではコンパス M2、石版 S9 といった学校を示唆するものがあるので、井戸 1・2、土坑 57 は大正 12(1923)年に南方小学校が設立されて以降の埋没が想定できよう。S6 に彫られた『K』『小』が弘西小学校と関連する可能性はあるが、あくまで推測の域を出ない。造成土・遺構から岡山空襲(1945 年)由来の焼土は確認できなかったので、下限をその前に置きたい。なお、S9 の『廣坂通り』を地名とするならば、現在の石川県金沢市広坂 1・2 丁目を表している可能性が高い。明治 4(1871)年に『広坂通』として町名が定められ、第 2 次大戦後まで使用されていた。岡山県内には正式な地名としては存在しない名称である。

近世遺構から出土した獣・魚骨、貝類について、岡山理科大学の富岡直人氏に同定を依頼した(結果一覧は第 4 章第 2 節)。魚類では土坑 50 でサワラが出土しているのが珍しい。他にマゴチ、クロダイ属などがあり、これらは食物残滓であろう。獣類は食用でイノシシ類が、愛玩用で溝 2 の東側からイエネコが出土している。貝類はアカニシ・サザエ・アサリ・シジミと食物残滓が多いが、土坑 57 のみでタニシ・カワニナが見られた。両方とも食用でもあるが淡水生のため、遺構内で生息していた可能性もある。

註

- (1)『南方遺跡』岡山済生会総合病院新病院建設に伴う発掘調査 第 1 分冊 岡山市教育委員会 2016
- (2)安川 満「南方弥生集落の構造と変遷」『南方遺跡』岡山済生会総合病院新病院建設に伴う発掘調査 第 3 分冊 岡山市教育委員会 2018
- (3)『南方(後楽館)遺跡』岡山市教育委員会 2012
- (4)「南方遺跡」広島高裁・岡山地家簡裁庁舎建て替えに伴う発掘調査『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』200 岡山県教育委員会 2006
- (5)「南方(岡山牛乳遺跡)」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1995(平成 7)年度』岡山市教育委員会 1997 裁判所調査区へ向けて広がる可能性がある中期の微高地が検出されている。
- (6)「南方遺跡」岡山法務総合庁舎新営に伴う発掘調査『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』234 岡山県教育委員会 2012
- (7)「南方遺跡(支援センター)」『岡山市埋蔵文化財センター年報 9』岡山市教育委員会 2010

第5章 総括

- (8) 「南方遺跡」岡山県総合福祉・ボランティア・NPO 会館等整備事業に伴う発掘調査『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』196 岡山県教育委員会 2006
- (9) 小松原基弘「第3節 袋状土壙出土の木器について」註4文献
- (10) 『岡山城三之外曲輪跡・旧岡山藩藩学跡』岡山市教育委員会 2008
- (11) 「天瀬遺跡・岡山城外堀跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』154 岡山県教育委員会 2001
- (12) 岡山市地名研究会『岡山市の地名』1989
- (13) 『百間川の歴史』岡山河川工事事務所 1978
- (14) 『最新岡山市街地図』地理研究会 1906
- (15) 『実測岡山市及郊外明細地図』大森隆文堂 1922
- (16) 『岡山市全図』岡山市役所 1933

遺構一覧・新旧対照表

井戸

掲載 番号	旧調 査区	調査時 番号	掘り方 平面形	掘り方 (cm)				井戸側内法 (cm)				時期	特記事項
				長軸	短軸	深さ	底面標高	長軸	短軸	深さ	底面標高		
井戸 1	1	6	方	93	85	48	144	48	43	32	160	近代～昭和時代	
井戸 2	2	6	方	301	272	110	71	64	56	94	78	近世～昭和時代	

土坑

掲載番号	旧調 査区	調査時 番号	平面形	断面形	規模 (cm)			底面標高 (cm)	時期	特記事項
					長軸	短軸	深さ			
土坑 1	1	24	不整楕円	長方	(106)	147	84	74	弥生時代後期	土器 1 点出土
土坑 2	1	23	楕円	長方	196	141	72	76	弥生時代後期	
土坑 3	1	33	不整楕円	袋状	(226)	(130)	70	94	弥生時代後期	土器 2 点出土
土坑 4	1	38	不整楕円	逆台	(77)	114	61	90	弥生時代後期	土器 1 点出土
土坑 5	1	22	不整楕円	逆台	(200)	(140)	32	94	弥生時代後期	土器 1 点出土
土坑 6	1	39	不整楕円	逆台	(132)	96	52	87	弥生時代後期	
土坑 7	1	31	楕円	長方	176	160	69	77	弥生時代後期	土器 2 点出土
土坑 8	1	41	不整	長方	290	244	56	78	弥生時代後期	
土坑 9	1	42	不整	逆台	230	216	26	83	弥生時代後期	一木鋤出土
土坑 10	1	36	楕円	皿	104	79	20	143	弥生時代後期	通常の土坑
土坑 11	1	34	円	台	139	125	64	80	弥生時代後期	土器 7 点出土
土坑 12	1	35	楕円	長方	153	130	61	79	弥生時代後期	
土坑 13	1	29	楕円	逆台	167	96	72	63	弥生時代後期	
土坑 14	1	19	不整楕円	皿	193	105	19	131	弥生時代後期	通常の土坑、土器多い
土坑 15	1	30	楕円	逆台	248	143	66	76	弥生時代後期	土坑 14 より古、土器出土
土坑 16	1	17	楕円	鼓形	(165)	143	68	86	弥生時代後期	土器 1 点出土
土坑 17	1	40	楕円	逆台	212	(191)	63	76	弥生時代後期	土器出土
土坑 18	1	32	隅丸方	袋状	164	118	78	76	弥生時代後期	土器 2 点出土
土坑 19	1	20	円	長方	118	90	70	80	弥生時代後期	土器小片出土
土坑 20	1	18	円	長方	82	81	69	66	弥生時代後期	
土坑 21	1	16	楕円	袋状	127	101	65	90	弥生時代後期	
土坑 22	1	25	楕円	袋状	127	92	78	76	弥生時代後期	
土坑 23	1	26	楕円	鼓形	180	145	66	91	弥生時代後期	土器小片出土
土坑 24	1	28	円	逆台	136	103	65	89	弥生時代後期	土器出土
土坑 25	1	43	不整楕円	袋状	(104)	(42)	40	78	弥生時代後期	
土坑 26	1	44	不整円	袋状	(66)	(21)	38	83	弥生時代後期	
土坑 27	1	14	円	逆台	175	(173)	73	81	弥生時代後期	土器 1 点出土
土坑 28	1	13	円	逆台	124	120	66	90	弥生時代後期	木片出土
土坑 29	1	37	円	逆台	115	96	66	86	弥生時代後期	
土坑 30	1	12	円	袋状	74	71	65	91	弥生時代後期	
土坑 31	1	27	楕円	袋状	161	125	68	86	弥生時代後期	
土坑 32	1	10	不整円	長方	177	150	66	88	弥生時代後期	土器出土
土坑 33	1	21	楕円	鼓形	236	203	64	94	弥生時代後期	土器 1 点出土
土坑 34	1	9	楕円	鼓形	79	48	65	94	弥生時代後期	
土坑 35	1	8	楕円	U字	129	109	79	78	弥生時代後期	
土坑 36	2	23	円	袋状	150	116	49	79	弥生時代後期	
土坑 37	1	15	不整楕円	逆台	238	195	74	80	弥生時代後期	土器出土
土坑 38	2	15	円	袋状	150	131	81	80	弥生時代後期	
土坑 39	2	16	長方	逆凸	246	100	68	85	弥生時代後期	土器出土
土坑 40	2	20	楕円	長方	(144)	152	55	86	弥生時代後期	
土坑 41	2	19	楕円	袋状	137	102	47	84	弥生時代後期	
土坑 42	2	21	楕円	袋状	105	90	46	86	弥生時代後期	
土坑 43	2	18	隅丸方	袋状	(94)	92	64	96	弥生時代後期	土器出土
土坑 44	2	13	楕円	鼓形	115	96	74	86	弥生時代後期	土器出土
土坑 45	2	17	不整楕円	逆台	(168)	(126)	68	92	弥生時代後期	土器出土
土坑 46	2	22	隅丸長方	長方	215	120	68	93	弥生時代後期	土器 5 点出土
土坑 47	2	10	不整楕円	長方	(108)	(60)	37	90	弥生時代後期	土器、枝葉出土
土坑 48	2	12	楕円	鼓形	148	103	68	91	弥生時代後期	土器出土
土坑 49	2	14	不整楕円	袋状	(140)	87	65	94	弥生時代後期	土器出土
土坑 50	1	4	長方	逆台	(211)	179	67	135	19世紀代	洪水で埋没
土坑 51	1	3	楕円	皿	473	127	67	138	19世紀代	洪水で埋没
土坑 52	1	5	方	袋状	168	167	38	159	19世紀代	洪水で埋没
土坑 53	2	11	楕円	逆凸	252	169	66	95	18世紀代	
土坑 54	2	5	長方	皿	444	263	43	150	19世紀代	洪水で埋没

掲載番号	旧調査区	調査時 番号	平面形	断面形	規模 (cm)			底面標高 (cm)	時期	特記事項
					長軸	短軸	深さ			
土坑 55	2	2	不整楕円	皿	167	(123)	11	180	19世紀代	
土坑 56	2	1	楕円	U字	62	56	25	169	19世紀代	
土坑 57	2	3	不整	皿	560	520	20	180	昭和時代前半	
土坑 58	2	4	楕円	皿	115	110	12	180	18世紀代	
土坑 59	2	8	長方	逆台	(191)	130	51	170	19世紀代	洪水で埋没
土坑 60	2	9	長方	長方	(250)	(168)	68	158	19世紀代	洪水で埋没

溝

掲載 番号	旧調 査区	調査時 番号	流走 方向	規模 (cm)			断面形	底面標高 (cm)	時期	特記事項
				上面幅	下面幅	深さ				
溝1	1	11	北→南			110	逆台	(北)106 (南)134	江戸時代後半～昭和	調査区西壁が中央を切断
溝2	1	7	西→東	69 ～ 223	41 ～ 140	8 ～ 32	皿	(西)169 (東)160	江戸時代後半	溝3と接合
溝3	1・2	1・7	北→南→東	38 ～ 70	9 ～ 47	3 ～ 27	逆台	(北)199 (中央)177	江戸時代後半	南北方向から東に直角に折れる

遺物観察表

土器・陶磁器・炱器

掲載 番号	遺構名	実測 番号	種別	器種	計測値 (cm)			色調 (外面 / 文様 / 釉薬)	備考
					口径	底径	器高		
1	土坑 8	139	弥生土器	高杯			(3.3)	灰白 (5Y7/2)	中期後葉、混入
2	土坑 14	113	弥生土器	鉢	(15.5)		(7.7)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	土坑下層部・断面土手出土
3	土坑 14	114	弥生土器	台付鉢		3.8	(5.7)	灰白 (2.5Y8/1)	中央断面下層部出土
4	土坑 14	116	弥生土器	鉢	9.4		(6.1)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	
5	土坑 15	118	弥生土器	甕	(15.4)		(9.1)	黒 (2.5Y2/1)	
6	土坑 17	138	弥生土器	甕	14.6		(23.2)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	中層から離れて出土した破片が接合、口縁～底部外面煤付着
7	土坑 24	117	弥生土器	甕		5.4	(6.1)	黒 (N1.5/)	外面煤付着
8	土坑 37	115	弥生土器	甕?		6.9	(3.2)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	内外面摩滅
9	土坑 39	246	弥生土器	脚部			(3.2)	灰白 (10YR8/2)	内外面摩滅
10	土坑 47	232	弥生土器	長頸壺			(19.1)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	頸部沈線はらせん、外面靱痕あり
11	土坑 47	235	弥生土器	壺		8.4	(15.5)	灰黄褐 (10YR6/2)	外面煤付着
12	土坑 47	231	弥生土器	甕	15.2	5.6	24.8	黒褐 (10YR3/1)	外面煤付着
13	土坑 47	234	弥生土器	甕	(14.5)		(4.4)	橙 (7.5YR6/6)	
14	土坑 47	233	弥生土器	甕	14.6		(6.0)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	外面摩滅
15	土坑 48	236	弥生土器	甕	13.9	5.4	(25.0)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	外面煤・吹きこぼれ痕、内面底部炭化物粒付着
16	土坑 48	238	弥生土器	甕	15.0		(11.5)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	外面煤付着
17	土坑 48	237	弥生土器	台付長口壺			(9.1)	橙 (5YR7/6)	
18	土坑 49	240	弥生土器	甕		7.0	(2.5)	黒 (2.5Y2/1)	内外面摩滅
19	包含層	249	弥生土器	壺			(5.7)	灰白 (10YR8/2)	内面摩滅
20	包含層	140	弥生土器	台付鉢		8.0	(2.2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	内外面摩滅、穿孔 12カ所か
21	包含層	136	弥生土器	高杯			(1.3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	小片で復元難しい
22	包含層	128	弥生土器	甕	(13.1)		(4.6)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	内外面摩滅
23	包含層	130	弥生土器	甕	(15.8)		(5.5)	橙 (2.5YR6/8)	内外面摩滅
24	包含層	133	弥生土器	甕	(16.0)			にぶい黄橙 (10YR7/3)	内外面摩滅
25	包含層	131	弥生土器	甕			(2.7)	明黄褐 (2.5YR5/6)	内外面摩滅
26	包含層	243	弥生土器	甕			(1.9)	明黄褐 (5YR5/6)	外面煤付着
27	包含層	129	弥生土器	台付鉢			(5.5)	橙 (2.5YR6/6)	内外面摩滅
28	包含層	123	弥生土器	製塩土器		4.1	(2.4)	淡橙 (5YR8/4)	内外面摩滅
29	包含層	122	須恵器	杯蓋			(2.2)	灰 (N6/)	
30	包含層	137	須恵器	杯身	12.4	7.3	4.4	灰白 (2.5Y7/1)	北東～北中央の破片が接合
31	包含層	132	須恵器	杯身	(12.0)			灰白 (2.5Y8/1)	
32	包含層	250	須恵器	蓋			(2.7)	灰 (7.5Y6/1)	
33	包含層	7	青磁	皿				釉薬: 灰オリーブ (5Y6/2)	12世紀中頃～13世紀前半か
34	包含層	126	白磁	椀	(15.8)		(1.7)	釉薬: 明るい灰みの黄 (2.5Y7.5/2)	12世紀中頃～13世紀前半か
35	包含層	124	須恵器	碗		7.0	1.8	灰白 (2.5Y8/1)	
36	包含層	5	須恵器	捏鉢			(2.7)	灰 (N6/)	東播系
37	包含層	245	須恵器	捏鉢			(8.0)	灰 (N6/)	
38	包含層	9	瓦質	高台付椀		5.1	(1.0)	黄灰 (2.5Y5/1)	
39	包含層	247	土師器	高台付椀		6.8	(1.5)	淡黄 (2.5Y8/4)	
40	包含層	127	土師器	高台付椀		6.0	(2.0)	灰白 (10Y8/1)	

掲載 番号	遺構名	実測 番号	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面/文様/釉薬)	備考
					口径	底径	器高		
41	包含層	10	土師器	高台付椀		5.4	(1.6)	灰白(2.5Y8/1)	
42	包含層	125	土師器	高台付皿	(10.7)	4.6	2.7	灰白(2.5Y8/1)	
43	包含層	248	土師器	高台付椀		4.9	(1.4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
44	包含層	6	土師器	高台付椀		3.9	(1.1)	にぶい黄橙(10YR7/3)	
45	包含層	8	土師器	高台付椀		4.0		にぶい黄橙(10YR7/3)	
46	包含層	244	土師器	竈			(8.1)	にぶい褐(7.5YR5/3)	脚部破片のみ
47	井戸1	109	陶器	鉢		(22.2)	(3.8)	釉薬: 明るい灰みの赤みを帯びた黄(10YR8/2)	手水鉢か
48	井戸2	185	染付	蓋	9.4	3.1	2.4	文様: こい紫みの青(6PB3.5/11) うすい紫みの青(6PB7.5/5)	畳付「**園?製」富士山
49	土坑50	70	染付	紅猪口	4.7	1.5	2.4	文様: 赤(7.5R4/8)	赤絵
50	土坑50	73	陶器	紅猪口	5.5	2.6	2.8	文様: 鮮やかな黄みの赤(6.8R5.5/14)	赤絵 牡丹か
51	土坑50	81	陶器	椀	6.6	2.4	3.6	釉薬: 明るい灰みの赤みを帯びた黄(10YR8/2)	
52	土坑50	72	染付	碗	7.6	3.0	4.1	文様: 鮮やかな紫みの青(7PB5/12)	外面文様: 笹か
53	土坑50	84	染付	碗	8.2	3.0	4.2	文様: こい紫みの青(7.5PB3.5/11)	内面四方襷
54	土坑50	87	染付	碗	8.5	3.1	6.2	文様: 暗い青(2PB3/5)	
55	土坑50	83	染付	碗	10.4	3.7	4.9	釉薬: 黄緑みのうすい灰色(0.5GY8/1.5)	
56	土坑50	80	染付	碗	12.0		(5.0)	釉薬: 白(N9.5)	
57	土坑50	79	染付	蓋	9.4	3.9	2.5	文様: やわらかい青(2.5PB6.5/5.5)	内面四方襷、花
58	土坑50	78	染付	皿	13.1	7.3	3.4	文様: 暗い灰みの青(7.5B4.5/2.5) 赤褐(5YR4/6)	
59	土坑50	71	磁器	小皿	5.1	2.6	1.3	釉薬: 灰白(10Y7/1)	
60	土坑50	86	陶器	椀	8.0	3.0	4.3	文様: 灰(7.5Y6/1)	雨降文
61	土坑50	77	陶器	椀	9.4	4.0	5.7	文様: 暗オリーブ(5Y4/3)	信楽小杉椀
62	土坑50	82	陶器	土瓶	8.4		(12.4)	赤黒(2.5YR2/1)	
63	土坑50	74	陶器	蓋	3.5	3.2	1.8	釉薬: 黒(N1.5/)	
64	土坑50	88	陶器	乗燭	4.8	2.8	2.6	釉薬: 淡黄(5Y8/3)	
65	土坑50	75	陶器	灯明皿	7.0	4.4	2.1	釉薬: オリーブ黄(5Y6/3)	
66	土坑50	89	陶器	皿				にぶい黄橙(10YR7/2)	墨書「十?」
67	土坑50	76	炆器	鉢	25.3	15.0	12.5	灰褐(5YR4/2)	備前
68	土坑50	95	瓦質土器	焙烙	33.2		7.4	黒(N1.5/)	外面煤付着、19世紀前半か
69	土坑51	50	染付	碗	6.0	3.7	5.0	文様: こい紫みの青(6PB3.5/11)	
70	土坑51	39	染付	碗	10.1	3.8	5.3	文様: 暗い青(2PB3/5)	
71	土坑51	40	染付	鉢	12.3	6.5	6.0	文様: 鮮やかな紫みの青(7PB5/12)	
72	土坑51	37	磁器	小皿	4.4	2.2	1.2	うすい灰色(5GY8.5/0.3)	
73	土坑51	38	磁器	小皿	5.4	2.4	1.9	灰白(5Y8/1)	
74	土坑51	47	染付	蓋	8.9	3.6	2.9	文様: 暗い青(2PB3/5)	
75	土坑51	46	染付	蓋	5.4		1.0	文様: 暗い青(2PB3/5)	
76	土坑51	61	陶器	土鍋	17.6	7.0	9.9	釉薬: 赤褐(5YR4/8)	カキ釉
77	土坑51	67	陶器	土鍋	24.0	7.6	11.8	釉薬: つよい黄赤(4YR5/9)	カキ釉
78	土坑51	49	陶器	土瓶	6.9		(8.7)	釉薬: 暗い灰みの黄赤(5YR3/2)	
79	土坑51	44	陶器	徳利	2.2	6.1	15.6	釉薬: オリーブ黄(5Y6/3)	
80	土坑51	48	陶器	徳利		7.7	(16.3)	文様: ごく暗い緑(5G2.5/3)	
81	土坑51	51	陶器	植木鉢	8.4	5.8	6.8	にぶい橙(2.5YR6/4)	
82	土坑51	57	陶器	蓋	18.6		(3.0)	暗い灰みの黄赤(5YR3/2)	
83	土坑51	42	陶器	蓋	8.0	3.0	3.0	文様: 暗い灰みの黄赤(5YR4/4)	上面飛びカンナ模様
84	土坑51	41	陶器	蓋	6.3	4.3	2.0	釉薬: 灰白(5Y7/1)	
85	土坑51	54	炆器	皿	10.0	4.8	1.5	暗い黄赤(2.5YR3.5/7)	備前型押し皿(桜文様)
86	土坑51	55	炆器	皿	9.9	5.8	1.5	暗い黄赤(2.5YR3.5/7)	備前型押し皿(桜文様)
87	土坑51	56	炆器	皿	10.2	5.6	1.6	暗い黄赤(2.5YR3.5/7)	備前型押し皿(桜文様)
88	土坑51	52	炆器	播鉢	(19.7)	8.8	7.2	橙(2.5YR6/6)	備前?
89	土坑51	59	炆器	鉢	10.0	10.9	6.2	暗赤褐(2.5YR3/4)	備前、口縁端面使用痕

掲載 番号	遺構名	実測 番号	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面/文様/釉薬)	備考
					口径	底径	器高		
90	土坑 51	69	炆器	匣鉢	30.1	31.1	10.9	暗赤灰(10R3/1)	内面に牡丹餅6カ所
91	土坑 51	58	土師器	皿	7.6	5.1	1.4	灰白(2.5Y8/1)	
92	土坑 51	43	土師器	皿	8.4	5.4	1.9	灰黄(2.5Y6/2)	
93	土坑 51	60	瓦質土器	火鉢		(13.0)	(7.7)	黒(N1.5/)	
94	土坑 51	45	瓦質土器	火鉢			9.5	黄灰(2.5Y5/1)	
95	土坑 52	15	染付	碗	7.5	3.8	6.8	文様: 暗い青(2PB3/5)	
96	土坑 52	14	染付	碗	9.5	3.4	5.1	文様: こい紫みの青(4.5PB3/7)	焼継、高台内焼継印
97	土坑 52	24	染付	碗	14.3		(5.9)	文様: やわらかい青(2.5PB6.5/5.5)	肥前 17世紀末～18世紀中葉
98	土坑 52	31	磁器	小皿	4.1	1.7	1.4	釉薬: 白(N9.5/)	
99	土坑 52	30	陶器	碗	9.3	3.5	4.9	釉薬: 緑みの明るい灰色(10GY7/1.5)	信楽小杉碗
100	土坑 52	16	陶器	杯	6.0	2.9	3.9	文様: ごく暗い緑(5G2.5/3) 青みの黒(5PB2/1)	京焼系 梅花
101	土坑 52	26	陶器	碗	8.4	3.3	5.0	釉薬: 暗赤褐(5YR3/2)	白土イッチン描き
102	土坑 52	25	陶器	碗	12.7	4.3	5.7	釉薬: 浅黄(2.5Y7/4)	
103	土坑 52	28	陶器	碗	5.5	3.8	4.4	釉薬: 暗い黄(2.5Y4/6)	
104	土坑 52	17	陶器	火入	8.0	8.6	7.2	釉薬: 黄緑みのうすい灰色(0.5GY8/1.5)	
105	土坑 52	27	炆器	皿	20.0	12.6	3.7	赤(10R5/6)	鶏の型押し、畳付に窯印
106	土坑 52	19	炆器	甕	13.0		(8.5)	赤褐(10R4/4)	備前
107	土坑 52	18	炆器	鉢	11.0	5.0	4.8	赤褐(10R4/4)	備前、底面窯印
108	土坑 52	29	炆器	壺		6.0	(13.0)	にぶい褐(7.5YR5/4)	備前人形徳利 18世紀中葉以降、底面窯印
109	土坑 52	36	炆器	匣鉢	31.5	32.2	11.8	赤褐(10R4/4)	口縁煤付着、底面へラ書き菱形模様
110	土坑 52	12	炆器	擂鉢			(6.1)	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	備前
111	土坑 52	23	炆器	擂鉢			(7.5)	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	関西産
112	土坑 52	21	炆器	灯明皿	7.8		1.0	暗褐(7.5YR3/3)	
113	土坑 52	22	炆器	灯明皿	8.8		1.2	にぶい赤褐(5YR4/3)	
114	土坑 52	33	炆器	陶板				にぶい赤褐(2.5YR5/3)	
115	土坑 52	13	土師器	灯明皿	8.8	4.3	1.2	にぶい黄橙(10YR6/3)	口縁内外面油煙付着、底面墨書「七」
116	土坑 54	159	染付	蓋	3.8		(2.4)	文様: 暗緑灰(10G4/1)	内面五弁花文
117	土坑 54	158	磁器	香炉	8.3		7.1	文様: こい紫みの青(7PB2.5/12) 黄みの白(5Y9/0.5)	イッチン描き梅花か
118	土坑 54	161	陶器	蓋	8.5		1.3	釉薬: 黄緑みのうすい灰色(0.5GY8/1.5)	つまみ蟬形穿孔あり、急須の蓋か
119	土坑 54	162	陶器	蓋	5.4		2.8	釉薬: 黄みのうすい灰色(2.5Y8.5/1.5)	蓋物の蓋
120	土坑 54	165	陶器	植木鉢	14.7		(6.1)	灰白(2.5Y7/1)	
121	土坑 54	160	炆器	擂鉢			(9.8)	灰褐(2.5YR5/2)	備前
122	土坑 54	163	炆器	鉢	10.3	10.4	6.1	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	備前、口縁端面油煙付着
123	土坑 54	170	炆器	甕	25.0	17.5	29.1	明赤褐(2.5YR5/6)	備前、沈線 15条
124	土坑 54	164	炆器	灯明皿	7.1	4.3	0.9	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	備前
125	土坑 54	168	土師器	高台付碗	10.9	(4.0)	3.2～3.6	灰白(10YR8/2)	高台3つ
126	土坑 54	167	土師器	高台付碗	10.6	5.0	2.6～3.6	灰白(2.5Y8/1)	高台3つ
127	土坑 54	166	土師器	灯明皿	6.3	3.9	1.2	灰黄(2.5Y7/2)	口縁内外面油煙付着
128	土坑 56	171	染付	蓋	(9.8)	4.1	3.1	文様: こい紫みの青(6PB3/8)	酸化コバルトか
129	土坑 56	173	炆器	鉢	10.8	10.9	6.6	にぶい赤褐(2.5YR5/3)	備前、胴部窯印
130	土坑 56	172	炆器	擂鉢	17.0		(6.1)	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	関西産
131	土坑 57	154	染付	碗		3.9	(4.2)	文様: あざやかな紫みの青(7PB4/10)	銅版転写か「酒酌時…思傳芳…愛容姿」漢詩か
132	土坑 57	153	磁器	碗	9.9	3.3	4.0	文様: ごく暗い緑(5G2.5/3) こい紫みの赤(9.5RP3.5/13) 黒(N1.5/)	イッチン描き
133	土坑 57	155	染付	鉢	9.4	9.6	6.2	文様: こい紫みの青(6PB3/8)	型紙刷りか
134	土坑 57	150	陶器	土瓶	11.0	9.0	13.6	釉薬: 暗い黄みの赤(8R3.5/7)	
135	土坑 57	156	陶器	蓋	5.0		1.1	文様: 暗い青みの緑(10G2.5/5) 黒(N1.5/)	
136	土坑 57	152	炆器	小皿	8.7	4.5	1.4	灰赤(2.5YR6/2)	備前
137	土坑 57	151	炆器	小皿	7.5	3.2	1.1	赤褐(10YR5/4)	備前
138	土坑 59	182	染付	碗	8.3		(6.8)	文様: こい紫みの青(6PB3/8)	焼継
139	土坑 59	181	染付	皿	(22.7)	(13.1)	3.3	文様: 青灰(5B5/1)	焼継、印「キ七九」
140	土坑 59	179	陶器	碗	9.3	2.8	5.1	釉薬: 灰白(2.5Y7/1)	

掲載 番号	遺構名	実測 番号	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面/文様/釉薬)	備考
					口径	底径	器高		
141	土坑 59	180	陶器	鉢	19.0	6.9	7.4	釉薬: 浅黄(5Y7/3) 暗い赤みの黄(1.5Y4.5/5)	
142	土坑 59	184	陶器	火入	(9.4)	(8.0)	8.1	にぶい褐(7.5YR6/3)	口縁端面油煙付着
143	土坑 59	178	陶器	灯明皿	8.7	3.2	1.7	釉薬: 灰白(2.5Y7/1)	沈線 3条、内外面油煙付着
144	土坑 59	176	陶器	灯明皿	11.2	4.0	2.3	釉薬: 灰白(2.5Y7/1)	沈線 3条、外面油煙付着
145	土坑 59	177	炆器	火鉢			(12.3)	明赤褐(2.5YR5/6)	備前、方形の隅部分
146	土坑 59	183	炆器	灯明皿	9.0	4.3	0.9	赤褐(10R4/4)	備前
147	土坑 60	195	染付	碗	9.5	3.5	5.6	文様: やわらかい青(2P6.5/5.5)	
148	土坑 60	200	染付	碗	9.6	4.4	5.0	文様: つよい緑みの青(4B4/6)	
149	土坑 60	208	染付	碗	9.7	5.6	3.8	文様: こい紫みの青(7.5PB3.5/11)	焼継、印「五五三 三九」
150	土坑 60	203	染付	碗	9.2	4.5	5.6	文様: 暗い青(2PB3/5)	焼継
151	土坑 60	194	染付	碗	10.2	4.1	5.9	文様: つよい青(3PB4/7.5)	焼継、印「イ六八 八九一 キ三」
152	土坑 60	197	染付	蓋物	11.9	6.2	6.5	文様: つよい青(3PB4/7.5)	口縁内面釉なし
153	土坑 60	206	染付	碗		5.0	(3.3)	文様: ごく暗い青(2PB2/3.5)	焼継、印「?六」
154	土坑 60	198	染付	段重	12.2	7.8	5.4	文様: つよい青(3PB4/7.5)	焼継、印「九?」
155	土坑 60	196	染付	皿	13.8	8.6	3.9	文様: 暗い青(2PB3/5)	焼継、印「六二七」
156	土坑 60	209	染付	小皿	7.0	4.9	1.3	文様: 暗い青(2PB3/5)	
157	土坑 60	199	染付	小皿	6.9	4.6	1.2	文様: 暗い青(2PB3/5)	
158	土坑 60	211	染付	皿	9.8	6.5	1.5	文様: 暗い灰みの青(10B3.5/2.5) こい紫みの青(6PB3/8)	
159	土坑 60	201	染付	蓋	10.0	5.4	3.0	文様: 鮮やかな緑みの青(2.5B5/8)	
160	土坑 60	212	染付	蓋	8.8	3.3	3.1	文様: つよい青(3PB4/7.5)	
161	土坑 60	205	染付	皿	(31.8)	15.0	5.3	文様: こい紫みの青(7.5PB3.5/11)	焼継
162	土坑 60	224	白磁	髪油壺		5.0	(4.3)	素地: ごくうすい緑みの青(2B8.5/2)	
163	土坑 60	207	染付	蓋物蓋	6.9		2.2	文様: 暗い灰みの青(7.5B4.5/2.5)	焼継、印「?十」
164	土坑 60	221	青磁	仏花瓶	8.3	5.8	15.4	釉薬: うすい緑(1.5G8.5/4)	
165	土坑 60	229	陶器	杯	(5.9)	2.8	(3.5)	釉薬: 暗赤褐(5YR3/2)	高台内刻印「志戸呂」
166	土坑 60	219	陶器	椀	6.9	4.8	5.2	オリーブ黄(7.5Y6/3)	白土イッチン描き
167	土坑 60	215	陶器	椀	8.0	2.7	4.4	文様: 暗緑灰(7.5GY3/1)	167～169同じ製品
168	土坑 60	230	陶器	椀	8.2	2.5	4.6	文様: 暗い灰みの黄緑(9.5Y4.5/3)	
169	土坑 60	218	陶器	椀	8.1	2.7	4.5	文様: オリーブ黒(10Y3/1)	口縁～体部 深緑色の釉
170	土坑 60	204	陶器	皿	12.7	6.4	3.2	淡黄(2.5Y8/3)	内外面刷毛目文様
171	土坑 60	192	陶器	鉢		8.8	(6.4)	文様: 浅黄橙(10YR8/3)	内面刷毛目文様
172	土坑 60	223	陶器	土鍋	14.9	6.4	7.3	釉薬: つよい黄赤(4YR5/9)	内面カキ釉
173	土坑 60	210	陶器	蓋	1.6		1.5	釉薬: 赤褐(2.5YR4/6)	イッチン描き、小瓶蓋
174	土坑 60	225	陶器	水差	7.0	8.3	9.5	浅黄(5Y7/3)	注口未確認
175	土坑 60	214	陶器	土瓶	8.1	8.0	(13.7)	文様: 灰白(2.5Y8/1) 暗オリーブ灰(5GY4/1)	外面肩部に花木と風景(山水か)
176	土坑 60	226	陶器	徳利		8.5	(17.7)	極暗赤褐(5YR2/4)	外面底部に「新安」印
177	土坑 60	227	陶器	水鉢	22.0		(10.5)	灰オリーブ(5Y5/3)	
178	土坑 60	228	陶器	植木鉢	7.2	4.5	6.4	にぶい黄(2.5Y6/4)	外面手書き横線 6本
179	土坑 60	213	陶器	仏花瓶	15.0		(12.8)	釉薬: にぶい黄(2.5Y6/3)	内外面全体に施釉
180	土坑 60	217	陶器	神酒徳利		5.5	(7.2)	釉薬: 黒(7.5YR2/1)	
181	土坑 60	202	陶器	皿	9.3	3.3	1.6	浅黄(2.5Y7/3)	灯明皿か
182	土坑 60	220	陶器	皿	7.9	6.1	0.8	にぶい橙(7.5YR7/3)	内面木目押型、底面墨書
183	土坑 60	186	炆器	鉢	9.5	9.4	6.1	灰赤(7.5R5/2)	備前、口縁端面使用痕
184	土坑 60	189	炆器	鉢	(11.0)	(10.3)	6.3	赤灰(7.5R5/1)	備前、口縁端面油煙付着
185	土坑 60	188	炆器	鉢	11.7	12.5	7.1	灰赤(10R6/2)	備前、外面窯印
186	土坑 60	187	炆器	播鉢	(28.4)	15.5	10.5	褐灰(7.5YR4/1)	関西産
187	土坑 60	193	炆器	甕	27.7		(28.0)	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	備前か
188	土坑 60	190	炆器	徳利		6.1	(14.8)	にぶい赤褐(7.5YR5/4)	備前か、底面窯印「吉」
189	土坑 60	191	炆器	陶板				にぶい赤褐(2.5R5/4)	備前

掲載 番号	遺構名	実測 番号	種別	器種	計測値(cm)			色調(外面/文様/釉薬)	備考
					口径	底径	器高		
190	土坑 60	222	土師器	香炉	(9.6)	5.1	4.7	灰白(10YR8/2)	
191	土坑 60	216	土師器	埴埴	(3.4)		4.8	灰(5Y4/1)	
192	溝 2	111	炆器	壺		4.6	(6.8)	にぶい赤褐(2.5YR5/3)	備前
193	溝 2	110	炆器	壺		3.2	(6.1)	にぶい赤褐(2.5YR5/3)	備前、線状の押さえは3か所
194	溝 2	112	土師器	皿	9.7	7.1	1.5	灰白(2.5Y8/2)	
195	溝 3	106	染付	碗	11.6	4.8	(6.1)	文様: 緑灰(10GY5/1)	豊付砂付着
196	溝 3	107	染付	碗	(10.0)		(4.3)	釉薬: うすい灰 (5GY8.5/0.3)	
197	溝 3	174	染付	碗	(9.8)	4.1	6.0	釉薬: 明緑灰(10GY8/1)	
198	溝 3	175	陶器	椀	11.5	4.9	7.9	淡黄(2.5Y8/4)	京焼系
199	溝 3	105	陶器	椀	10.0		(6.2)	灰白(10YR8/2)	京焼系
200	溝 3	104	陶器	椀		4.9	(4.5)	灰白(10YR8/2)	京焼系

瓦

掲載 番号	遺構名	実測 番号	種別	文様 (軒丸)	珠文数 (軒丸)	中心飾 (軒平)	唐草 (軒平)	計測値(cm)			色調		備考
								最大長	最大幅	最大厚	外面	内面	
R1	井戸 1	142	棧瓦								灰(N4/)	灰(N4/)	
R2	土坑 50	90	軒丸瓦	右三巴	15				13.2	1.9	灰(N4/)	灰白(5Y7/1)	キラコ
R3	土坑 50	91	軒丸瓦	左三巴	(12)				13.1	2.2	灰(N4/)	灰(N4/)	
R4	土坑 50	92	軒平瓦			宝珠	2 転		23.9	1.7	暗灰(N3/)		
R5	土坑 50	100	丸瓦					23.8	12.6	1.3	灰(N4/)	灰(N5/)	
R6	土坑 50	93	平瓦					25.7	(21.5)	1.9	灰(N4/)	灰(N4/)	
R7	土坑 50	99	熨斗瓦					14.0	(10.9)	1.5	灰(N4/)	灰(N4/)	
R8	土坑 51	53	軒丸瓦	右三巴	(12)				(12.5)	1.8	灰(N4/)	灰(N4/)	
R9	土坑 51	65	軒丸瓦		(12)						灰(N4/)	灰(N4/)	
R10	土坑 51	62	軒平瓦			右三巴	2 転か			1.9	灰(N4/)	灰(N4/)	
R11	土坑 51	64	軒平瓦				3 転か			1.2	暗灰(N3/)	暗灰(N3/)	16世紀代か
R12	土坑 51	66	丸瓦					(14.7)	12.5	1.8	灰(N4/)	灰(N4/)	
R13	土坑 51	97	平瓦					(19.9)	(17.5)	1.6	灰(5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	
R14	土坑 52	35	軒丸瓦	右三巴	12			25.5	13.1	1.8	暗灰(N3/)	暗灰(N3/)	
R15	土坑 52	34	軒丸瓦	右三巴	(12)				13.0	1.8	暗灰(N3/)	暗灰(N3/)	
R16	土坑 52	101	丸瓦					24.2	12.6	1.7	灰白(2.5Y7/1)	灰(N4/)	
R17	土坑 52	103	平瓦					26.1	(18.2)	1.6	灰(N4/)	灰(N4/)	陶印(○の中にー)、 凹面煤付着
R18	土坑 54	169	軒丸瓦	左三巴							暗灰(N3/)	暗灰(N3/)	
R19	土坑 57	157	鳥衾					(8.2)	(2.8)		灰(N4/)	灰(N4/)	鳥衾の先端部分か
R20	土坑 60	254	軒丸瓦	左三巴	12				13.0	2.0	灰(N5/)	灰(N4/)	キラコ微量
R21	土坑 60	252	軒丸瓦	左三巴	12				12.1	2.1	暗灰(N3/)	灰(N4/)	
R22	土坑 60	253	軒平瓦								灰(N4/)	灰(N4/)	文様不明
R23	土坑 60	251	平瓦					25.1	22.0	1.8	灰(N4/)	暗灰(N3/)	

木製品

掲載 番号	遺構名	実測 番号	器種	計測値(mm) ※下()は椀・皿の計測部位			備考
				最大長(口径)	最大幅(底径)	最大厚(器高)	
W1	土坑 9	W1	鋤	(1350)	(171)	38.0	完形、身の右先端は脆弱で実測できず
W2	土坑 50	W5	部材	77.7	49.5	12.3	釘2か所残、痕跡4か所
W3	土坑 51	W6	椀	(113)		(42)	外面黒漆に赤漆文様、内面赤漆
W4	土坑 51	W2	曲物底板	105.7	90.0	6.8	
W5	土坑 51	W9	柄杓(側)	108.8	36.5	3.3	柄、底板欠損
W6	土坑 51	W3	部材	80.1	67.0	4.2	提灯部品か
W7	土坑 51	W4	戸車	32.4	31.6	7.7	墨書か使用痕
W8	土坑 51	W7	札	(135.0)	3.0	3.4	墨書片面
W9	土坑 51	W8	札	94.0	20.5	3.4	墨書片面
W10	土坑 52	W10	椀	(39)	(117)	14.0	外面黒漆、内面赤漆
W11	土坑 52	W11	高台付皿	6.6	4.0	1.9	外面黒漆に金で文様、内面赤漆
W12	土坑 52	W13	札	72.6	23.2	4.6	墨書片面
W13	土坑 52	W14	札	(82.1)	21.3	4.8	墨書片面
W14	土坑 52	W12	札	141.7	61.0	3.6	墨書?両面
W15	土坑 54	W17	高台付皿	9.3	4.9	2.4	外面黒漆、内面赤漆
W16	土坑 54	W18	高台付皿	(138)	64.0	(19)	内外面黒漆
W17	土坑 54	W19	札	135.4	22.0	6.0	墨書片面
W18	土坑 55	W33	柄杓底板	104.8	90.9	8.1	W18・19で1つの柄杓か

掲載 番号	遺構名	実測 番号	器種	計測値(mm) ※下() は柄・皿の計測部位			備考
				最大長(口径)	最大幅(底径)	最大厚(器高)	
W19	土坑 55	W33	柄杓(側)	96.7	37.0	3.1	W18・19で1つの柄杓か
W20	土坑 57	W16	椀	(111)	48.0	(46)	外面赤・黒漆、内面黒漆
W21	土坑 57	W15	札	99.4	25.7	4.4	墨書両面 朱・黒
W22	土坑 59	W24	底板	(85.8)	111.4	7.3	中央穿孔、3方溝、釘痕跡1か所あり
W23	土坑 59	W26	部材	75.6	60.4	15.1	中央穿孔と釘、墨書あり 人形部品か
W24	土坑 59	W28	柄杓(側)	74.7	53.3	2.5	柄、底板欠損
W25	土坑 59	W25	ハケ	87.8	136.1	10.7	2枚貼り合わせ、柄に穿孔、毛固定部分3列溝切り・穿孔
W26	土坑 59	W27	茶筌	(47.9)	(21.2)	(12.5)	先端欠損、黒漆塗り
W27	土坑 59	W21	札	(152.4)	(62.3)	5.0	墨書両面
W28	土坑 59	W20	部材	(85.7)	63.2	2.0	墨・朱・金色あり 塗り部材か
W29	土坑 59	W22	下駄	224.0	71.0	26.0	歯の一部、接続のための釘残存
W30	土坑 60	W31	曲物底板	130.0	(67.0)	6.0	一部焼失、炭化
W31	土坑 60	W32	曲物底板	105.3	88.3	5.2	
W32	土坑 60	W29	部材	(43.6)	62.2	4.1	片面「極」焼印
W33	土坑 60	W23	櫛	21.9	(65.4)	4.0	歯厚0.8mm、歯長8.4～14.2mm

金属製品

掲載 番号	遺構名	実測 番号	器種	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
M1	包含層	M1	鉄鏃	105.0	12.5	11.6	11.8	鉄	先端欠損か
M2	井戸 2	M28	コンパス	85.5	55.8	10.7	17.9	真鍮?	針欠損、鉛筆をネジ止め
M3	土坑 50	M36	金具	61.1	(32.3)	2.5	2.8	銅	菊花文様、穿孔あり
M4	土坑 50	M5	銅銭	23.6		1.1	2.7	銅	寛永通宝(新寛永) 元禄期(荻原銭) か
M5	土坑 50	M34	釘	66.2	6.4	4.2	5.1	鉄	頭部欠損か
M6	土坑 51	M33	釘	70.7	6.8	6.4	5.1	鉄	頭部欠損か
M7	土坑 51	M32	釘	42.0	5.7	4.3	1.6	鉄	ほぼ完形
M8	土坑 52	M3	金具	42.3	41.5	5.6	15.9	鉄	半月形
M9	土坑 52	M2	金具	52.5	38.0	3.5	17.5	鉄	半月形
M10	土坑 52	M4	鉄銭	23.5		1.4	2.4	鉄	寛永通宝(新寛永) 銭影不鮮明
M11	土坑 54	M16	釘	59.6	9.4	5.8	3.6	鉄	完形
M12	土坑 54	M18	金具	51.4	10.3	10.0	8.4	鉄	1枚の板を折り曲げる
M13	土坑 54	M20	釘	33.6	8.7	4.2	1.3	鉄	完形
M14	土坑 54	M22	鋌前	62.5	34.9	11.8	23.8	鉄	鍵穴部・シリンダー部欠損
M15	土坑 54	M31	銅銭	23.6		2.5	1.7	銅	寛永通宝(新寛永) 銭影不鮮明
M16	土坑 54	M30	銅銭	25.2		1.1	3.1	銅	寛永通宝(新寛永)
M17	土坑 57	M7	鏝	37.8	4.4	3.1	2.0	鉄	完形
M18	土坑 57	M8	釘	(40.2)	5.3	3.1	1.6	鉄	完形
M19	土坑 57	M13	釘	68.6	10.2	5.6	5.1	鉄	完形
M20	土坑 57	M10	釘	76.1	7.5	6.9	5.9	鉄	完形
M21	土坑 57	M14	金具	93.6	54.6	2.2	38.9	鉄	U字形、鋌2つ残
M22	土坑 57	M9	金具	41.4	9.9	12.7	5.1	鉄	ピン状金具
M23	土坑 57	M12	金具	52.9	12.3	2.6	5.6	鉄	不明金具、木質残る
M24	土坑 57	M11	金具	36.3	26.6	5.2	12.8	鉄、銅	円盤に軸を通し回転する部品
M25	土坑 57	M29	銅銭	25.0		1.3	3.1	銅	寛永通宝(新寛永)
M26	土坑 60	M23	釘	75.5	6.6	5.7	10.0	鉄	完形
M27	土坑 60	M24	釘	(54.2)	(6.3)	7.0	4.4	鉄	上下欠
M28	土坑 60	M25	金具	38.4	5.0	4.8	1.9	銅	管状の部品
M29	土坑 60	M26	鋌	25.5	10.0	2.7	0.9	銅	完形
M30	溝 1	M6	銅銭	24.6		1.4	3.3	銅	寛永通宝(古寛永)

石製品

掲載 番号	遺構名	実測 番号	器種	計測値(mm)			重量 (g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
S1	包含層	4	石包丁	(38.3)	29.5	7.0	12.25	刃部使用痕
S2	包含層	12	石鏃	10.8	13.0	2.8	0.57	
S3	包含層	11	石鏃	30.0	13.3	4.6	1.85	完形
S4	包含層	2	使用痕のある剥片	33.2	49.3	3.7	9.14	
S5	井戸 1	3	砥石	(40.0)	(38.9)	(4.65)	9.89	破片
S6	井戸 2	10	滑石置物	(111.1)	59.4	(44.2)	326.61	「岩崎(鏡文字)」 「玉」 「K小」 掘り込み
S7	土坑 51	1	砥石	234.0	66.6	44.4	1456.46	完形
S8	土坑 54	9	砥石	(138.8)	74.1	22.0	307.96	破片
S9	土坑 57	6	石板	(136.7)	220.0	4.0	246.28	裏面「廣坂通り河合小鈴」掘り込み
S10	土坑 57	5	石臼(上臼)	(241.5)	(137.7)	87.2	3510	約1/3の破片
S11	土坑 60	8	砥石	(66.0)	35.0	(11.0)	35.65	破片

土製品

掲載 番号	遺構名	実測 番号	器種	計測値(mm)				重量 (g)	色調	備考
				最大長	最大幅	最大厚	孔径			
C1	包含層	C10	土鍾	52.8	11.1		3.0	6.10	にぶい黄橙(10YR6/3)	完形
C2	包含層	C11	土鍾	(24.0)	9.1		3.6	1.87	にぶい橙(5YR7/4)	
C3	井戸2	C45	人形	(45.6)	(34.8)	(10.3)		13.13	黄みの白(2.5Y9.2/0.5)	首から上と胴から下欠損
C4	土坑50	C16	瓦道具	53.0		12.0		44.96	灰白(N8/)	平瓦転用
C5	土坑51	C5	人形	(39.5)	36.0	19.0		17.19	くすんだ緑(4G5/4) 暗い黄赤(10R4/7)	天神様か、頭部欠損
C6	土坑51	C4	人形	(34.5)	29.0	20.0		12.16	にぶい橙(7.5YR7/3)	白色釉、頭部欠損
C7	土坑51	C7	土瓶	45.0	62.0	5.5		58.70	暗い灰みの緑(4G4/3.5) にぶい黄橙(10YR7/3)	底面墨書「上ヤ」、注口・把手1欠損
C8	土坑51	C3	人形	(40.0)	(47.0)			9.84	にぶい黄橙(10YR7/2)	内外面キラコ、全体白色
C9	土坑51	C2	人形	36.2	23.3	8.6		5.28	暗い灰みの緑(4G/3.5)	亀形、緑釉
C10	土坑51	C6	箱庭道具	(48.0)	58.0	39.0		34.46	灰黄(2.5Y6/2)	藁葺民家、下部欠損
C11	土坑51	C1	陶器	(26.5)	(26.5)			3.76	黄褐(2.5Y5/3)	墨書、形状不明
C12	土坑52	C9	人形	(37.0)	(25.0)			8.94	灰白(10YR8/2)	袋を担ぐ人形
C13	土坑52	C8	面模	49.3	47.0	14.8		23.07	灰黄褐(10YR5/2)	陣羽織姿の猿の土人形型
C14	土坑53	C36	土鍾	(40.1)	10.0		3.5～3.55	4.44	橙(2.5YR6/6)	
C15	土坑54	C31	人形	65.0	53.0	36.6		41.07	にぶい黄橙(10YR7/2)	狛犬か、胡粉付着
C16	土坑54	C32	人形	(34.7)	39.2	35.1		25.47	釉薬: 暗い灰みの黄赤(10R3/3.5) 黒(N1/) 金色 素地: 灰白(2.5Y8/1)	首～頭部破損以外は完形
C17	土坑57	C21	人形	(33.5)	25.0	16.0		8.04	にぶい黄橙(10YR7/3)	狐、頭部欠損
C18	土坑57	C30	箱庭道具	(28.1)	(43.6)	(29.0)		20.91	灰白(10YR7/1)	藁葺民家、下部欠損
C19	土坑57	C27	泥面子	38.3	28.4	12.8		12.82	橙(5YR6/6)	鬼面
C20	土坑57	C26	泥面子	28.9	27.0	12.3		7.13	橙(5YR6/6)	布袋面
C21	土坑57	C19	泥面子	(22.0)	18.0	9.0		3.26	にぶい橙(5YR6/4)	翁面か、上下両端欠損
C22	土坑57	C25	泥面子	(23.0)	19.5	10.0		2.86	灰黄褐(10YR6/2)	猿または狐面か 上部欠損
C23	土坑57	C28	箱庭道具	30.3	20.5	10.0		4.09	釉薬: ごく暗い緑(3G2.5/2.5) 素地: 橙(5YR6/6)	天守閣形 表のみ施釉 上端一部欠損
C24	土坑57	C20	泥面子	(37.0)	19.9	9.5		6.27	にぶい橙(5YR6/4)	鯛形か、尾びれ欠損
C25	土坑57	C23	泥面子	20.7	13.9	5.5		1.76	にぶい赤褐(5YR5/4)	草履形
C26	土坑57	C22	泥面子	20.4	22.9	5.0		2.86	にぶい橙(7.5YR6/4)	おはじき形か
C27	土坑57	C29	泥面子	17.5	17.5	7.0		2.14	にぶい褐(7.5YR5/3)	おはじき形か
C28	土坑57	C24	泥面子	(19.7)	19.0	4.5		1.89	灰黄褐(10YR6/2)	人物座像か
C29	土坑57	C18	泥面子	18.5	(29.5)	6.0		2.81	にぶい橙(5YR6/4)	不明
C30	土坑59	C33	ままごと道具	(44.2)	35.4	13.5		13.67	釉薬: 暗い灰みの緑(1.5G3/2.5) 素地: 浅黄橙(7.5YR8/3)	壺形、首欠損
C31	土坑59	C35	人形	(22.0)	(21.7)	(5.5)		13.67	釉薬: にぶい黄(2.5Y6/4) 素地: にぶい黄橙(10YR7/3)	亀形、頭部欠損
C32	土坑60	C34	人形	(54.5)	61.0	31.5		48.12	浅黄橙(7.5YR8/4)	泥天神、首欠損

ガラス製品

掲載 番号	遺構名	実測 番号	器種	計測値(cm)			色調	備考
				口径	底径	器高		
G1	井戸2	G3	ラムネ瓶	1.6	4.0	19.1	やわらかい緑みの青(3B7/4.5)	完形、胴部に文字(上)「岡山」右から横書き、(下)「山陽」縦書き



1 調査区北側 弥生時代全景（北から）



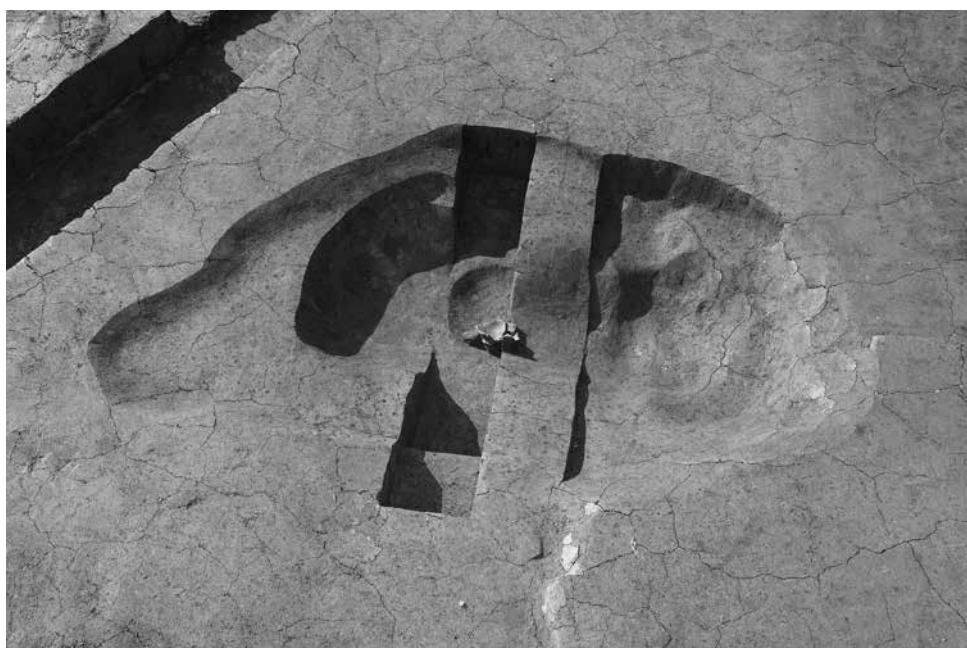
2 調査区南側 弥生時代全景（北から）



1 土坑 11 断面
(北から)



2 土坑 11 完掘
(北から)

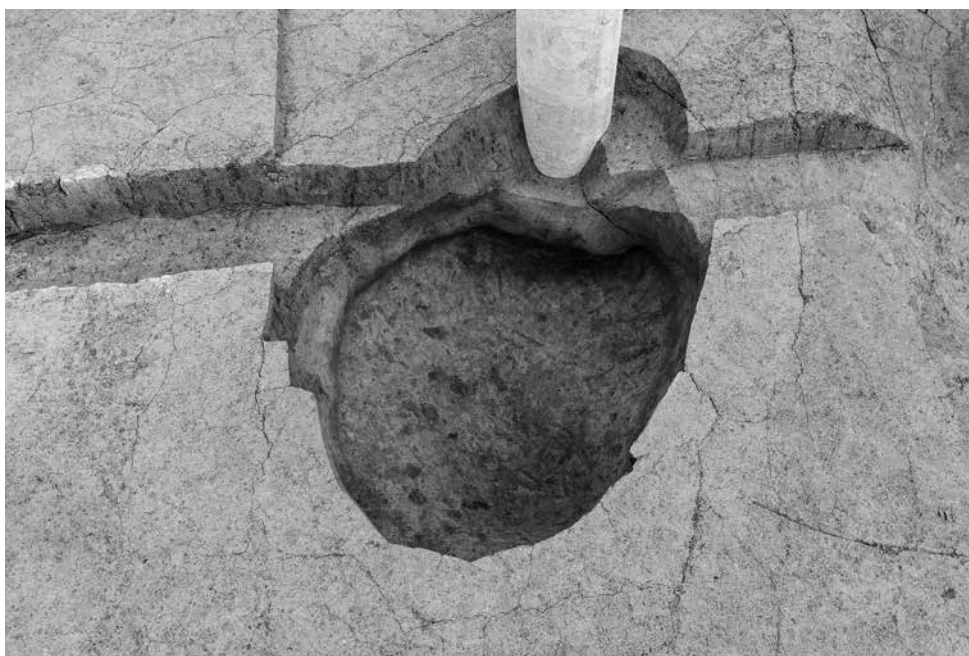


3 土坑 14
(東から)

1 土坑 35 断面
(北から)



2 土坑 35 完掘
(北から)



3 土坑 47
遺物出土状況
(東から)

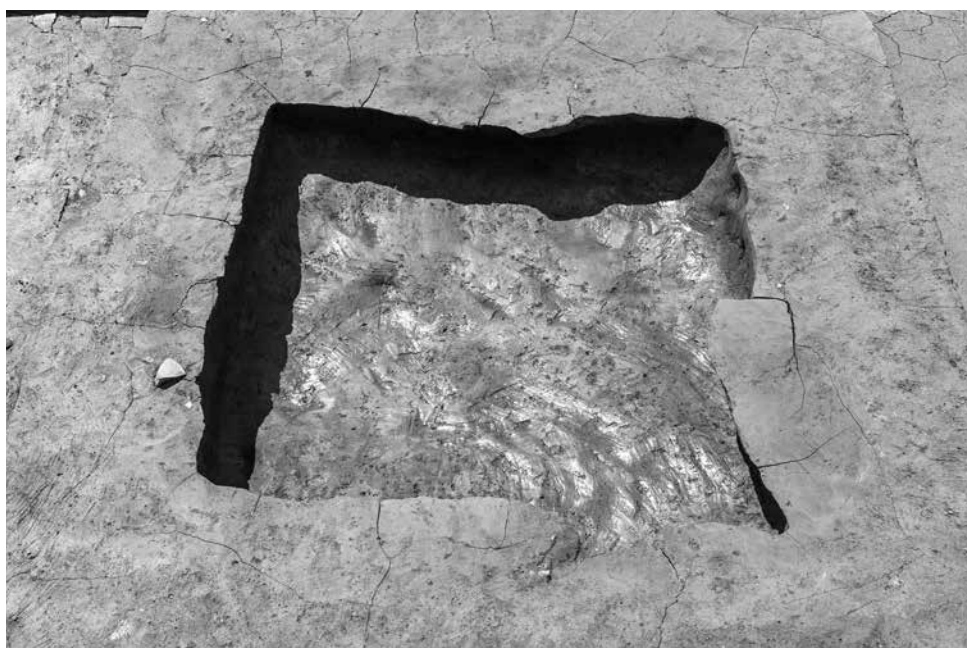




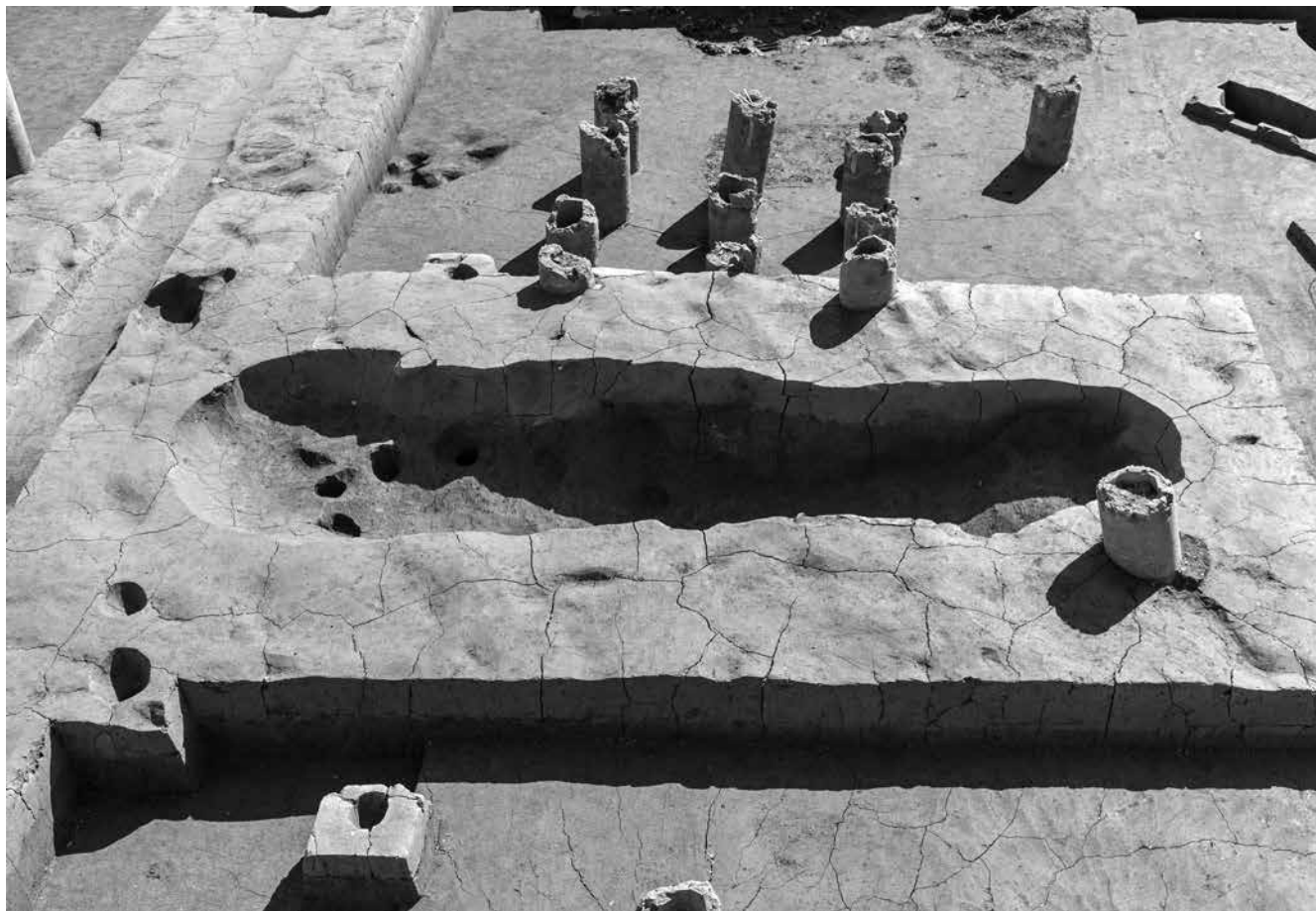
1 井戸 1
(南から)



2 井戸 2
(南から)



3 土坑 52
(北から)



1 土坑 51 (北から)



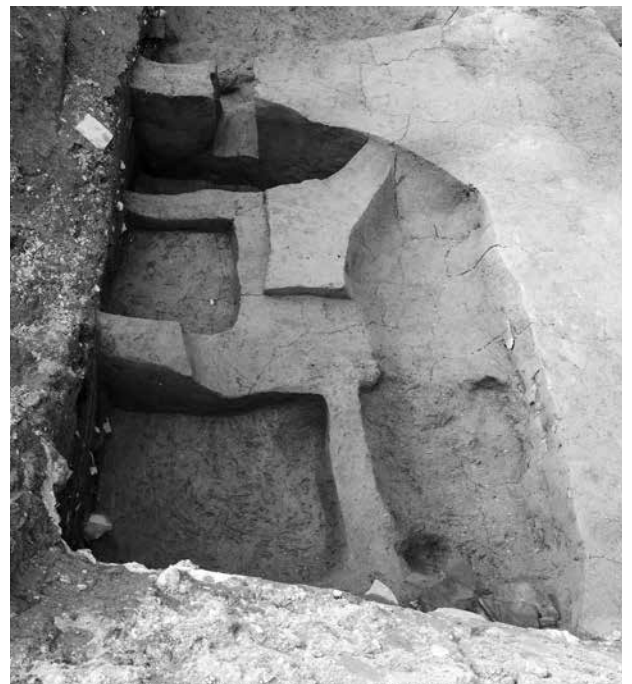
2 土坑 54 (東から)



1 土坑 57 (北から)



2 土坑 59 (北から)



3 土坑 60 (東から)



土坑 14・17・24・47・48、包含層出土遺物（弥生・古墳時代）



土坑 9、井戸 2、土坑 50・51 出土遺物

土坑 51



W 9

C 8

土坑 52



95



104



R 14



109



C 13



W 12



W 13



W 14

土坑 54



122



W 17



C 15

土坑 57



133



W 21



C 17



C 18



C 19



C 20



C 22

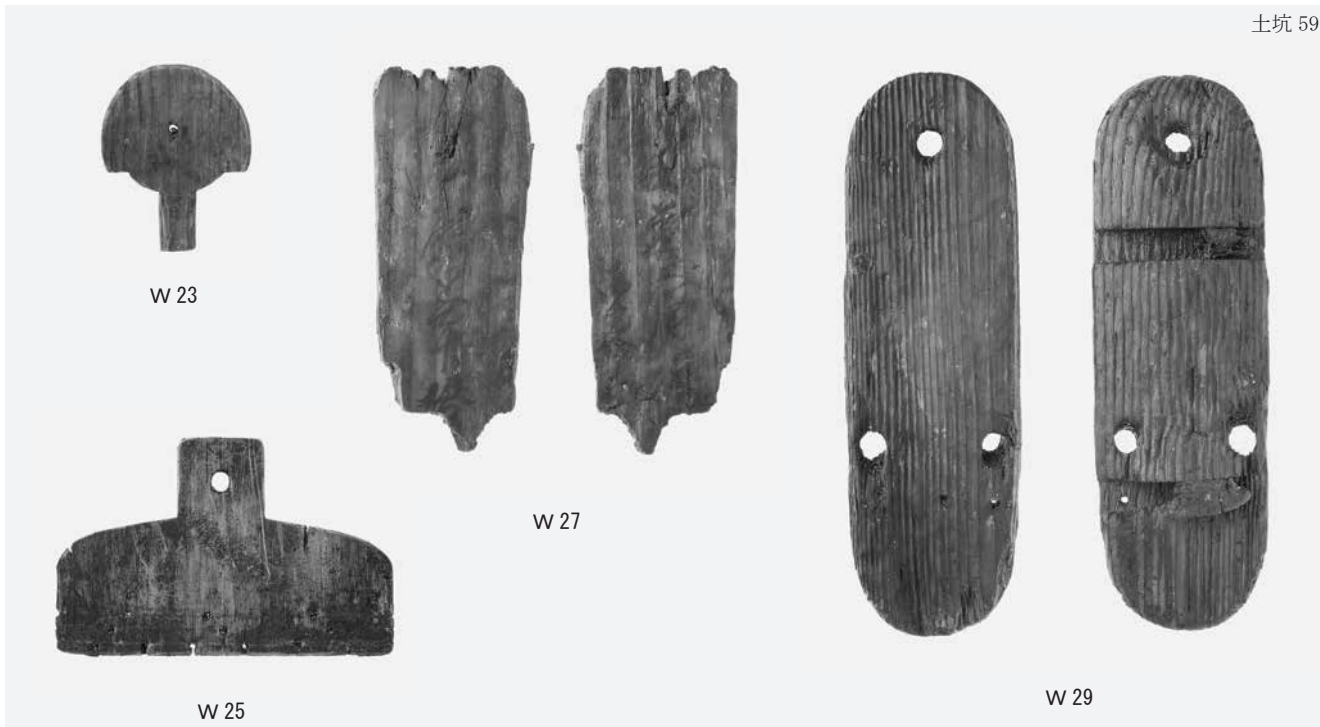


C 24



C 25

土坑 59



土坑 60



土坑 59・60、溝 2 出土遺物

報告書抄録

ふ り が な		みなみかたいせき						
書 名		南方遺跡						
副 書 名		岡山地方法務局本局庁舎新営に伴う埋蔵文化財発掘調査						
シ リ ー ズ 名		岡山県埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号		263						
編 著 者 名		氏平昭則 柴田英樹 富岡直人 パリノ・サーヴェイ株式会社						
編 集 機 関		岡山県古代吉備文化財センター						
所 在 地		〒 701-0136 岡山県岡山市北区西花尻 1325-3 TEL 086-293-3211 FAX 086-293-0142 URL https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/						
発 行 機 関		岡山県教育委員会						
所 在 地		〒 700-8570 岡山県岡山市北区内山下 2-4-6 TEL086-224-2111						
発 行 年 月 日		2023 年 3 月 17 日						
所 収 遺 跡 名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
みなみかたいせき 南方遺跡	おかやまけん 岡山県 おかやまし 岡山市 きたくみなみがた 北区南方 1-3-58 ほ か	33101	332011499	34° 40′ 18″	133° 55′ 27″	20210524 ～ 20220228	1, 310	記録保 存調査
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
南方遺跡	集落	弥生時代後期	土坑 49 基		弥生土器、鋤、石包丁、石鏃、須恵器、土師器、青磁、鉄鏃		調査区の西側半分で弥生時代後期の土坑群検出	
		江戸時代～近代	井戸 2 基、土坑 11 基、溝 3 条		陶磁器、土師器		江戸時代後半から近代に至る屋敷地	
要約	弥生時代後期後葉～末葉の土坑 49 基は調査区西半分に偏り、基盤層が低くなっている窪地に主に分布している。土坑のうち 46 基は掘削直後に埋め戻されたような埋没状況で、基盤層の土壌を採掘したものと考えられる。土坑の 1 基からはほぼ完形品の一木造りの平鋤が出土している。窪地は土坑群のある調査区西側と南東～南側の 2 か所に分かれ、自然地形である可能性が高い。窪地以外の基盤層上面ではピットを 5 基検出した。 江戸時代から近代で検出した遺構は、井戸 2 基、土坑 11 基、溝 3 条とピットである。調査区西端を南北に流れる溝と調査区内で東西に並ぶピット群が、文久元（1861）年に描かれた絵図『備前岡山地理家宅一枚図』の水路と屋敷境と照合できる。土坑の一部は洪水で埋没した様子を表していた。遺物は染付、備前焼など 18 世紀後半から 19 世紀代のものが多く、近代の遺物の中には学校で使用された石盤やコンパスもあった。							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 263

南 方 遺 跡

岡山地方方法務局本局庁舎新営
に伴う発掘調査

令和5年3月10日 印刷

令和5年3月17日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻 1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下 2-4-6

印刷 株式会社 中野コロタイプ
岡山県岡山市北区玉柏 390